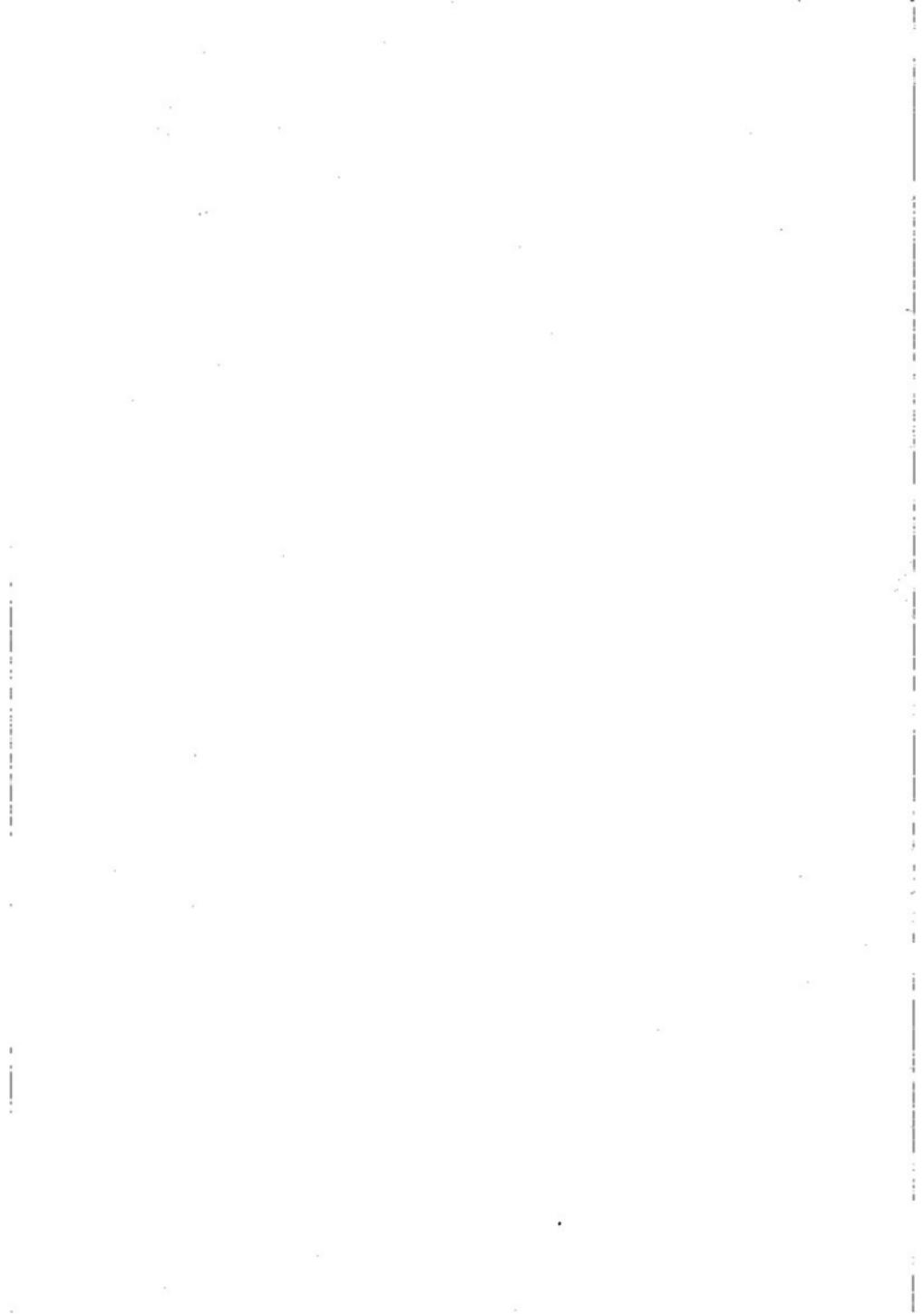


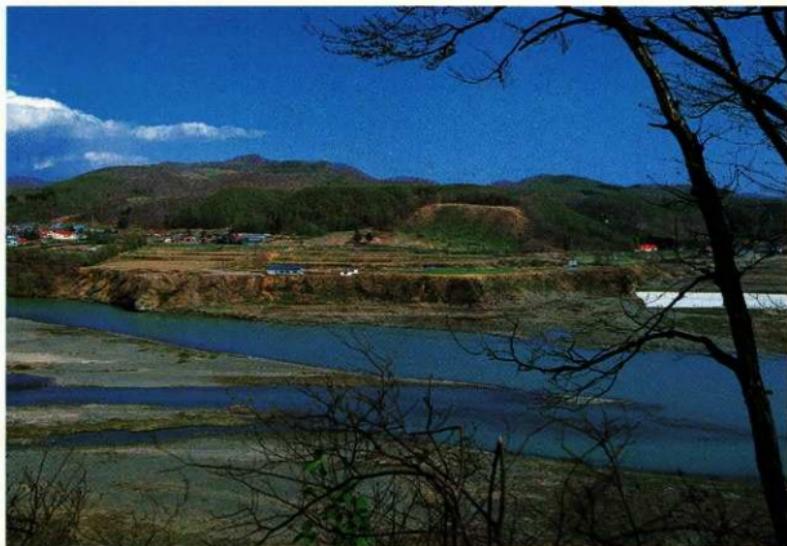
ユオイチャシ跡  
ポロモイチャシ跡  
二風谷遺跡

—沙流川総合開発事業（二風谷ダム建設用地内）  
埋蔵文化財発掘調査報告書—

昭和58・59・60年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター





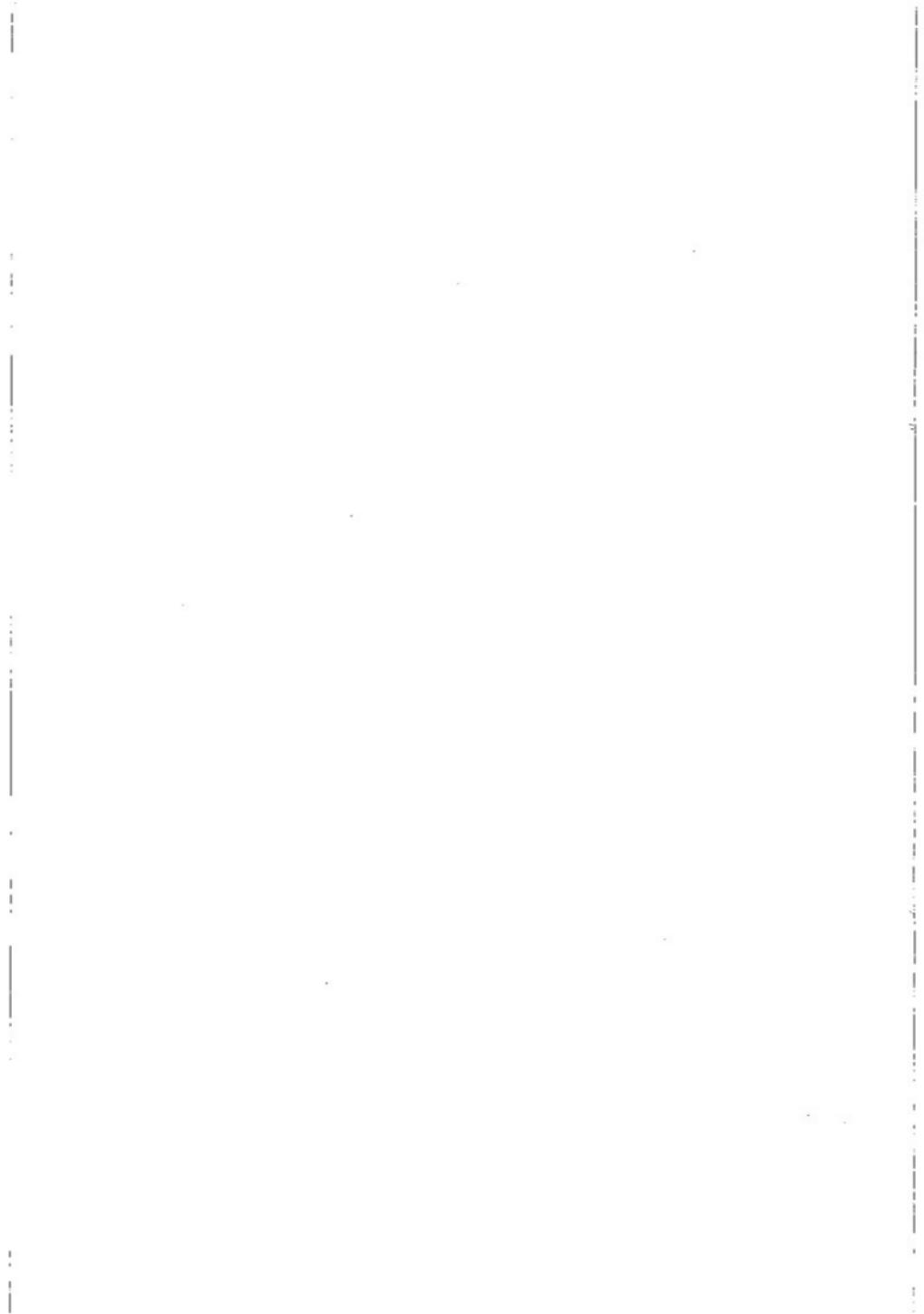
沙流川対岸から望む遺跡全景



ボロモイチャシ跡出土絵唐津大皿



二風谷遺跡 1号墓漆器出土状況



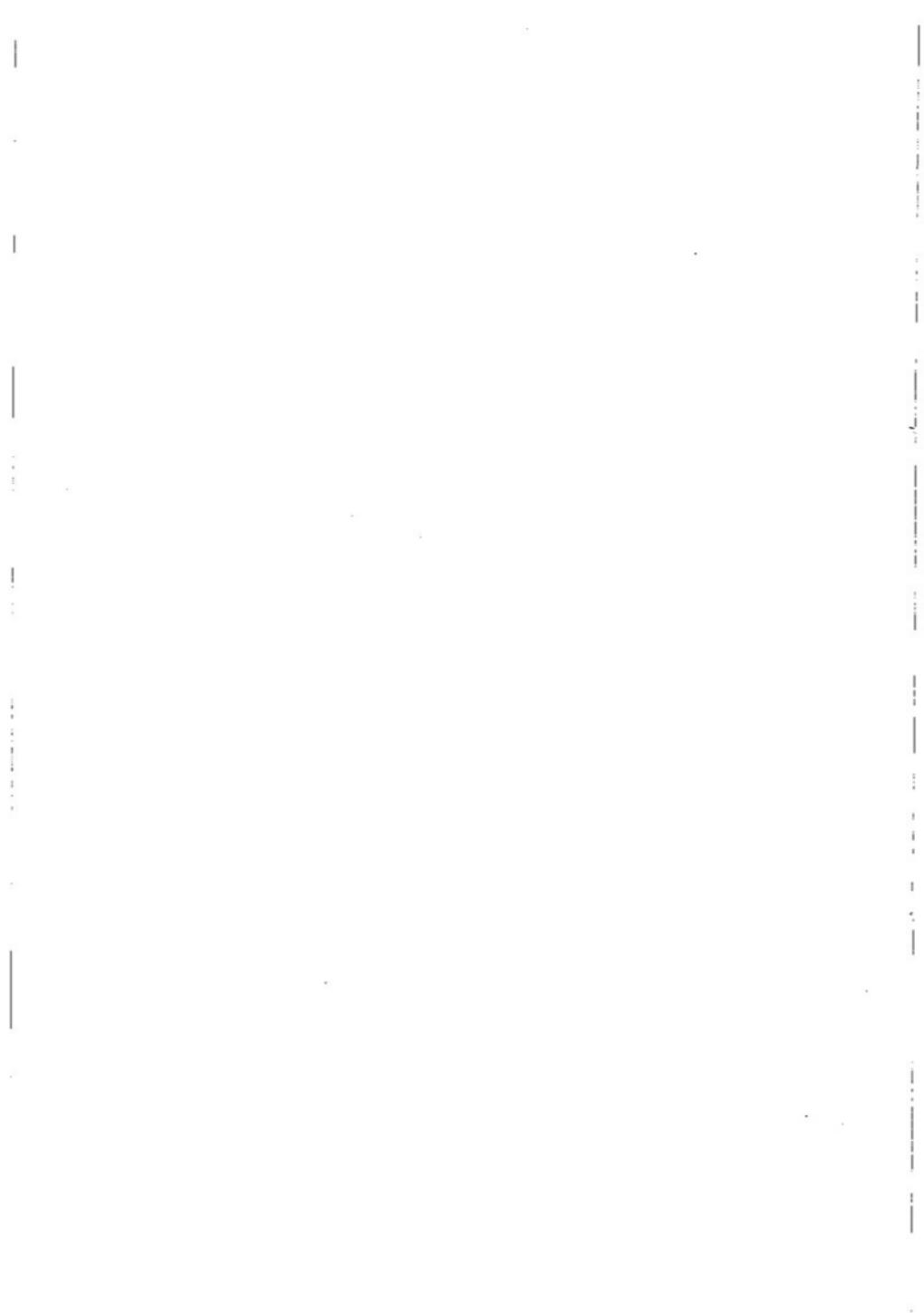
平取町

ユオイチャシ跡  
ポロモイチャシ跡  
二風谷遺跡

—沙流川総合開発事業（二風谷ダム建設用地内）  
埋蔵文化財発掘調査報告書—

昭和58・59・60年度

(財) 北海道埋蔵文化財センター



## 例　　言

- 1 本報告書は、<sup>さく</sup><sup>さく</sup>沙流川総合開発事業、<sup>ふく</sup><sup>ふく</sup>二風谷ダム建設用地内における埋蔵文化財の発掘調査に関するものである。
- 2 発掘調査は、<sup>ふく</sup><sup>ふく</sup>北海道埋蔵文化財センターが、昭和58年度から60年度まで、3ヵ年に亘って実施した。各年度別の対象地区、面積、期間、調査体制は、以下のとおりである。

〔昭和58年度〕		財 北海道埋蔵文化財センター	
ユオイチャシ跡 (K-02-65)	理事長	中村 龍一	
1,986 m <sup>2</sup>	専務理事	山本 慎一	
昭和58年9月1日～59年3月24日	常務理事（調査員）	藤本 英夫	
	業務部長	横田 直哉	
	調査部長（発掘担当者）	竹田 輝雄	
	調査員	河野 本道	
	同	吉田 玄一	
	同	長谷川 徹	
〔昭和59年度〕			
ボロモイチャシ跡 (K-02-64) (二風谷遺跡の一部を含む)	理事長	中村 龍一	
3,100 m <sup>2</sup>	専務理事	山本 慎一	
昭和59年7月2日～60年3月26日	常務理事	藤本 英夫	
	業務部長	横田 直哉	
	調査部長	竹田 輝雄	
	調査第三班班長	種市 幸生	
	文化財保護主事（発掘担当者）	高橋 和樹	
	同	佐川 俊一	
	同	三浦 正人	
	嘱託	寺崎 康史	
〔昭和60年度〕			
二風谷遺跡 (K-02-82) (ユオイチャシ跡の一部を含む)	理事長	植村 敏	
9,000 m <sup>2</sup>	専務理事	山本 慎一	
昭和60年5月7日～61年3月26日	常務理事	藤本 英夫	
	業務部長	間宮 道男	
	調査部長	中村 福彦	
	調査第二班班長	種市 幸生	
	文化財保護主事（発掘担当者）	高橋 和樹	
	同	三浦 正人	
	同	田中 哲郎	
	嘱託	寺崎 康史	
北海道教育委員会社会教育部文化課 文化財保護主事		青柳 文吉	
(昭和60年8月5日～8月31日)			

- 3 報告書の作成は、各調査員が項目別に分担し、それぞれ文末に文責を明示した。
- 4 地形、地質については、調査第四班花岡正光が担当した。石質鑑定については、北海道開拓記念館赤松守雄氏の指導を得た。
- 5 写真図版の作成は、三浦正人が担当した。
- 6 地形測量図、遺構実測図等の報告書用素図は、昭和58年度は長谷川徹が、それ以降は三国谷雅子が作成し、トレースは三国谷雅子が担当した。
- 7 土器の実測、トレースは、主に中村清美が、石器、金属器、骨角器等の実測、トレースについては、主に木下昭仁、宮田明枝が担当した。
- 8 動物遺存体の同定および骨角器の材質鑑定は、早稲田大学金子浩昌先生に依頼し、一覧表の作成や結果のとりまとめについて、御指導いただいた。
- 9 植物遺体については、北海道開拓記念館矢野牧夫氏に炭化種子の同定と執筆を、山田悟郎氏には、種子の写真撮影などをお願いした。また、建物跡の構造材や櫛列跡出土の木片の樹種鑑定と執筆は、三野紀雄氏に依頼した。
- 10 人骨の取り上げは、札幌医科大学百々幸雄、大島直行の両先生にお願いした。
- 11 陶磁器については、佐賀県立九州陶磁文化館大橋康二氏に鑑定していただいた。
- 12 金属器、漆器等の保存処理、分析については、東京国立文化財研究所江本義理、鍬口清治、中里寿克、石川陸郎、青木繁夫の各氏の指導を得た。
- 金属器の保存処理は、三浦正人が担当し、鷺塚一子、鷺見桂子がこれを補助した。
- 13 御協力いただいた上記の方々のほか、発掘調査や報告書の作成に際して、下記の機関、諸氏より指導、助言をいただいた。深く感謝申し上げます。(順不同、敬称略)

佐賀県立九州陶磁文化館 東京国立文化財研究所 奈良国立文化財研究所  
平取町教育委員会 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 北海道教育庁社会教育部文化課  
北海道大学文学部附属北方文化研究施設 北海道開拓記念館 余市町立水産博物館  
石川直章 (故)石附喜三男 伊藤裕満 乾 芳宏 今津節生 畑本 孝 岩本克昌  
上野秀一 氏江敏文 宇田川洋 内山真澄 梅津 譲 上屋真一 大井晴男  
太田善繁 大谷敏三 大塚邦義 大場靖友 岡田宏明 貝沢 薫 貝沢 正  
貝沢輝一 貝沢与一 加藤邦雄 萱野 茂 川上浩一 川上勇二 川奈野惣七  
菊地俊彦 北沢 実 北橋保男 工藤雅樹 久保 泰 小井川和夫 五沢 雄  
越田賢一郎 小谷凱宣 後藤秀彦 小林和彦 小林達雄 小林幸雄 古原敏弘  
齊藤邦典 齊藤 優 桜井清彦 佐々木達夫 佐藤一夫 佐藤訓敏 澤 四郎  
沢口 清 篠原芳彦 島田健一 島田無譽 田崎博之 高橋正勝 館野 孝  
田部 淳 谷岡康孝 田村すず子 田村俊之 田村リラコ 辻 秀子 土屋周三  
角田文衛 出利菱浩司 戸田紀夫 土橋英二 豊原照司 中館吉達 中野益男  
西 幸隆 西本豊弘 西谷 正 野村 崇 羽賀憲二 蓬池悦子 林 謙作  
平川善祥 平村勝二 広井雄一 福田友之 藤村久和 干場隆利 本堂寿一  
前田 潮 松崎水穂 松下正司 松田 駿 宮夫靖夫 茂木雅博 八木謙吉  
山田一孝 矢吹俊男 山浦 清 横山英介 吉崎昌一 米田秀喜 領毛芳博

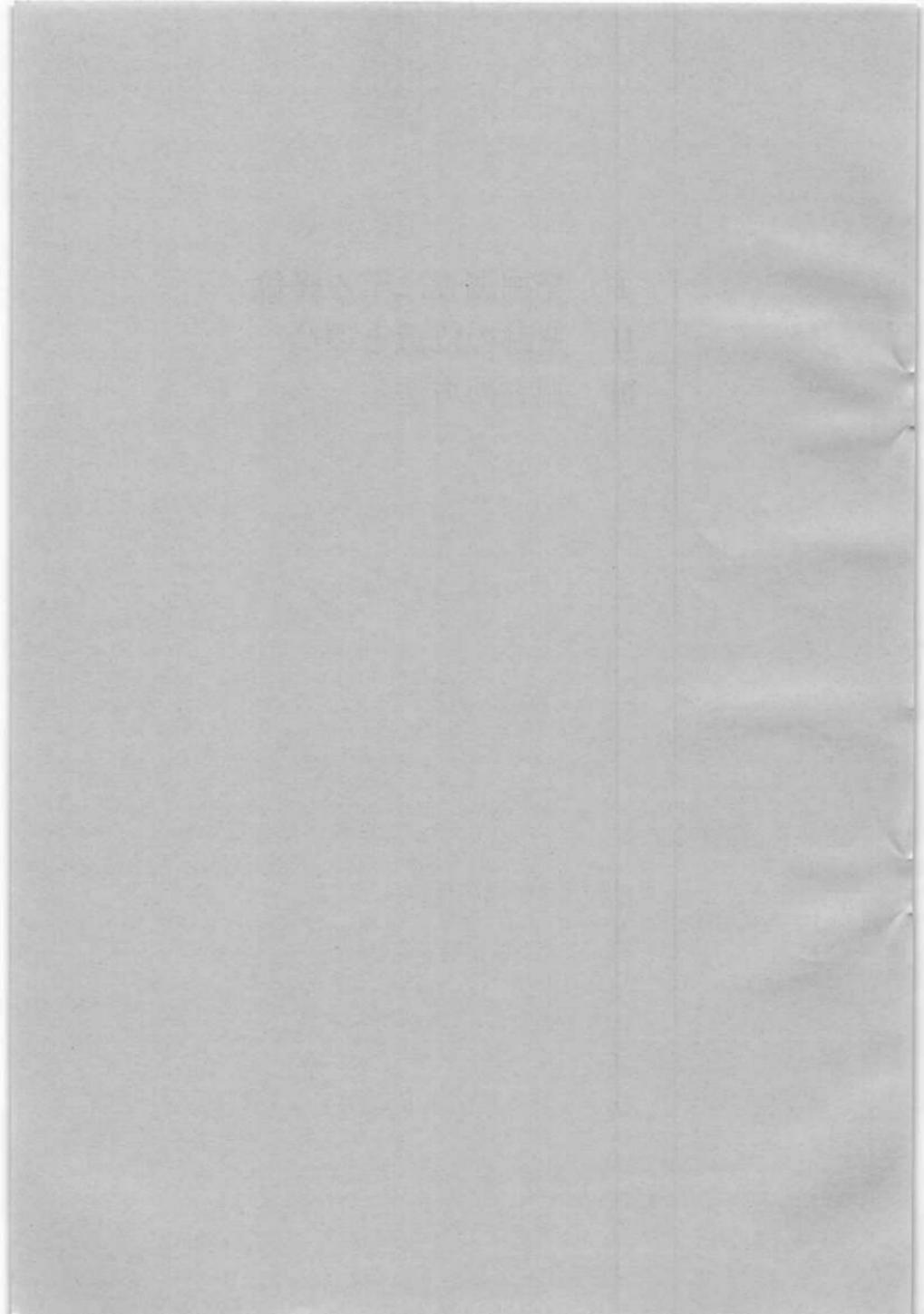
14 石質名については、次の略号を使用した。

Aga. (Agate) メノウ、Aga-Sh. (Agate Shale) メノウ質頁岩、  
And. (Andesite) 安山岩、Che. (Chert) 硅岩、Con. (Conglomerate) 碎岩、  
Gne. (Gneiss) 片麻岩、Gr-Mud. (Green Mudstone) 緑色泥岩、  
Gr-Sa. (Green Sandstone) 緑色砂岩、Mud. (Mudstone) 泥岩、  
Obs. (Obsidian) 黒曜石、Sa. (Sandstone) 砂岩、Ser. (Serpentinite) 姪紋岩、  
Sh. (Shale) 頁岩

# 目 次

例言	
I 発掘調査に至る経緯	5
II 遺跡の位置と環境	5
1 遺跡の位置と概略	5
2 遺跡周辺の地形と火山灰	11
III 調査の方法	14
1 発掘調査の方法と層序	14
2 金属製品の保存処理について	20
写真図版	23
IV ユオイチャシ跡	29
1 概要	29
2 簪	29
3 棚列跡	32
4 遺物	47
写真図版	51
V ポロモイチャシ跡	61
1 概要	61
2 簪	61
3 A郭	62
4 B郭	80
写真図版	87
VI 二風谷遺跡	99
1 概要	99
2 III層の遺構と遺物	101
3 IV層の遺構と遺物	173
写真図版	215
VII まとめ	271
1 概括	271
2 ユオイチャシ跡	275
3 ポロモイチャシ跡	276
4 建物跡について	277
5 近世アイヌ墓について	280
6 陶器と漆碗について	284
7 金属製品について	285
8 ガラス玉について	294
9 鏊石について	296
10 回転式鉗頭について	298
付篇	301
引用参考文献	305

- I 発掘調査に至る経緯
- II 遺跡の位置と環境
- III 調査の方法



# I 発掘調査に至る経緯

財北海道埋蔵文化財センター（以下埋文センターと呼ぶ）は、昭和 58 年度にユオイチャシ、昭和 59 年度にボロモイチャシ、昭和 60 年度に二風谷遺跡を調査した。調査に至る経緯は以下の通りである。

北海道開発局室蘭開発建設部は、沙流川流域の水害防除、生活用水の増量、農業用水補給、水源の確保、流水の維持・増進、苫東関連工業用水等の多目的ダム建設を計画し、調査を行なった結果、二風谷ダムの工事区域内には、ユオイチャシ、ボロモイチャシの所在していることが判明したため、北海道教育委員会（以下道教委という）に対し事前協議を行った。

○昭和 51 年 11 月、道教委は、室蘭開発建設部（以下室建という）から、沙流川総合開発事業（二風谷ダム・平取ダム建設）に伴う埋蔵文化財保護の協議を受けた。

○同 52 年 5 月、道教委は表面踏査等による所在確認調査を行い、9 カ所の包蔵地を確認した。その結果にもとづき、計画変更等の協議をしたところ、最終的にはユオイチャシとボロモイチャシと両チャシの間に工事と競合することになった。

○同 57 年 2 月、第二次協議により、ユオイ・ボロモイ両チャシ間（あとで二風谷遺跡として登録される）は試掘による範囲確認調査が必要である旨の協議を行い、同年 7 月、範囲確認調査を実施、ユオイ・ボロモイ両チャシを含む約 17,000 m<sup>2</sup> に及ぶ包蔵地を確認した。

この調査結果にもとづき、道教委と室建で第三次協議を行ったところ、現状保存が困難ということで了解に達し、発掘調査を行うことになった。

同年 7 月、室建は、当該工事計画についての地元住民との合意をまって、道教委に対し、年度内にユオイチャシの発掘に着手してほしい旨の要望を伝えた。それにもとづき、道教委は埋文センターに発掘調査を依頼した。しかし、埋文センターでは、すでに所定通り事業が進捗しており、現体制でこの調査をとりこむことは不可能であったため、急遽、管理職（常務理事、調査部長）が対応することになったものである。

なお、ユオイチャシ・ボロモイチャシが先祖代々からの聖地として地元の人々に祀られていたため、両チャシの調査開始前にカムイノミを行った。カムイノミは、チャシが造られて以来、チャシのあるその土地をお守り下さっている神にこの土地を掘り起すことを許可して下さいとお願いする祈願祭であるという。調査期間中、事故もなく無事発掘調査が終了したのは、カムイノミのお陰であり、地元の人々、諸団体の温かい御協力によることをここに記し、感謝の意としたい。  
(竹田 輝雄)

# II 遺跡の位置と環境

## 1 遺跡の位置と概略

ユオイチャシ跡、ボロモイチャシ跡および二風谷遺跡は、沙流郡平取町字二風谷に所在する。平取町は、日高地方の最西端に位置し、沙流川や支流額平川の流域に沿って幾つもの集落が形成されている。二風谷は、平取町市街地から北東へ約 5 km、太平洋に注ぐ沙流川の河口からは、18 km 程内陸に入った地点にある。二風谷付近では、沙流川の左岸に標高 45~50 m、河川面との比高 15~20 m 程の段丘面が発達し、西流するシケレベ沢、ユオイ沢、オサツ沢、カンカン沢などの小支流が並列している。沙流川流域には近世のチャシ跡が多く、現在 27 カ所が知られている。二風谷には、ユオイ・ボロモイ両チャシ跡のほか、ポンカンカンチャシ跡などが分布する（図 1）。

沙流川流域のチャシ跡は、河川が蛇行した湾入部、アイヌ語でモイ（moy）と呼ばれる地形に臨む段丘上に立地する例が多い。必ずしも遠望のきく地点にチャシがあることは限らず、戰闘用の“砦”というには、規模の小さな例も少なくない。また、モイが潮上するサケの一時的な休息場所であることなどから、藤本英夫氏は、沙流川流域のチャシにはサケ漁に関連した機能をもつものが多いことを指摘している（藤本 1976）。実際、「鮭ののぼって行く所までしかチャシは作られて」おらず、「沙流川本流では岩知志まで、支流は貫気別から少し上まで」に分布が限られる（二風谷部落誌編纂委員会 1983）。

ユオイチャシ跡は、細長くのびた段丘の南端に営まれた丘先式のチャシである。現在の沙流川は、ユオイチャシ跡の西方 150 m のところを流れているが（図 3）、かつては川が段丘の直下を洗い、先端をぐるりとまわってユオイ沢と直結していた可能性がある。沙流川は毎年のように氾濫を繰り返し、そのたびに流路を変えている。明治以降、二風谷地区に大水害をもたらした洪水は、代表的なものだけでも、明治 31 年、大正 11 年、昭和 30 年、41 年の 4 回ある（渡辺・河野 1974）。図 2 には、それらの前後をカバーする 4 枚の地形図を参考に掲げたが、これによっても流路の変遷の一端が窺われるであろう。ユオイチャシ跡は、昭和 30 年代までは地表面からその存在が観察できたようで、沙流川流域史調査団が確認した 11 カ所のチャシのうちにも含まれている（沙流川流域史調査団 1962）。ところが、昭和 44 年頃、沙流土地改良区による水田造成のためチャシの主体部が破壊され、「水田耕作のため現地形から存在を確認することができない」（渡辺・河野 1974）という状態に至った。ユオイ沢は、幅 25 m にわたる築堤によって堰止められ、灌漑用ポンプ場の併設された、溜池がつくられた。ユオイとは、アイヌ語で「ユ=冷泉・オ=ある・イ=所」という（二風谷部落誌編纂委員会 1983）。

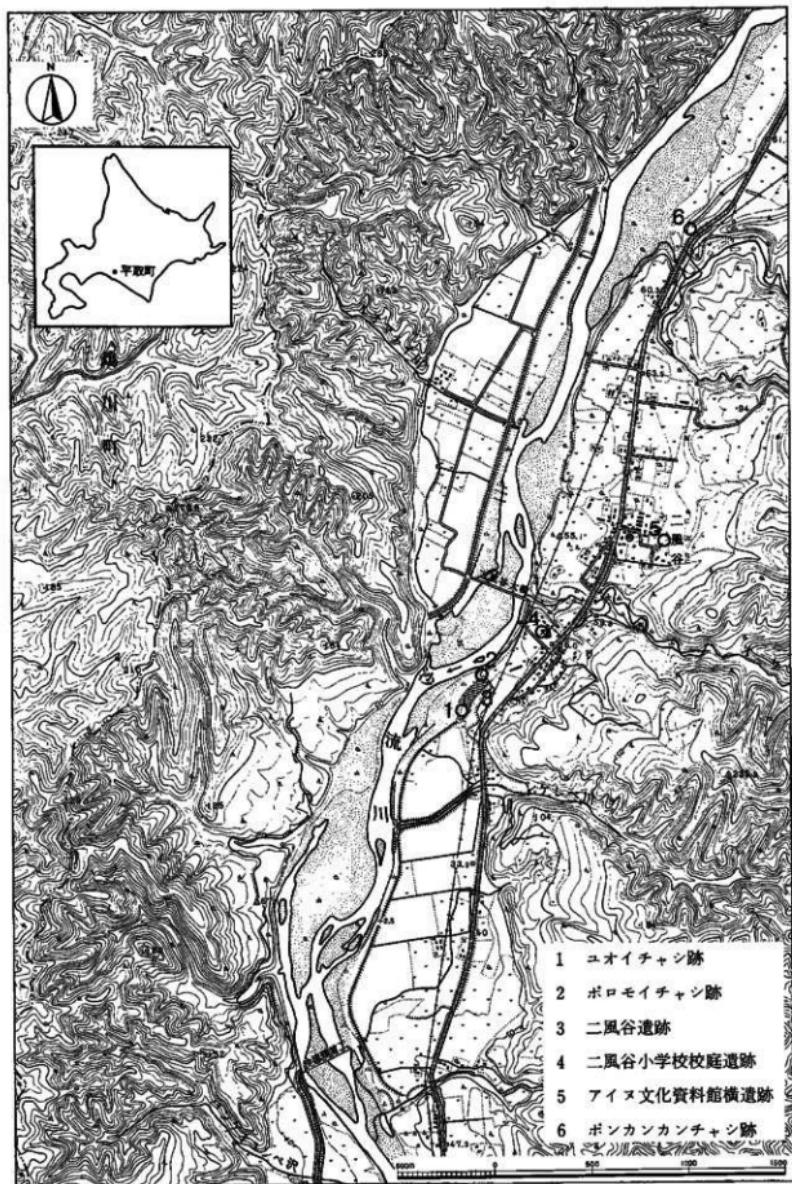
ボロモイチャシ跡は、ユオイチャシ跡の北東約 200 m の地点にある。ボロモイとは、アイヌ語で「ボロ=大きい・モイ=淵」という意味で（二風谷部落誌編纂委員会 1983）、その名のとおり、いわゆるモイ地形に調接した、段丘突出部につくられている。その主体部は国有の河川敷地にあって自然のままに放置されており、後世の変更はないと考えられていた。それ故、今回の調査によって豪 B の存在が新たに確認されるまでは、ボロモイチャシ跡は、1 条の弧状線がめぐる比較的単純かつ小規模なチャシと理解され、図化されていた（北海道教育委員会 1983）。

二風谷遺跡は、ユオイ、ボロモイ両チャシ跡およびその中間部を包括する全域で、縄文中期や擦文時代の包蔵地として登載されている。二風谷の語源は、「ニブタイニニタイ=森とか林。つまり大森林の意味」（二風谷部落誌編纂委員会 1983）と推定されている。

沙流川流域は、食用や原材料となる動植物が豊富で、川にはサケ、マスが潮上し、下流には夏はキニウリウオ、秋にはシシャモがのぼってくる（平取村開村五十周年史編纂委員会 1952）。エゾシカの数も多く、二風谷より 12 km ほど下の紫雲古津には、それを裏付けるユックチカウシという鹿落し狩猟を示す地名が残されており、山田秀三氏によると、ユク・クッ・イカ・ウシ・イ 狩りたてられて「鹿が・断崖を・こぼれ落ちる。（動作のくりかえし）・処」と詳解されている（山田 1969）。

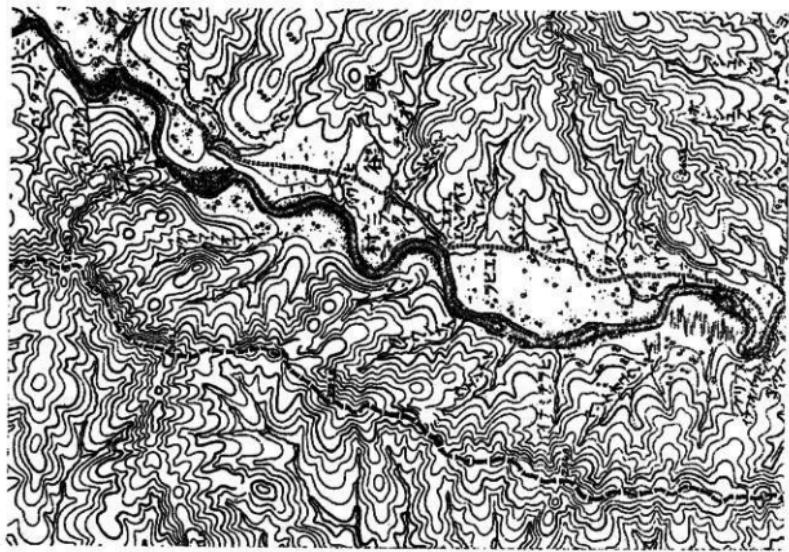
金田一京助氏によれば、アイヌの祖神オキクルミが天より降った地として名高い沙流地方は、北西岸の地方と並ぶ、アイヌ説話の二大伝承地の一つで、ユーカラの二大雄篇、虎杖丸の曲、蘆丸の曲が語りつがれた、アイヌ文化の中心地である（金田一 1940）。この地方に住むサルンクルと称される人々について、その系統などを追究した河野広道氏は、彼らが「アイヌの諸分派中文化程度が最も高く、早くから原始的農業を営んでいた痕跡がある」（河野 1931）ことに注目し、サルンクルが人口を著しく減少させずにすんだ最大の理由が、農業と菜食に慣れていたことにあったと力説している（河野 1932）。農耕の問題は、近世を対象とした発掘調査において、常に留意しなければならない重要なテーマの一つといえよう。

（高橋 和樹）

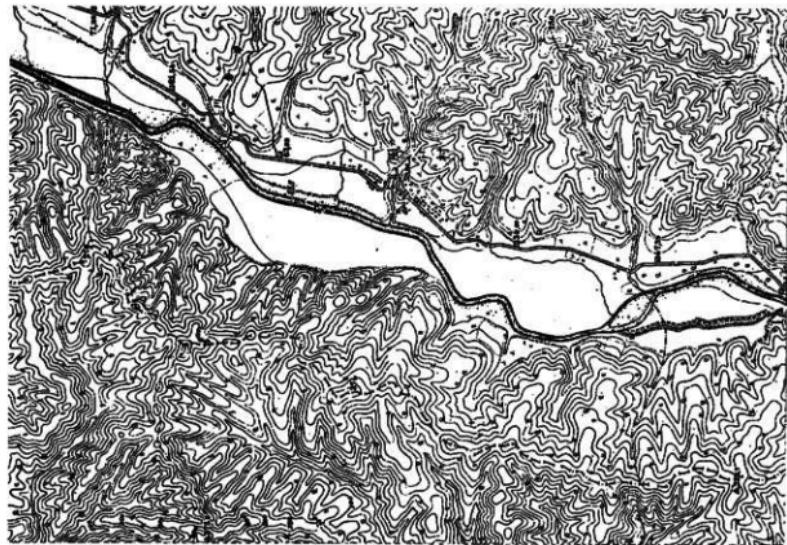


この図は地図地理院発行2万5千分の1地形図「平取」を基盤し、それに加筆したものである。

図1 遺跡位置図

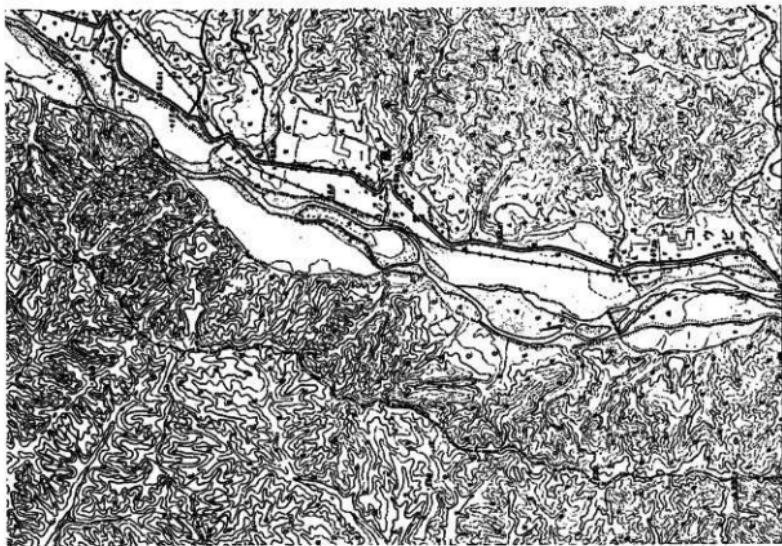


1. 明治29年製版 北海道仮製5万分1図「ニ風谷」

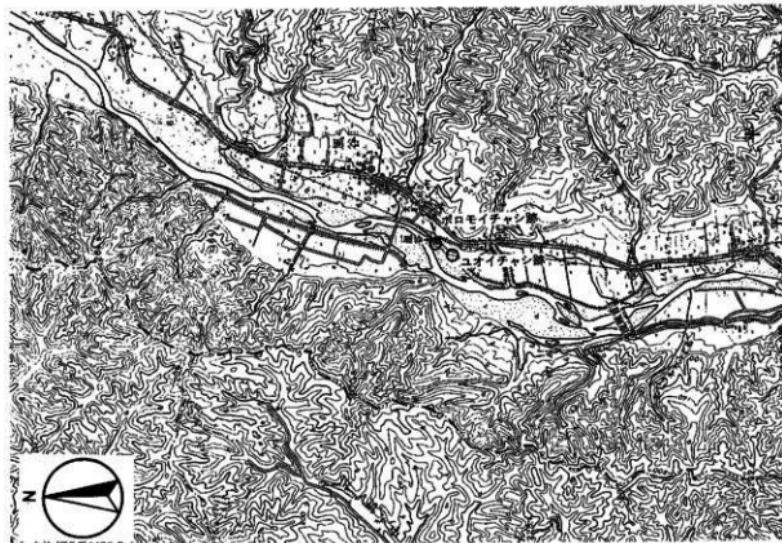


2. 大正8年測図5万分1地形図「佐留太」

図2 沙流川流路変遷図



3. 昭和33年測量 5万分1地形図「富川」



4. 昭和53年発行 5万分1地形図「富川」

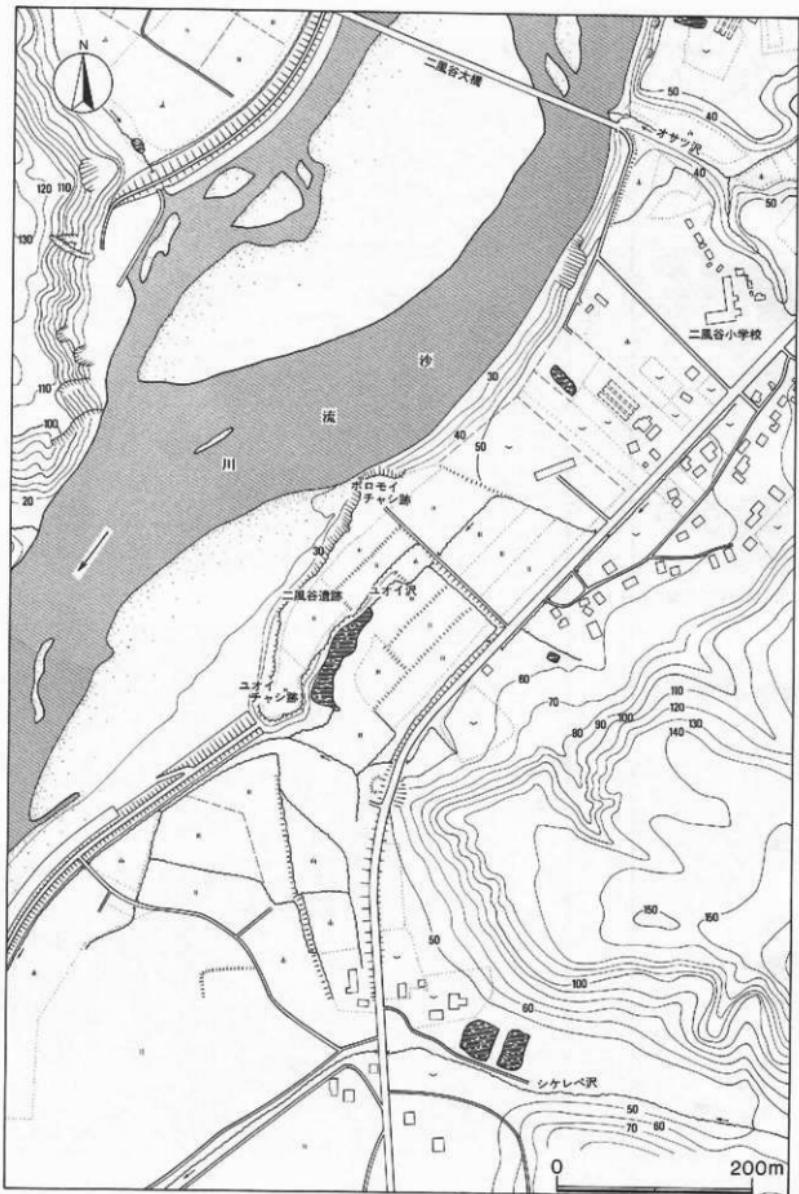


図3 遺跡周辺地形図

## 2 遺跡周辺の地形と火山灰

遺跡は沙流川左岸の標高40~60mの段丘面上に立地する。段丘面上には数層の火山灰が認められる。遺物包含層は、段丘堆積物直上の腐植土である。腐植土の発達はあまり良くない。ここでは、遺跡周辺の地形を概観し、遺跡内に堆積している火山灰について記載する。前者は遺跡の立地環境、後者は造構や火山灰自体の編年に関わるものである。

### i) 地形

遺跡周辺の地形分類を図4に示す。遺跡周辺で発達の良い地形は段丘である。ここで、段丘を高位のものから第I・II・III段丘と呼ぶ。第I段丘は標高約100mに分布し、やや開析されている。第II段丘は二風谷の集落をのせる段丘で、標高40~60mに分布し、遺跡附近では最も保存と連続性の良い段丘である。第III段丘は、現河床との比高が小さい完新世段丘と考えられる。第I段丘は、柳田(1981)のMs面、第II段丘は同じくMw-I面に相当する。

段丘背後には、標高200m前後の定高性のある丘陵が広がっている。丘陵は谷密度が大きく開析が進んでいるが、丘頂部には狭長の平坦部が認められる。丘頂部と谷底部との間は急である。

第I段丘と丘陵急斜面との間には、緩斜面が認められることが多い。形成営力や成因については未詳であるが、周水河性の緩斜面の可能性がある。

沖積低地は、沙流川とその支流沿いの砂礫から成る低地である。沙流川本流では疊洲として発達している。

### ii) 火山灰

火山灰の産状は次の三つに分けられる。

- A. 現地表に近い層準に堆積し、遺跡全域を覆うもの。
- B. Aよりも下位の腐植土中に断片的に薄く堆積しているもの。
- C. 風倒木跡の凹地やピット内に堆積したもの。

Aの例としてa. B箇内のII a~d(図29)、b. 2E-47区のI-3(図5のI-3)、Bの例としてZ-51区のII-3(図5のII-3)、Cの例としてIV P-1(図91)の火山灰層序を観察し、試料を採取して鉱物組成を調べた。一部の火山灰は、粒度分析や火山ガラスの屈折率測定を行った。

火山灰試料は次の手順で処理した。摘がけ法による水洗→6% H<sub>2</sub>O<sub>2</sub>・10% HCl処理→粒径1/4~1/8mmに篩別→水洗・乾燥→カナダパルサムを封入剤としてプレパラートを作成→偏光顕微鏡下で500個以上検鏡し、鉱物量比を個数%で表わす。別に、火山ガラスを200個以上検鏡し、形態分類を行って量比を個数%で表わす。火山ガラスは以下のように分類した。

B型：粒子全体の形状が漿果状。軽石様で微粒の結晶鉱物を含有する。

F型：偏平で、気泡が繊維状に細長く平行に伸びているもの。

L-C型：気泡が破碎し、泡壁がridgeを成して直線～曲線状に數本走るもの。

M型：泡壁のつくる模様が網目状に見えるもの。気泡の大きさは粒径の1/2以下、一般に1/5~1/10。

N型：B型に似るが、粒子周縁部で比較的薄く、針状の気泡・条線が認められるもの。

P型：薄い平版状。比高の小さいridgeが1~2本走る場合が

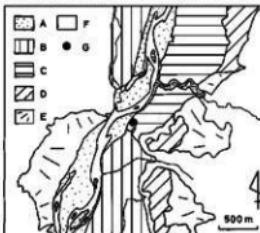


図4 遺跡周辺の地形分類

凡例 A: 沖積低地 B: 第III段丘 C: 第

II段丘 D: 第I段丘 E: 緩斜面

F: 丘陵(急)斜面 G: 二風谷遺跡

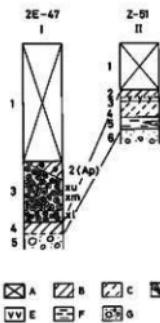


図5 火山灰層序

凡例  
A：塗土 B：黒色腐植土  
C：暗褐色腐植土 D：粘土  
E：シルト質火山灰  
F：粘土 G：砂礫（段丘  
堆積物） Ap：耕作土  
X：試料採取層番号 u：上  
部 m：中部 t：下部

Aa, B 塗内の火山灰 中～粗粒砂大の淡黄色の降下軽石である。粒度や層準により II a～d に区分される。II a～c は同一時期の一連の降下物と考えられるが、II c は比較的細粒である。II d は II a～c と腐植土を介して堆積しており、明らかに降下時期を異にしている。他のグリッド断面では認め難い。II a～c の軽石粒には重鉱物を含むが、II d には含まない。

II a：斜長石に富み、重鉱物は比較的少ない。重鉱物量は、斜方輝石>不透明鉱物（鉄鉱物）>单斜輝石>角閃石。cPx 比（单斜輝石量／全輝石量）は 0.33。角閃石は僅量で、上位の層からの混入の可能性がある。火山ガラスは M 型・B 型に富む。

II b：重鉱物に富み、斜方輝石＝不透明鉱物>单斜輝石、cPx 比 0.34。火山ガラスは M 型に富む。

II c：重鉱物、特に不透明鉱物に富む。不透明鉱物>斜方輝石>单斜輝石、cPx 比 0.29。火山ガラスは M 型と B 型に富む。

II d：重鉱物は少なく火山ガラスに富む。不透明鉱物>斜方輝石＝单斜輝石、cPx 比 0.44。火山ガラスは B 型に富む。

Ab. 2E-47 区グリッド断面の火山灰 淡黄色の降下軽石層を成す。下部(1-3 l)は比較的細粒である。  
I-3u : 重鉱物に富み、斜方輝石=不透明鉱物>单斜輝石、cPx 比 0.27。火山ガラスは M 型に富む。  
I-3m : 重鉱物に富み、斜方輝石=不透明鉱物>单斜輝石、cPx 比 0.31。火山ガラスは M 型に富む。  
I-3l : 重鉱物に富み、不透明鉱物>斜方輝石>单斜輝石、cPx 比 0.30。火山ガラスは M 型・B 型に富む。これらの降下物の粒度分析を分け法によって行った(図7)。3u は、中央粒径  $M_d = 0.79 \text{ mm} \approx 0.34 \phi$ 、最大粒径 10.5 mm、Trask の式による分級度  $S_0 = 1.20$ 、Folk and Ward の式による分級度  $\sigma_1 = 0.67$ 。3m は、 $M_d = 0.80 \text{ mm} \approx 0.33 \phi$ 、最大粒径 9.2 mm、 $S_0 = 1.34$ 、 $\sigma_1 = 0.67$ 。3l は、 $M_d = 0.49 \text{ mm} \approx 1.03 \phi$ 、最大粒径 6.0 mm、 $S_0 = 1.28$ 、 $\sigma_1 = 0.57$ 。三試料とも分級が良いと言える。

B. 腐植土中に断片的にレンズ状に产出する火山灰 灰白色シルト質の降下火山灰である(図5-29)。腐植土に幾分汚染されているので、できるだけ新鮮な部分から採取した。

Z-51-II-3 : ほとんど火山ガラスから成る特異な火山灰である(写真図版5-5)。火山ガラスは L

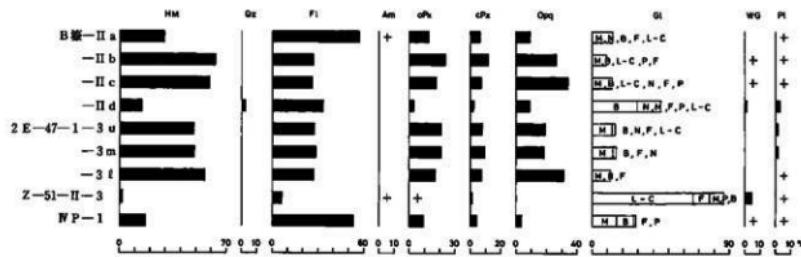


図6 火山灰の鉱物組成

凡例 HM：重鉱物 Qtz：石英 Fl：長石 Am：角閃石 oPx：斜方輝石 cPx：单斜輝石 Opx：不透明（鉄鉱物）  
Gl：火山ガラス (M, N, … : 火山ガラスの型。本文参照) WG：風化鉱物 P：植物起源鉱 + : 1% >

—C型が過半を占め、F型・M型を伴う。アルカリ長石を含む。浸液法による火山ガラスの屈折率測定の結果、屈折率  $n$  は、 $1.509 < n < 1.515$  であった。

C. 風倒木跡の凹地やビット内に堆積した火山灰 黄白色～淡黄灰色の中粒～細粒砂質降下火山灰。上記 A・B の各火山灰よりも下位の層準に産出すると推定される。試料を得たビット IV P-1 は繩文時代中期後半のもので、ビット底の腐植土の上位に堆積している。

IV P-1：斜長石に富み、火山ガラスも比較的多い。斜方輝石>單斜輝石=不透明鉱物、cPx 比 0.30。火山ガラスは M 型・B 型に富む。粒径 1/4 mm 以上では軽石粒を多く含む。

以上の火山灰に関して、野外観察と室内作業から以下の諸点が明らかとなった。

B 塊内 IIa・b と 2E-47 の I-3u・m、同じく IIc と I-3l はそれぞれ対比される。これらは重鉱物に富み、角閃石を含まないことから、樽前火山灰 b 層 (Ta-b. 北海道火山灰命名委員会 1982 : 石川ほか 1972 ; 春日井 1984) に対比される。

B 塊内 IId は、重鉱物が少なく火山ガラスに富み、流紋岩質の軽石と考えられること、Ta-b の下位に産出することから、有珠山 b 層 (Us-b. 横山ほか 1973. 北海道火山灰命名委員会 1982 の Us-c.) に対比される。

Z-51-II-3 は、特異な鉱物組成、火山ガラスの型、火山ガラスの屈折率、産出層準を考え合わせると、白頭山一苦小牧火山灰 (町田 1981 ; 町田 1984) に対比されるものと思われる。

IV P-1 は、細粒軽石であり角閃石を含まないこと、上記各火山灰のさらに下位に産出すると考えられることから、樽前火山灰 c<sub>1</sub> 層 (Ta-c<sub>1</sub>. 北海道火山灰命名委員会 1982 ; 石川ほか 1972) に対比されるものであろう。

#### 引用・参考文献

- Folk, R. L. and Ward, W. C. (1957) : Brazos river bar: a study in the significance of grain size parameters. *Jour. Sedimentary Petrology*, Vol. 27, No. 1, pp. 3-26.
- 北海道火山灰命名委員会 (1982) : 北海道の火山灰. 24pp.
- 石川俊夫・横山 泉・勝井義雄 (1972) : 樽前山一火山地質・噴火史・活動の現況および防災对策. 北海道防災会議. 124pp.
- 春日井 昭 (1982) : 降下火砕堆積物による編年と今後の課題. 「鉄場7遺跡における考古学的調査」. 箕面町教育委員会. 172pp., pp. 165-172.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広 (1981) : 日本海を渡ってきたテフラ. 科学, Vol. 51, No. 9, pp. 562-569.
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 (1984) : テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—. 古文化財総合委員会編「古文化財の自然科学研究」. 984pp.. 同朋舎 : pp. 865-928.
- 庄子力偉 (1971) : 堆積学. 284pp.. 研究者書店.
- 柳田 誠 (1981) : 沙流川における最終水期以降の河岸段丘の形成過程. 地理評, Vol. 54, No. 8, pp. 423-436.
- 横山 泉・勝井義雄・大堀与志男・江原幸雄 (1973) : 有珠山一火山地質・噴火史・活動の現況および防災对策. 北海道防災会議. 254pp.

(花岡正光・藤田健一・枝谷 徹\*)

\* 北海道教育大学札幌分校地学科教室

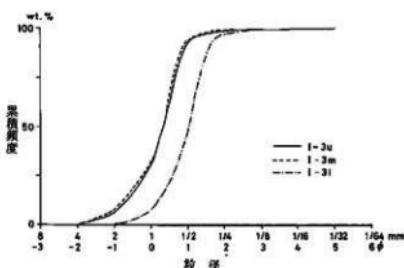


図 7 火山灰の粒度組成 (2E-47-1-3)

### III 調査の方法

#### 1 発掘調査の方法と層序

発掘区には、真北を基準とする $5 \times 5$ m メッシュを設定した。これは、室蘭開発建設部による昭和48年度調査、500分の1、二風谷ダムサイト付近平面図を利用したもので、発掘区のA-0杭が、(-7、98、-152、64)の位置に相当する。メッシュには、西から東へアルファベットを、南から北へアラビア数字を順に付し、南北の交点における表示をもって、各グリッドの呼称とした。また、年度別の各調査区も、図9に示すとおりである。

昭和58年度および60年度の調査区には、急崖が迫って危険な箇所があり、転落事故などを防ぐための施設が必要であった。そこで、58年度は、ユオイチャシ跡の西縁沿いに杭と金網によるフェンスを、60年度には、ユオイチャシ跡の東縁沿い、および二風谷遺跡の西縁部、南北軸の18~34の間に杭と網によるフェンスをめぐらせた。ボロモイチャシ跡の周縁については、杭の打ち込みが困難でフェンスをまわせず、調査終了済の外縁部に配置した杭に、安全ベルトをつけたロープの一端を固定させる方法を用いた。また、ユオイ沢の溜池の堰を切って水を流し、水難を未然に防いだ。

発掘区における基本的な層堆積は、柱状模式図のとおりである。ただし、これはあくまでも全体を単純化したモデルであり、実際の層序は、必ずしも一律ではない。発掘区における具体的な層堆積を記録するため、図10に示すA~Dの4本のラインについて、断面実測図を作成し、本書にはこのうちのAとC、2つの実測図を代表として掲載した。以下に、それぞれの土層について、概略を列記する。

##### 第I層 表土。軟らかく、やや縮まりのない黒褐色砂質土で、段丘縁辺の未耕地に残存し、

灌木や笹、トクサなどが繁茂していた。発掘区の大部分は畑や水田に利用されており、直下の火山灰を混合させた耕作土(I')に変わっている。I'層は、造田に伴う均平化のため厚く盛られたり、より深く削られてロームを多量に含有するケースもある。

##### 第II層 淡黄色火山灰。これは、寛文7年(1667)に降灰したとされる樽前火山灰b層である。

第III層 真黒色土。炭化物の点在が多い、真黒な土層で、軟らかく、やや粘性に富んでいる。近世の遺構や遺物の大部分がIII層上面に見出され、擦文土器もIII層上部に遺存する例が多くかった。III層は水田造成に伴う削平のため、広範囲にわたって失われており(図42)、残った部分でも、心土破碎が加えられ、平行する縦筋もの溝が掘り刻まれたところが少なくない。また、III層は、東の斜面部分では、砂礫に真黒な腐植質が直接滲透した感じの層に変わり、西の崖際では、縮ま

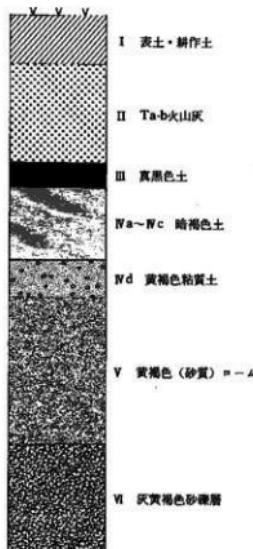


図8 基本層序模式図

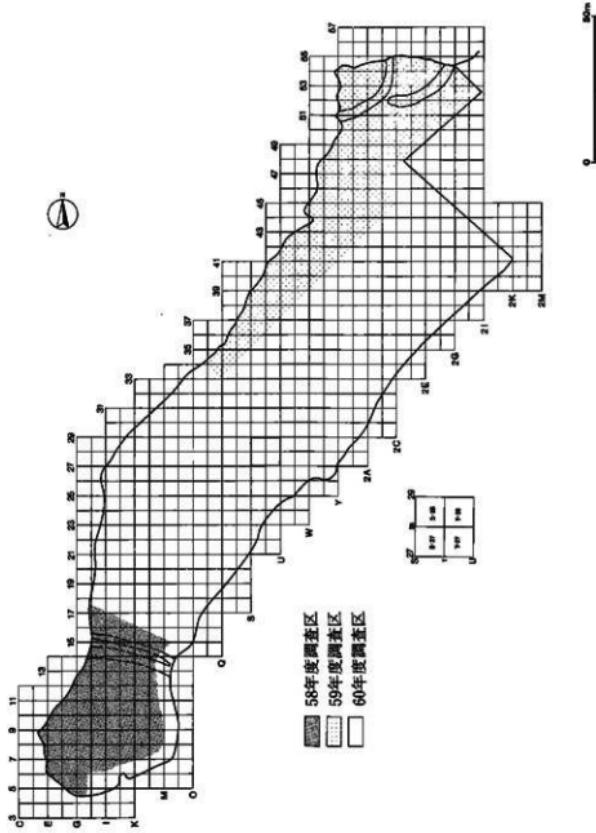


図9 グリッド設定図

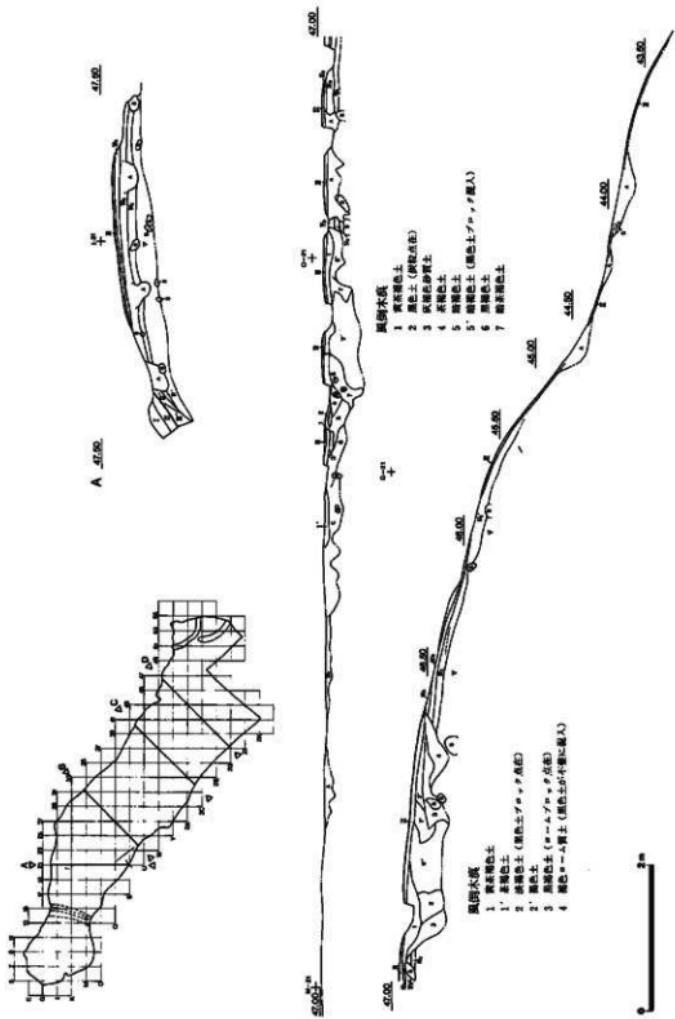
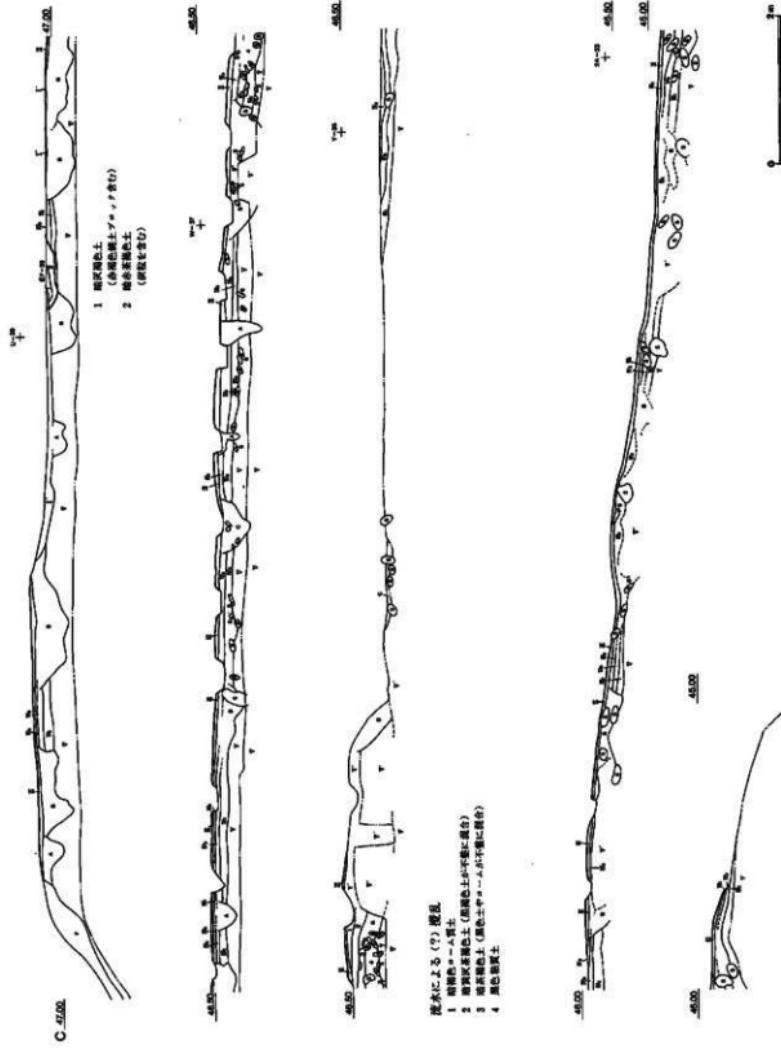


図10 段丘土層断面図



りなく色調の淡い層(III)や、根が多数入り込んだボソボソの層(III')に移行する。

第IV層 暗褐色土。基本的には、下記a～dに分層可能である。しかし、IV層の様相はやや複雑で、層堆積における整然性が容易に認められぬほど不安定な地域が少なくなかった。断面実測図の上では、理論的な調整を加えて、最終的に、ほぼ整然たる分層を示したが、現実には、層が捉え難く、図化に難渋した部分が多い。恐らく、基盤が、沙流川の旧河床で、水の作用による不整な起伏や、礫層、砂質ローム層の偏在などがあり、その後の土層の堆積に一樣ならざる影響が及んだためと憶測される。IV層は、全般に、礫の点在が多い。

IVa層 黄茶褐色土。或いは火山灰起源かと思われる黄茶褐色土が主体で、暗褐色がちな部分や、逆に明るい色調を呈する所もある。

IVb層 暗褐色土。地区によって色調に濃淡があり、黒褐色がちの所や、殆ど淡褐色の部分も認められた。

IVc層 褐色土。殆ど漸移層といった感じのローム質土で、所によつては、礫の点在の多い暗褐色がちの粘質土となっている。東側の斜面沿いには、黒褐色土のブロックを不整に混在させるローム質土(IVc')が分布し、西方の崖際では、IVbとIVcが混合したかのようないかだらかな土層(IV')がみられる。

以上のIVa～IVc層には、縄文前期から統縄文期にかけての遺構、遺物が見出されているが、分層した各層に対応して、それらが時期別に検出されるといった、層位的な関係は、明確には捉えられていない。

IVd層 黄褐色粘質土。図10には登場しないが、Q～W-24～32区の一帯にひろがる凹地形に堆積した、殆どロームと変らぬ土層で、縄文早期の遺物が集中して遺存していた。

第V層 黄褐色(砂質)ローム。礫の点在が多く、特に東方ではより顯著であったが、西側の段丘縁辺部には、礫の少ない軟らかなローム層が形成されていた。いわゆる風倒木痕には、周辺がやや汚れた浮ローム(V')がみられる。

第VI層 灰黃褐色砂礫層。ロームにつづく砂礫層で、さらにその下は、砂岩の岩盤となる。

次に、自然の擾乱現象に伴う土層について説明する。

A層 木の根などによる擾乱で、黒色土とローム質土などが不整に混在している。

B層 いわゆる風倒木現象に伴う土層で、さらに細分して図示したところもある。

C層 黒褐色粘質土。流水に関連した、局所的な粘質土の集積らしく、礫の点在も多い。

D層 褐色粘質土。流水に関連した何らかの擾乱作用によって堆積したと思われる、礫の点在の多い不整な粘質土で、かなり広い範囲に認められる場合が多かった。

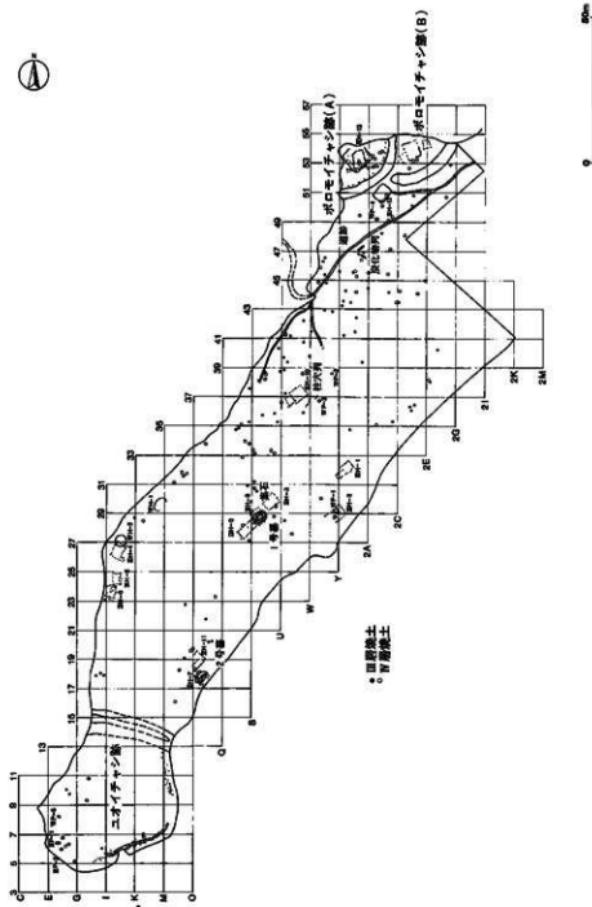
E層 西側の崖沿いにみられた、軟らかく崩れやすい不整な斜面堆積層で、図10にはない。

F層 西側の斜面に分布する黒褐色の表層土で、Ta-b粒を多量に含有する軟弱な土層である。

以上、説明した基本的な土層のうち、第I、II層には遺構、遺物ではなく、その除去には、バックホーなどの重機を利用した。第III、IV層における遺物の取り上げに際しては、全例、その位置とレベルを記録した。また、遺構における層堆積を保存するため、奈良国立文化財研究所が開発した断面剥ぎ取り転写法により、ニオイ、ボロモイ両チャシ跡の壕や(図15e-e'、図29F-F'ライン)、ニオイチャシ槽列跡の柱穴や溝の一部について(柱穴7、24・25、37、40・41付近)、断面剥ぎ取りを実施した(図版16)。なお、両チャシ跡の写真撮影には、電気工事用の高所作業車を使用した(図版18)。

(高橋 和樹)

図11 造地位置図



## 2 金属製品の保存処理について (図12・13、図版6)

報告の3遺跡において、昭和58～60年度の調査で出土した金属製品は、198点、破片数で約1000点を数える。これらはすべて、1667年降下の樽前b火山灰の直下の黒色土(III層)中から検出されたもので、少なくとも316年間、土中にあったことになる。このため、錆や土圧による変形・破損が激しく、実測・撮影や、その後の保管に著しく支障をきたすことが危惧された。そこで60年度に、簡易な設備を用意し、この金属製品に対して、合成樹脂含浸等の保存処理を行った。以下はその概要である。

### i) 保存処理の留意点

出土する金属製品は、錆等による変形で、すでに機能を失い、形態をかろうじてとどめる程度であることが多い。このような状態で放置すれば、酸素・水分等の多い環境下では、数年を経ずして崩壊することは明らかである。これを防止し、考古資料として役立たるよう、保存修復処置を行う際には、次の基本要件をふまえて行う必要がある。

- ①現状をこれ以上悪化させないこと。(錆の要因の除去・本来の形態の保持)
- ②変形・崩壊した品物でも、可能な限り当初の姿に復元すること。
- ③個々の遺物の状態に応じた処置。(対象遺物に精通した者の意見の反映・劣化状態の把握)
- ④原則として、可逆性のある材料を用いて、補修・復元すること。

また、遺物の構造・形態等を知る上で必要な、X線撮影や分析を行うには、よい機会があるので、でき得る限り、実施すべきである。保存修復処置を行った遺物は、乾燥を保てる密閉容器に入れ、低湿度の場所で保存管理されねばならない。

### ii) 保存処理の基本工程 (図13)

処置前の調査：計測、写真撮影、形状や装飾・文様・残存有機質等の観察による現状把握。必要に応じてX線撮影や、顕微鏡観察、材質分析等も行う。この結果によって、修復方針を検討する。これらを、調書に記入する。

クリーニング：泥・錆はそれ自体が、さらに遺物崩壊をまねく要因となる。遺物の原形を保ちながら、泥・錆をニッパ・タガネ・彫刻機等の機械的方法で除去する。エアーブラッシュ装置で精密にクリーニングできればよいのだが、今回準備できなかったため、エチルアルコールに浸漬、洗浄して、落とせる限りの泥・錆を取り除く努力をした。

脱塩：水分・酸素とともに、塩分は錆の三大要因の一つである。これを取り除くため、水酸化ナト

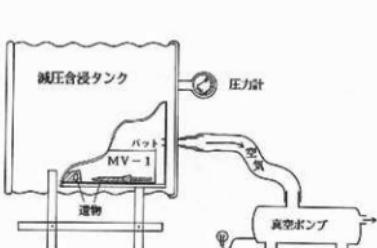


図12 樹脂含浸装置模式図・保存処理(復元)作業

金属製品の保存処理工程

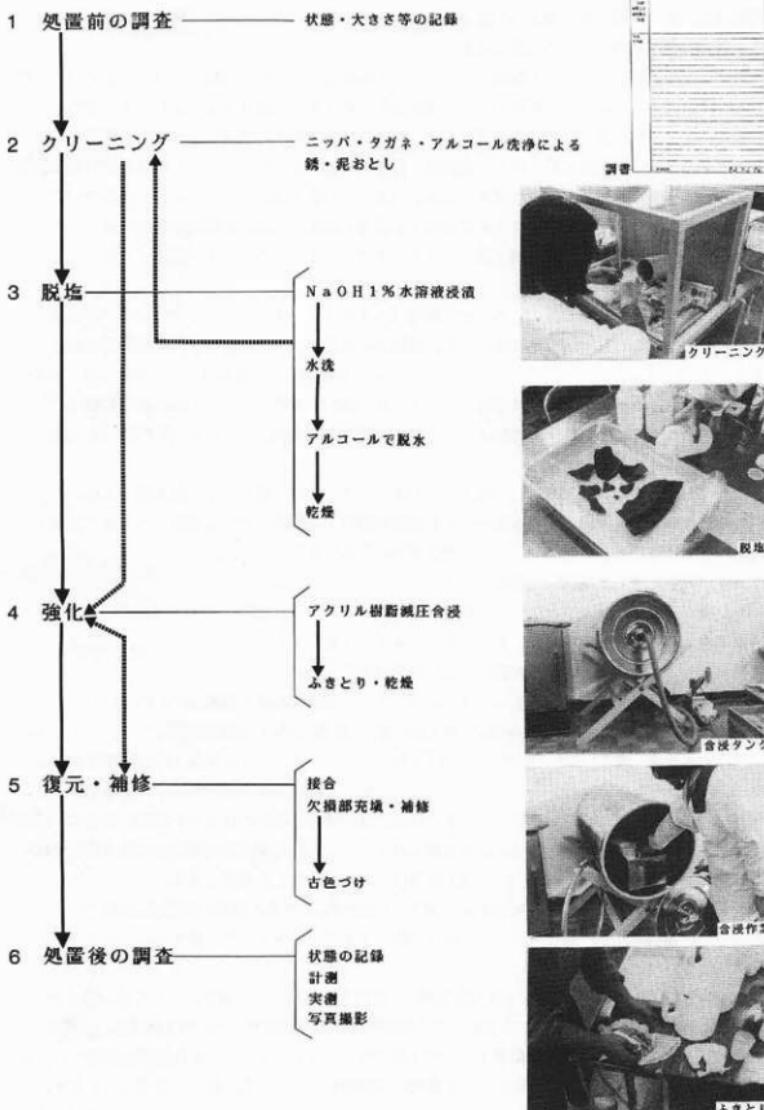


図13 保存処理工程図

リウムの1%純水溶液に遺物を浸漬する方法を用いた。その後、水酸化ナトリウムを残さないように、手早く純水で洗い、脱水するためにアルコールに浸漬し、強制乾燥（乾燥機使用）した。この処置は脱塩の他、第一段階で落ちなかつた泥・鏽を落とす効果もあった。なお、木質等有機質の残存付着するものや、銅製品等は、この処置は行わなかった。

強化：対象遺物を、アクリル樹脂エマルジョン（商品名 ブライマル MV-1）とともにパットに入れる。これをタンクに入れ、真空ポンプで空気を引き減圧する。減圧することにより、遺物の微細な間隙からも、空気が抜け、樹脂が浸透しやすくなる。ついで常圧に戻すことにより、樹脂がその間隙に押し込まれる。樹脂から取り出した遺物は、表面の光沢を防ぐため、よくしぼったガーゼで、余分な樹脂をふきとり、常温で乾燥させる。なお、木質等の有機質は、イソシアネート樹脂(PSNY-10)を、骨角等はアクリル樹脂（バラロイド B72）を塗布し強化した後、上記減圧含浸処理を行なった。銅・銀が主体の遺物には、防錆剤であるベンゾトリアゾール入りのアクリル樹脂（インクララック）を塗布した（図12）。

復元・補修：接合は基本的に、エポキシ樹脂（セメダインハイスパー）とフェノール樹脂マイクロバルーンを混合したペーストを使用した。剥離片の接合や、小欠失部には、繊維系接着剤（セメダインC）と、上記マイクロバルーンをねったペーストを使用した。鏡等の大きな欠失部は、エポキシ樹脂（アラルダイト AW 106 10部対ハードナー HV 953 U 8部）とガラス繊維布でFRPをつくり、接合補修した。補修後の余分な樹脂は、ナイフや彫刻機で削り整形した。すべて終了した後、補修部を、アクリル板の具で補修した。

ここまで処置は、状況に応じて順次くりかえして行い、考古資料として耐え得るようにした。

処置後の調査：実測図・写真撮影や、上記処置の記録・処置後の状態を調査・写真等で記録する。処置を終えた遺物は、シリカゲル入りの密閉容器に収めて保管している。

### iii) 今回使用した機器・樹脂について

彫刻機：一般的に使用されている、日本理化器機のミニター。電源C-130型・機部M-23H型。

集塵機：アクリル板と木材で、手づくりしたボックスを、フレキシブルホースで、換気扇とつなぎだ自前のもの。粉体や溶剤が、人間にこない効果は充分ある。

純水製造装置：脱塩時の純水をつくるための、イオン交換樹脂入り装置。オレガノB-10型。

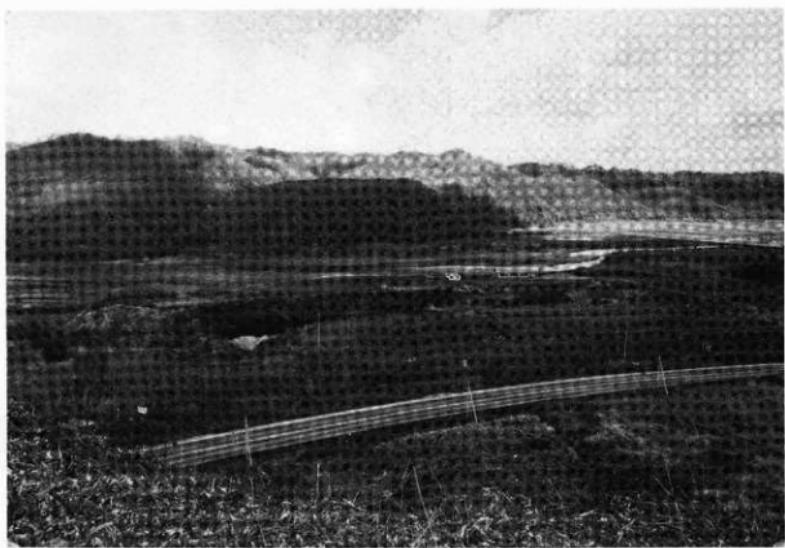
乾燥機：処置前遺物の乾燥や、脱塩時・復元後に使用。最高250°Cの恒温乾燥機。サンヨーMOV-202型。

減圧含浸装置：図12参照。真空ポンプは真空機工マイティポンプG-100D型、排気量100 l/min。タンクは、杉山元医理器のハイパキュームコンテナキミック200-99型 径567 mm 高920 mm。タンク蓋に圧力計と空気の出入口があり、この口と真空ポンプをつなぎ、減圧する。遺物の仕上がり状態は良好で、間隙内部にも、よく樹脂が入り込んでいる。從来使われてきた、高価な減圧含浸装置を整備できない状況では、安価な（ポンプ約15万円・タンク約15万円）この装置で充分対応できる。

アクリル樹脂エマルション：ブライマル MV-1を使用。アクリル樹脂の微粒が、水中に懸濁しているもので、溶剤タイプのものと違い、危険性が極めて少なく、ふきとりも楽である。仕上がりも光沢が気になる程にはならない。

今回はX線撮影や、刀装具の一部（銅・銀等）の材質分析も行った。結果については、個々の写真・文中で示している。X線撮影は、東京国立文化財研究所の石川陸郎氏、鎌倉工業検査の土橋英二氏、蛍光X線分析は、東京国立文化財研究所の江本義理氏にお世話になった。保存処理全般については、東京国立文化財研究所の樋口清治氏・青木繁夫氏に御指導いただいた。記して感謝いたします。

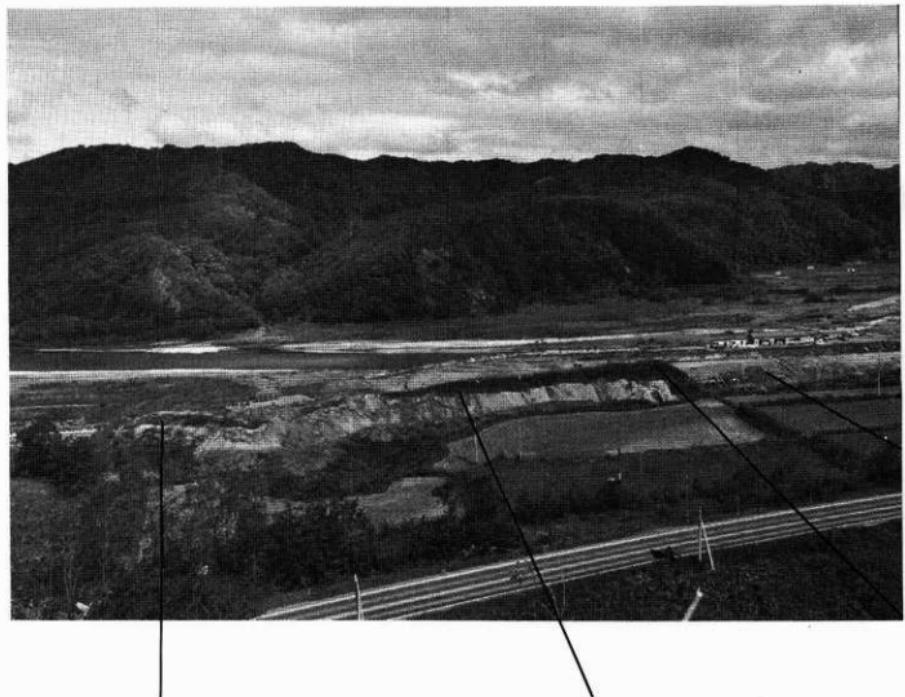
（三浦 正人）



1 遺跡全景（南東山上より）



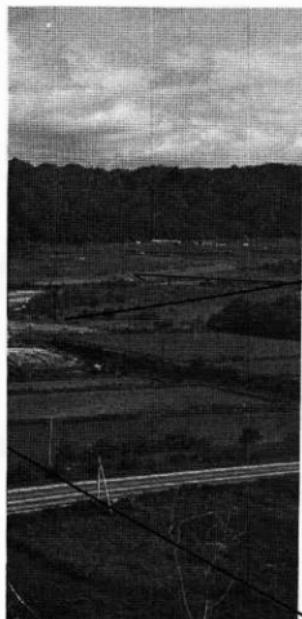
2 遺跡全景（沙流川対岸より）



ユオイチャシ柵列跡



二風谷遺跡 2号墓



ボロモイチャシ跡

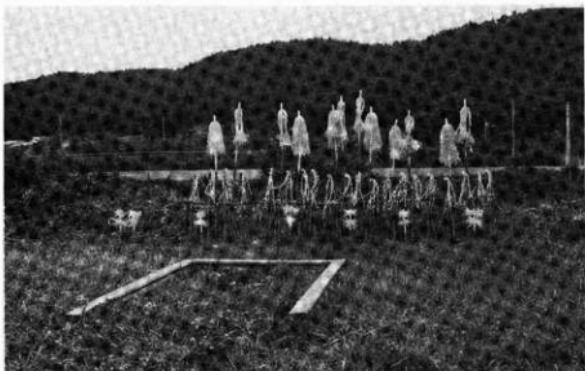


二風谷遺跡建物跡（左III H-2 右III H-1）



二風谷遺跡 1号墓

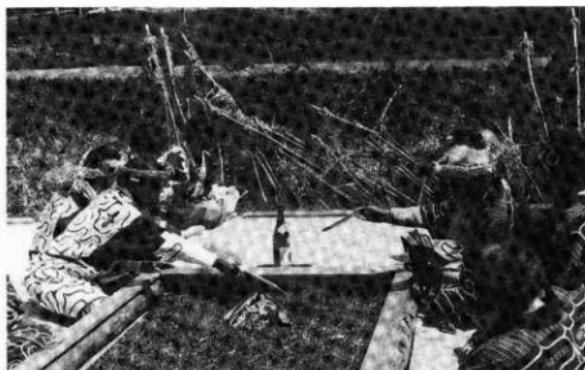
1 カムイノミヌササン  
(59年度)

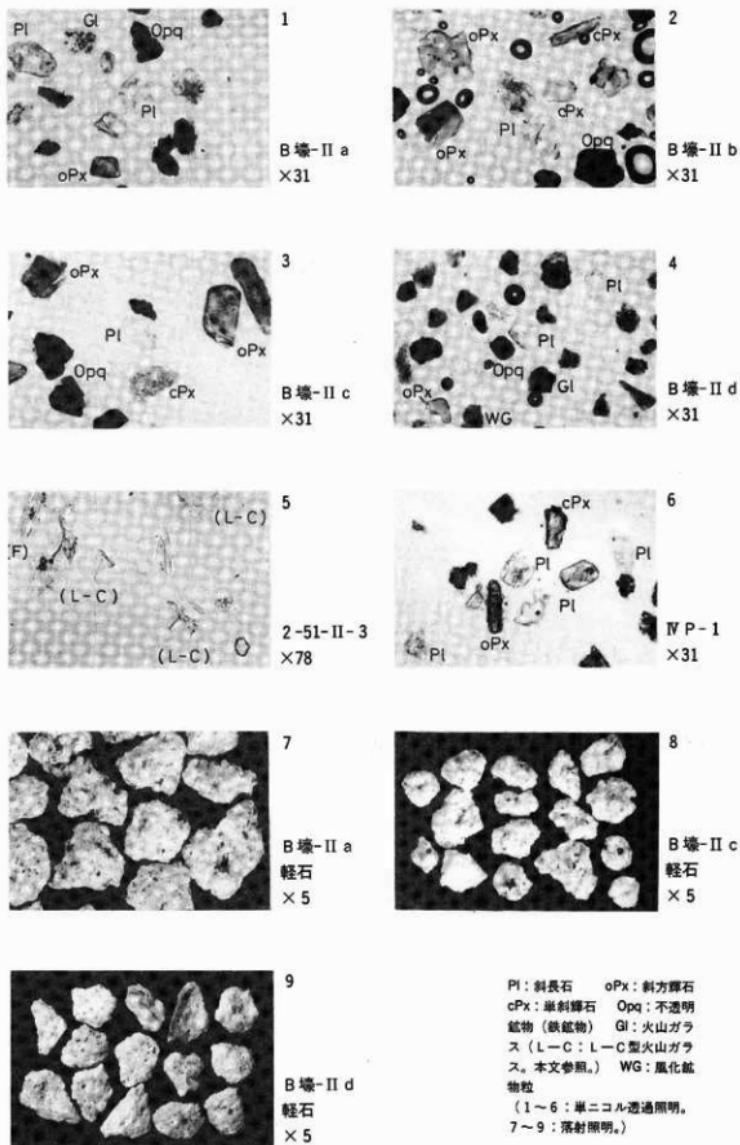


2 カムイノミ風景  
(59年度)

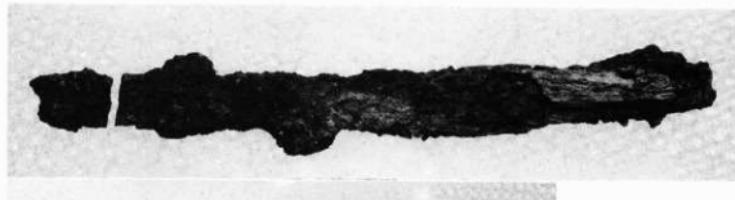


3 カムイノミ風景  
(60年度)

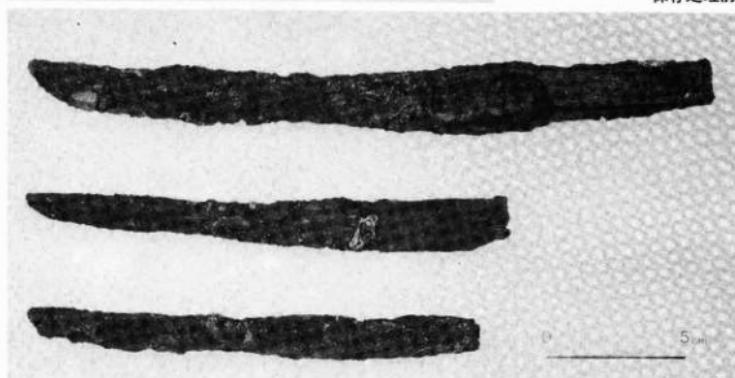




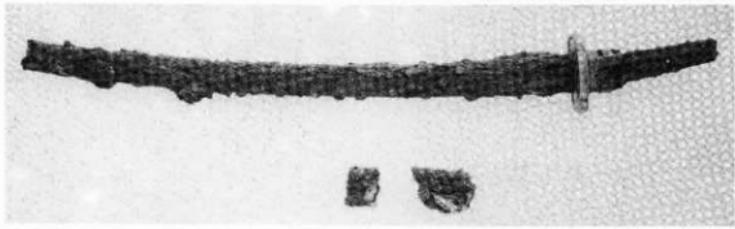
火山灰の顕微鏡写真



1 2号墓出土刀子  
保存处理前

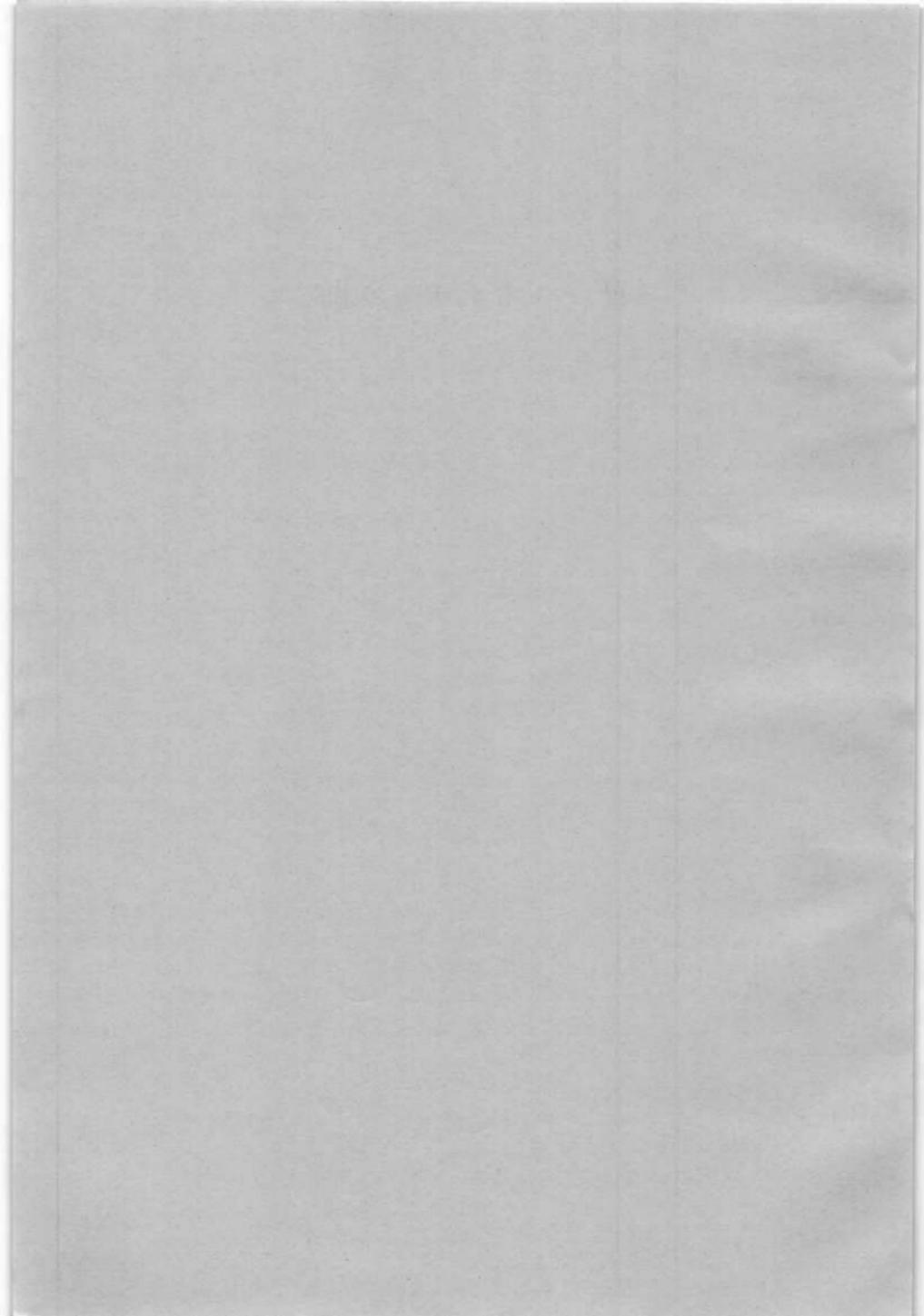


2 2号墓出土刀子 保存处理后



3 2号墓太刀保存处理前(上) 处理后(下)

## IV ユオイチャシ跡



## IV ユオイチャシ跡

### 1 概 要

ユオイチャシ跡は、沙流川沿いに長くのびた段丘の南端部を2重の弧状線で区画した丘先式チャシである。北東—南西方向60m、北西—南東方向45m程度で、総面積は2,000m<sup>2</sup>弱、丘先式チャシとしては、比較的大きな部類に入れられよう。標高47m内外、崖下との比高15m程度で、外周は急崖をなしている。前章までに触れたように、ユオイチャシ跡の主体部は水田造成によって破壊されており、周縁部のみが削平を免れて小高く残されていた。

昭和58年度に、東縁部を除いた大部分の地区を調査し、2重の濠や、金属製品をはじめとする多数の遺物が検出された。チャシの内部には、柱穴なども若干見出され、建物などがあった可能性を否定できないが、破壊がすみ、遺構を認知できた例はない。残る東縁部は昭和60年度に調査、濠の東端部や段丘の東縁をめぐる櫛列跡、獸骨群などが検出されている。

なお、ユオイチャシ跡地区に見出された擦文時代以前の遺構、遺物については、第VI章に報告する。

(高橋 和樹)

### 2 壕 (図14、15)

ユオイチャシ跡の空濠は、段丘南端から北へ50~60m、段丘の幅がやや狭まって括れた状態となる。H-14、15区からM-13、14区にかけて、長さ28~30m程度の、2重のゆるやかな弧状に掘削されている。造田による破壊は、濠にも及んでおり、東西の両端部以外は削平され、下底部が辛うじて残存していた。外濠では7m程度が完全に失われ、断絶している。

保存状態が良好な両端部でみると、内濠の断面は上がやや大きく開いたU字状を呈し、上幅は3~4m、下底部では0.1~0.6m、深さ1.5m程度、外濠は、断面形がV字状で、上幅2~2.6m、下底部では0.2~0.5m、深さ1.3m程度である。

内濠については、昭和58年度の概報の表現に従えば、「縁辺部を除く基底部のほぼ全体は、不規則ながら断面W字状に掘られている」が、上部が破壊されて形状不明のため、全容を推定できないくらいがある。

濠は、図15西端部a-a'ラインでの断面実測図にみられるように、第III層真黒色土の上面から掘り込まれ、底はローム層を貫いて、第VI層灰黄褐色砂礫層に達している。

掘りあげられた堆土は、濠の両側に積まれ、西端部の断面図における5~8層といった盛土となる。

濠底には、西端部における1~4層および11~14層、東端部での1~8層のような、やや汚れた土層が堆積している。その直上には、東端部におけるIIe層がのるが、このIIe層は、花岡の検鏡結果、寛文3年(1663)噴火の有珠b降下軽石(Us-b)に比定される可能性が強いという。ただし、堆積後、流水等によりUs-bはかなり流失し、濠壁からの角閃石や、上部のTa-b層からの若干の軽石粒などを混入させていることである。Us-bは、後章のボロモイチャシ跡B濠にも、IId層として見出されており、こちらはより純一な組成を留めているといふ。Us-b層の上には、西端部のIIa、IIb、東端部のIIa~IIcなど、Ta-b粒を主体とする火山灰層が厚く堆積しており、さらにその上層には火山灰混りの腐植層が認められる。

濠底近くに達するUs-b、濠の大半を充填するTa-b層の存在は、濠の発達が、1663年から、さほど隔てではない点を示すものと思われる。

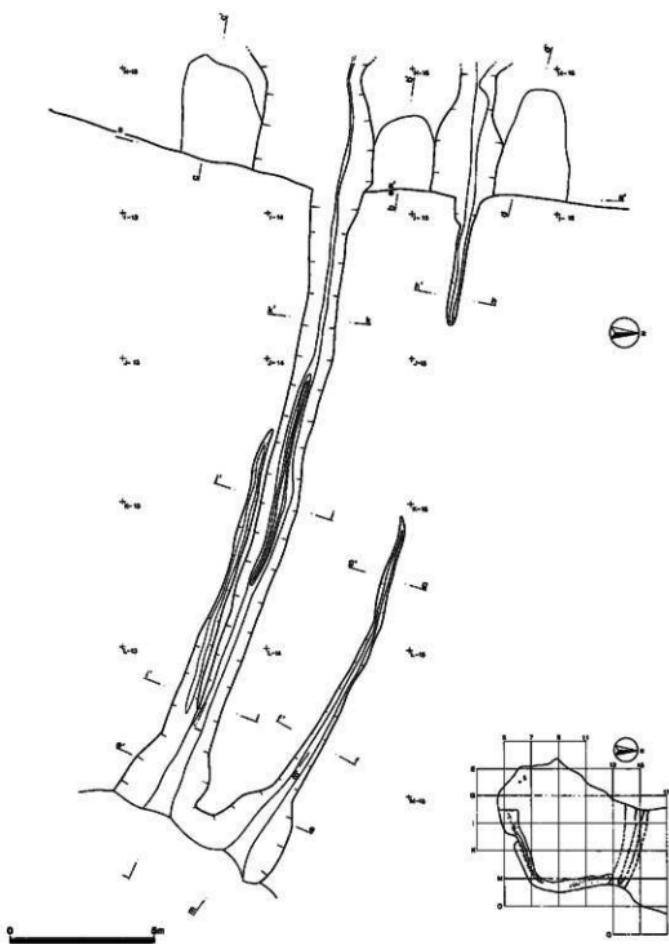


図14 ユオイチャシ塙平面図

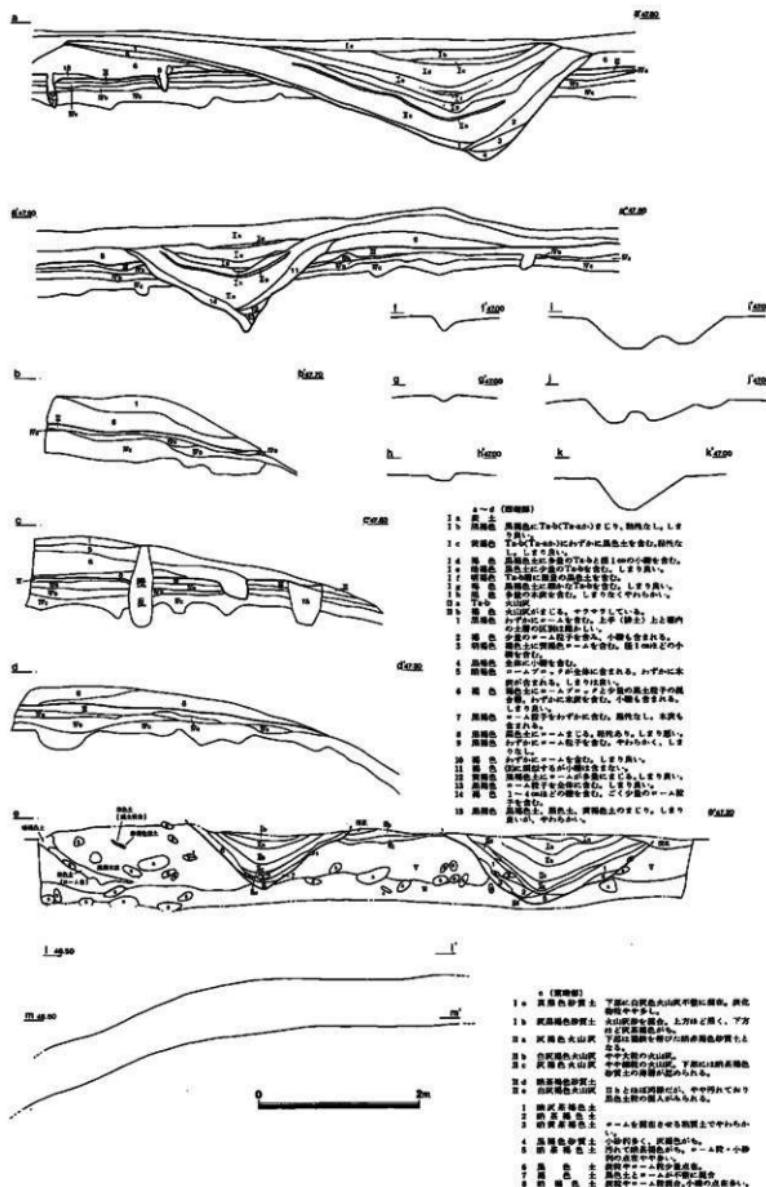


図15 ユオイチャシ断面図

棗の近辺では、西端部の断面にかかったものなど、柱穴様のピットが幾つか検出されているが、平面的な配列などには不明の点が多く、どのような施設があったのか、確認できていない。

(高橋 和樹)

### 3 櫛列跡 (図16~22、表1・2)

昭和60年度に残された、ユオイチャシ跡の東側縁辺部における調査区からは、ほぼその調査区の全城に及ぶ、櫛列跡が検出された。ここは、水田造成に際しても削平を免れ、小高く残された狭長な地区だが、途中、M-8~9区8m程の部分は、ユオイ沢に堰が設けられ、水田灌漑用の溜池がつくられた際、土砂が削られ、重機の通路にされて、破壊されていた。

櫛列付近では、一帯の第II層Ta-b火山灰を除去し、第III層真黒色土の上面を出した段階で、シカを主体とする獸骨片の集中的な分布が注意された。それらの獸骨を実測し、取り上げていく過程で、幾度か雨に見舞われて、櫛列を構成する造構内の覆土が収縮し、造構上部がやや深く陥み、そこへ除去しきれずに残った周囲のTa-b粒が徐々に流れ込んで集結し、2本の溝と点在する柱穴群とから成る櫛列跡が、くっきりと浮かび上がってきたのである(図版10)。

櫛列は、段丘上の平坦面が東側の崖際に至って、傾斜面へと移行する変換点あたりに構築されている。平面的には、H-5区から東北東M-7区へ連なり、ここで方向を北へ転じ、ユオイチャシ跡の棗に至る手前、L-12区へと続く。柱穴は、破壊された所を除いて、連続して並ぶが、溝は、M-10区より北方では、一部分しか確認できなかった。これは、当該地区的土層が軟弱で、特にその上部が崩れやすく、十分に旧状を留め得なかつたせいであり、本来的には、溝は、柱穴群と一体になって続いていると推定される。

溝は2列あり、40~70cm程間隔をおいて、並行して延びている。上幅は15~35cm、普通には20cm内外、底では、3~20cmくらいで、7~8cm程の所が多い。深さは、確認面から20cm程を測るのが通例である。溝は、底がほぼ平らで、内側の壁が垂直に近く、崖側ではやや緩やかな角度をなすのが一般的である。柱穴25の北に隣接する溝は、断面実測図に示したように、屈折した断面形をみせており、やや厚みのある板状のものが倒れて、底を斜めに抉ったかのようである。溝の底面が一定レベルで平坦につづくこと、溝底の最小幅がほぼ3cmであり、内側の壁が垂直に近く立っていることなどを考え合せると、溝には、厚さ3cm程の割板状の木材が長辺を下にして立てられていた可能性が強いと思われる。板材は溝には全く残存しておらず、柱穴における柱と同様に、抜き取られたものらしい。僅かに、横木にされた割板の断片と思われる木片が、柱穴14、27、38、42、61などから少量発見されており、北海道开拓記念館三野紀雄氏に鑑定していただいたところ、樹種はミズナラとのことであった。これについては、付篇の三野氏による報文を参照されたい。

柱穴は、全部で64個が確認できた。柱穴は、大局的には、それぞれの溝に直接重なるか、崖寄りに近接して掘られている。柱穴10、13、26、29など、溝から内側へやや離れて位置するものは、櫛列の主要構成部とはやや異なった、付属的な機能が認められるべきかも知れない。柱穴の平面形は、ほぼ円形で、壇口部と壇底部の輪郭とが相似的に重なるのが通例で、恐らく柱はほぼ垂直に立てられていたと思われる。柱穴35、63など、柱穴が斜めに傾く例は、他とはやや異なる働きのものかも知れない。柱穴に柱が遺存していた例は全くなかった。

柱穴の規模は、表1および図18に示すとおりである。これは、柱が抜き取られ、さらに側壁が崩れて、穴が拡大した後の大きさで、必ずしも本来的な数値ではない。壇口部でみた大きさは、最小の柱穴63から最大の同24まで、様々である。しかし、最大の24においても底径は17×11cmで、特に大

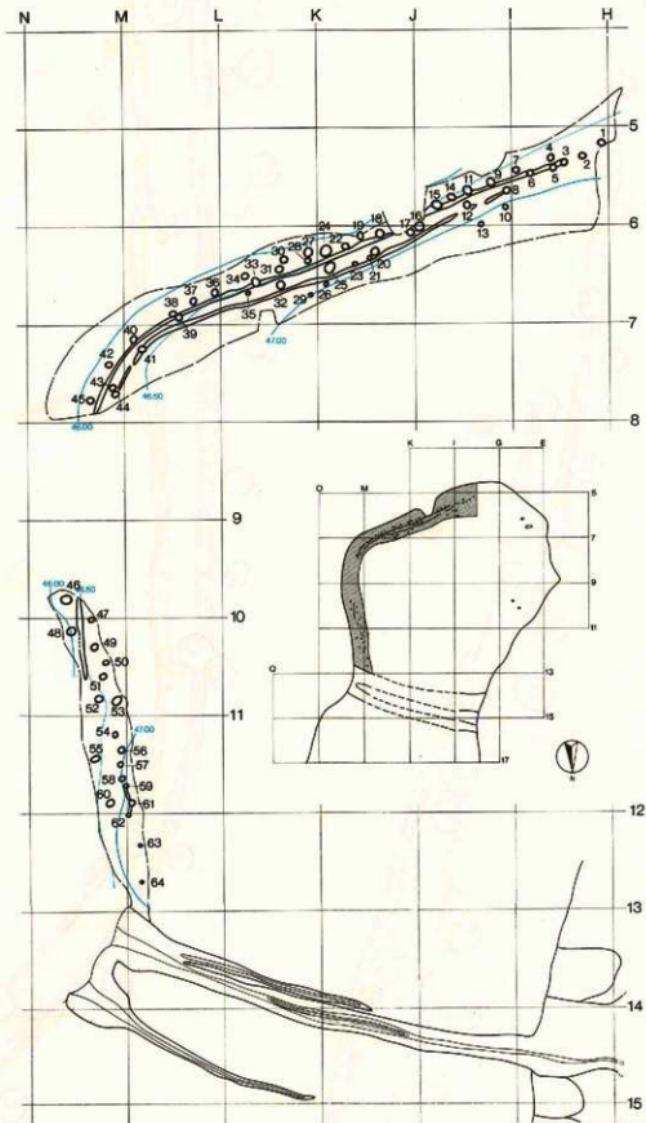


図16 ユオイチャシ横列跡全体図

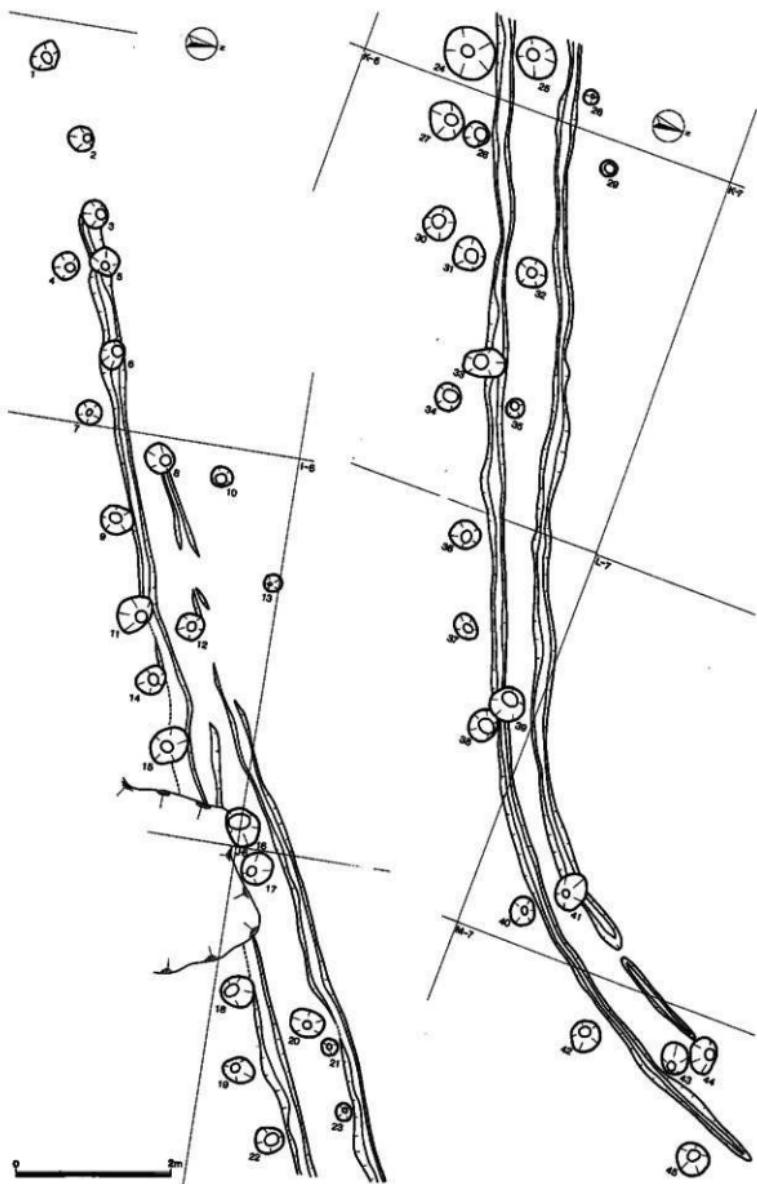


図17 ユオイチャシ柵列跡平面図

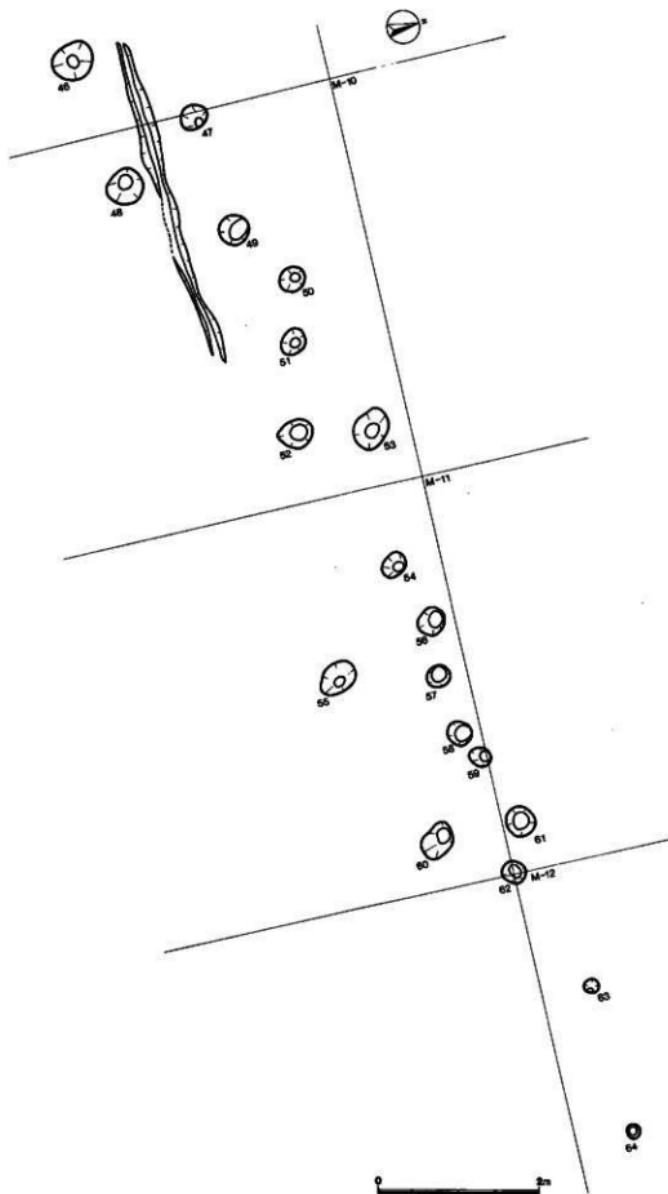


表1 ユオイチャシ櫛列跡柱穴一覧

柱穴番号	規格			覆土	出土遺物
	底口部 cm	底面部 長径×短径 cm	底面 厚 cm		
1 H-5	37×33	28×18	45	黒褐色土(黒色がち)	
2 *	33×31	12×10	52	" "	
3 *	35×33	15×14	53	暗褐色砂質土	シカ椎骨片
4 *	38×35	13×11	58	黒褐色土	
5 *	37×32	12×10	45	"	椎骨片9.3g
6 *	39×31	15×12	56	黒褐色土	
7 *	35×34	11×9	51	黒褐色土(黒色がち)	
8 I-5	40×35	14×13	52	暗褐色土(黒色がち)	
9 *	42×38	15×13	52	黒色土	
10 *	27×25	15×15	47	暗褐色土	
11 *	51×41	15×13	58	黒褐色土	
12 *	36×34	13×11	58	" (黒色がち)	
13 *	24×22	5×3	35	暗褐色砂質土	
14 *	39×33	14×12	61	黒褐色土(黒色がち)	木片3, 椎骨片0.8g, 木炭片1
15 *	51×49	14×14	59	暗褐色土	シカ骨など
16 I-6	50×41	27×19	60	黒褐色土(黒色がち)	シカ椎骨片など, 木炭片1
17 J-6	41×38	13×13	55	" "	
18 *	43×35	18×13	53	" "	
19 *	42×30	11×11	59	" "	
20 *	45×37	11×10	49	" "	
21 *	22×22	8×7	48	暗褐色土	シカ骨など
22 *	36×35	18×15	56	暗褐色土(黒色がち)	
23 *	23×22	8×7	55	" "	シカ角片など
24 J-6	70×55	17×11	72	黒色土	シカ大顎骨片
25 *	55×45	17×15	52	暗褐色土(黒色がち)など	椎骨片9.3g
26 *	26×18	6×6	41	黒褐色土(黒色がち)	シカ骨など
27 K-6	49×45	16×15	72	" "	木片1, シカ椎骨など, 石片1
28 *	33×31	17×17	41	" "	シカ椎骨など
29 *	21×20	13×12	58	褐色マム質土	
30 *	43×40	18×15	53	黒褐色土(黒色がち)	シカ脛骨など
31 *	43×40	14×11	54	" "	鐵文土器片1
32 *	39×35	13×11	57	" "	シカ椎骨など
33 K-6	55×35	20×18	57	黒褐色土(黒色がち)	椎骨片2.8g
34 *	35×33	18×18	68	暗褐色土(黒色がち)	
35 *	23×21	11×10	34	暗褐色砂質土	
36 L-6	38×35	16×11	55	黒褐色土(黒色がち)	
37 *	36×27	13×11	59	暗褐色砂質土	
38 *	43×36	22×17	53	黒褐色土(黒色がち)	木片1
39 *	46×45	22×17	62	"	シカ齒など
40 L-7	37×32	10×9	54	黒色土など	
41 *	49×38	11×9	68	黒褐色土(黒色がち)など	シカ下顎骨など
42 M-7	46×33	15×13	57	黒褐色土	木片1
43 *	42×39	17×15	53	"	
44 *	46×35	15×13	58	黒色土	シカ後頭骨など
45 *	43×40	17×14	58	黒褐色土(黒色がち)	
46 M-9	59×43	16×15	60	暗褐色砂質土	シカ下顎骨
47 *	34×30	12×9	50	暗褐色土	シカ大顎骨片
48 M-10	46×43	18×17	66	"	
49 *	38×36	31×17	52	"	シカ対頂骨など
50 *	36×30	12×19	53	暗褐色砂質土	シカ歯骨など
51 *	35×28	12×12	48	黒褐色土	シカ椎骨など
52 *	43×35	22×29	33	"	
53 *	55×41	17×16	44	黒褐色土(黒色がち)など	
54 M-11	37×27	13×12	52	暗褐色砂質土	シカ中手骨
55 *	55×35	15×11	62	暗褐色砂質土	シカ骨など
56 *	36×30	20×17	62	暗褐色土	シカ大顎骨片など
57 *	29×27	17×14	62	暗褐色砂質土	シカ椎骨など
58 *	31×29	20×20	55	暗褐色土(黒色がち)	シカ肋骨片など
59 *	25×21	13×13	62	暗褐色砂質土	
60 *	49×33	14×11	60	暗褐色土	シカ頸骨
61 L-11	37×34	20×19	42	暗褐色砂質土	木片1
62 M-12	31×29	19×13	45	黒褐色土	鐵文土器片1
63 L-12	37×34	8×9	39	暗褐色砂質土	
64 *	19×17	13×13	43	褐色マム質土	

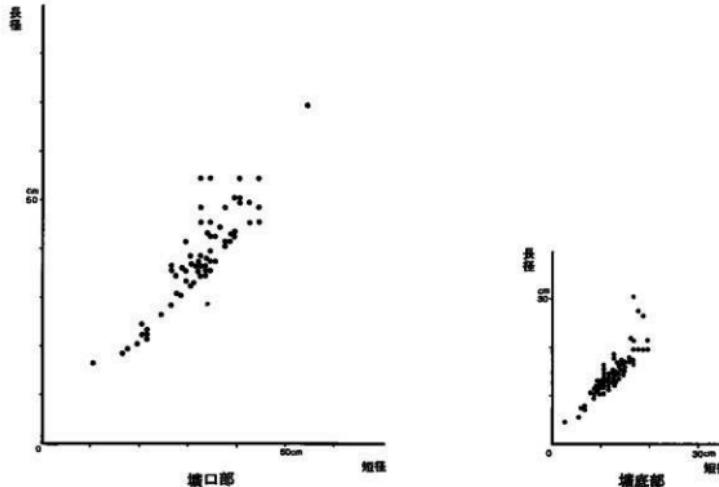


図18 ユオイチャシ櫛列跡柱穴の規模



図19 ユオイチャシ横列跡実測図・歎骨出土状況図(1)

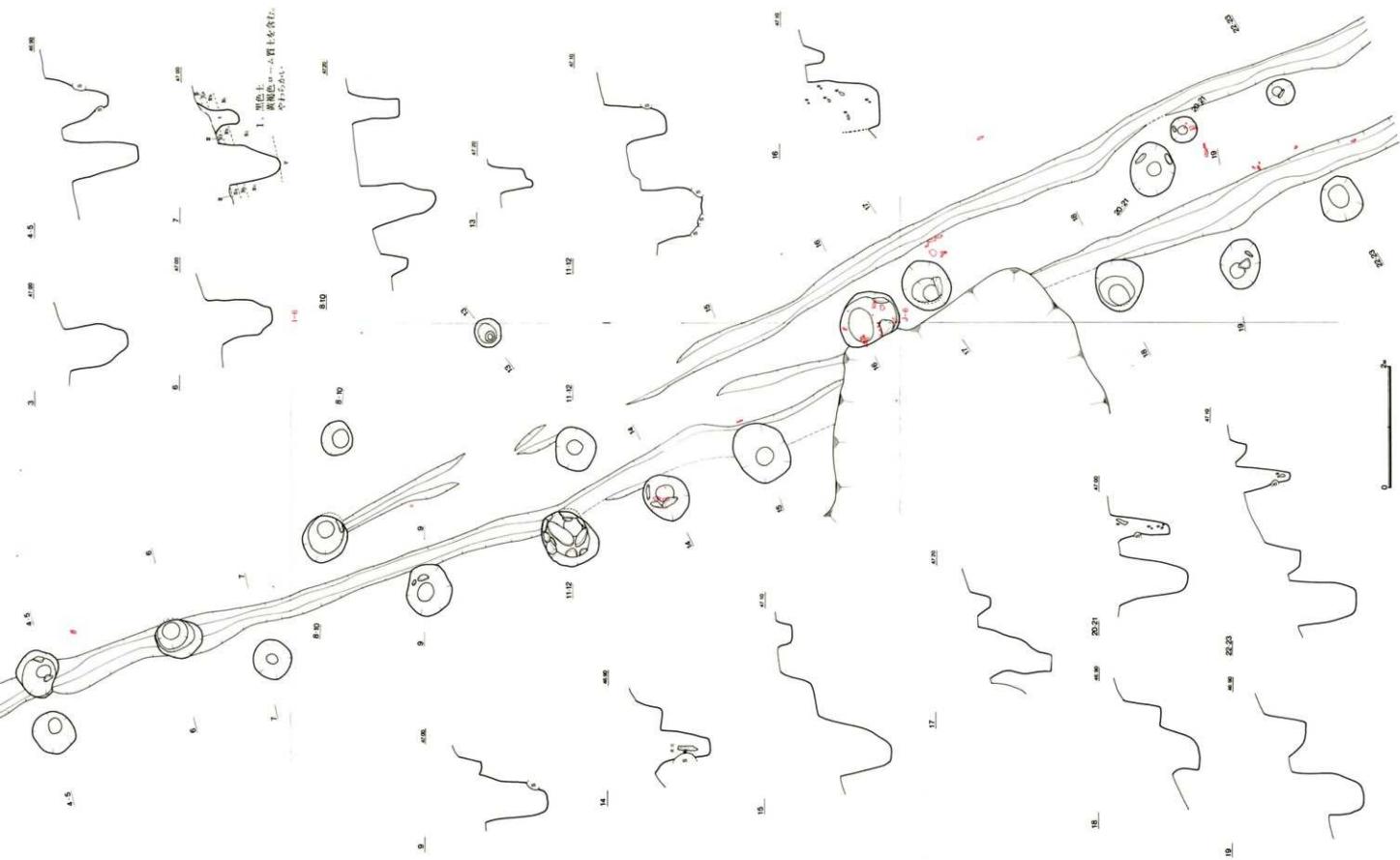


図19 ユオイチャシ柵列跡実測図・獸骨出土状況図(1)

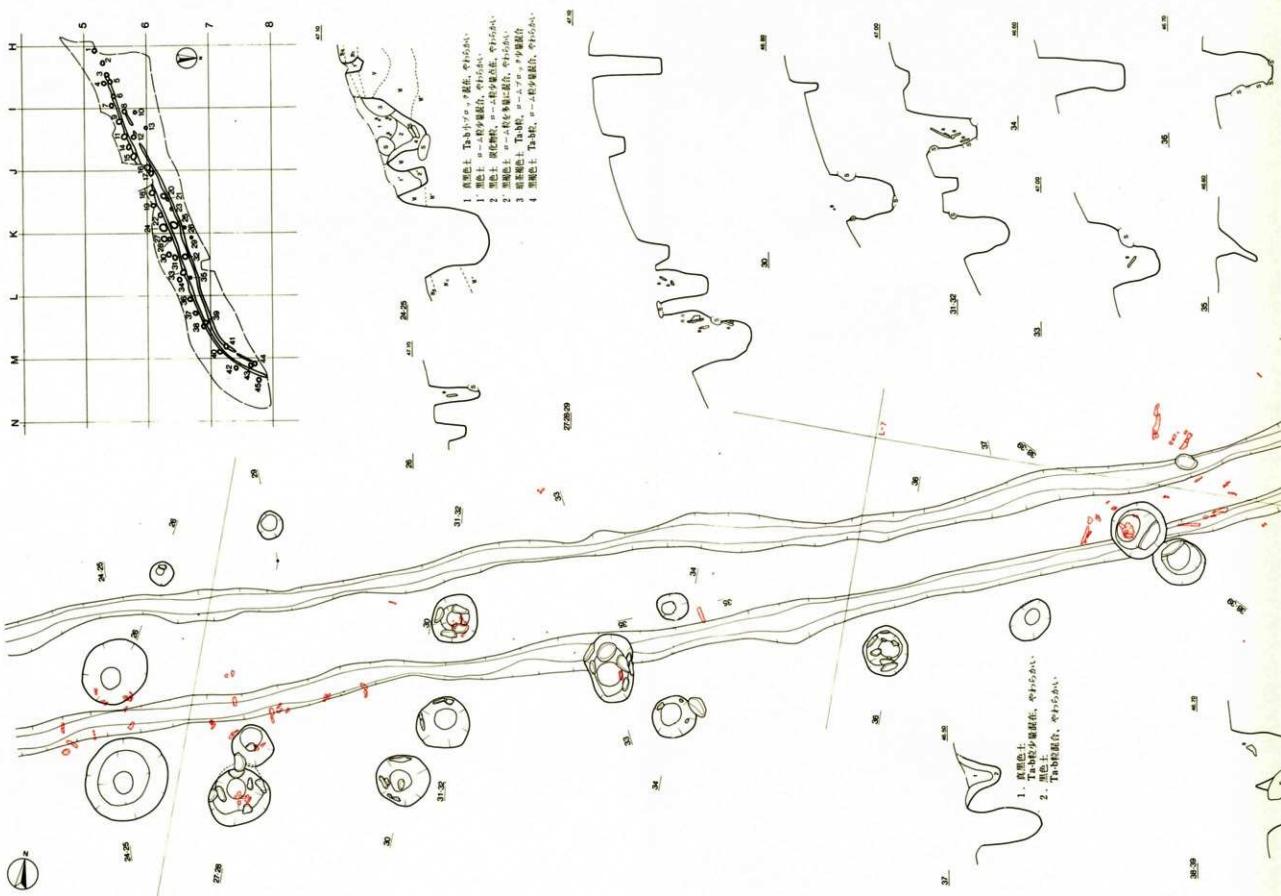


図20 ユオイチャシ播列跡実測図・獣骨出土状況図(2)

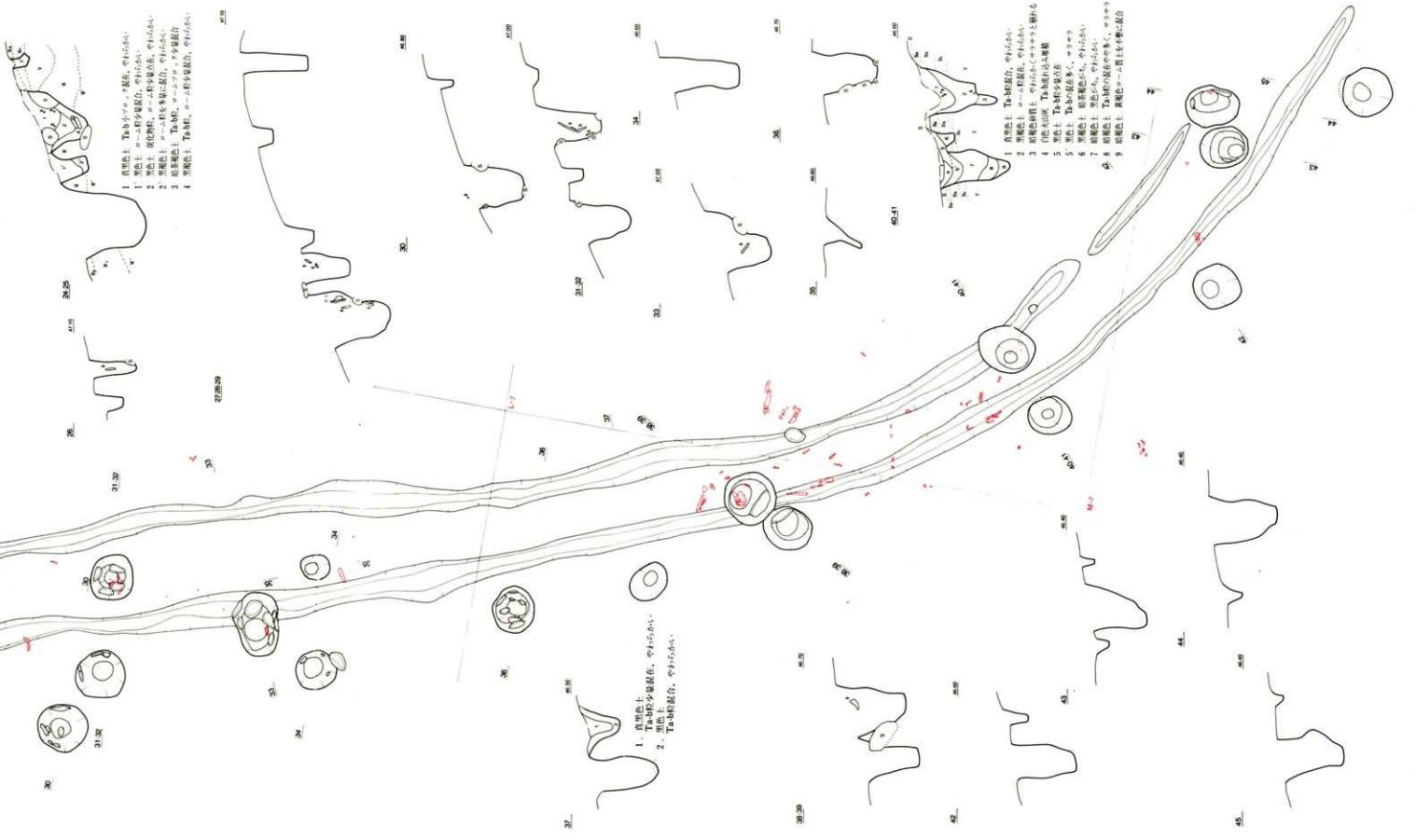


図20 ユオイテヤシ橋列跡実測図・歯骨出土状況図(2)

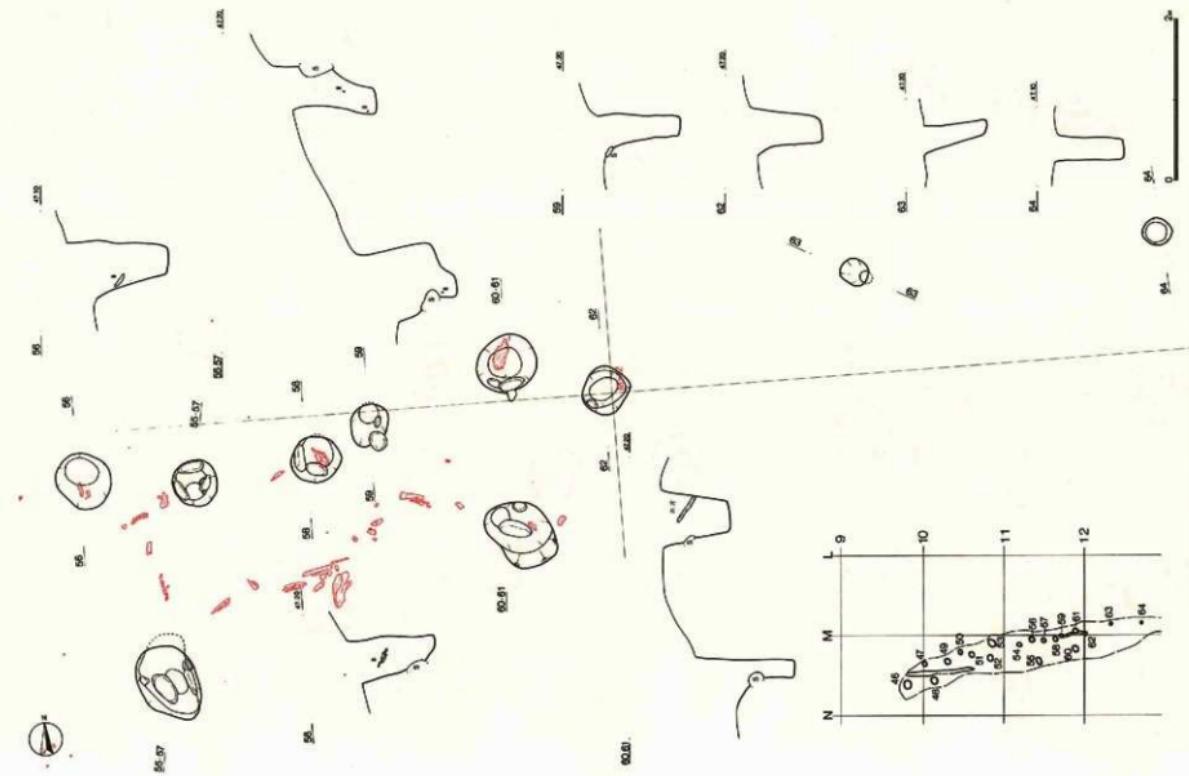
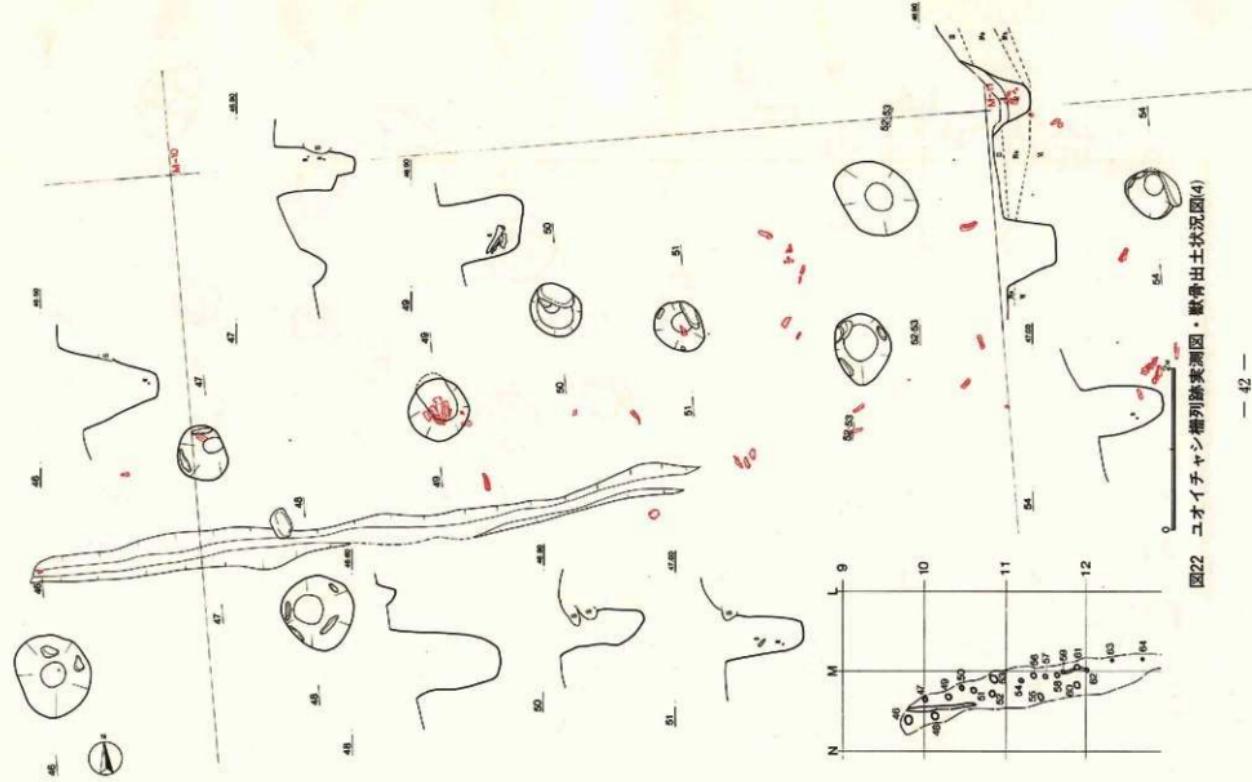


図21 ユオイチャシ番列跡実測図・発掘出土状況図(3)



ユオイチャシ埋列跡発掘図・歯骨出土状況図(4)

きいわけではない。壇底部についても、最小の柱穴 13 から同 49 まで、大きさはいろいろである。底径が 20 cm を超える場合でも、壇底面に径 10 cm 内外のごく浅い窪みを指摘できる例が多く、特別に太い柱が埋められていたわけではなさそうだ。柱穴 41 では、断面図にみられるように、径 9 cm 程の小穴が壇底を突き抜けている。柱が打ち込まれたというのではなく、壇底部の地盤が偶々脆く、二次的に柱が深く刺さったものと思われるが、これによって、柱の太さがほぼ 9 cm くらいであった事実が知られる。柱穴 21、23、26、29、59 などは、柱の太さより一回り大きいだけのもので、柱穴が最も効率的に掘られた例といえよう。アイヌ民家（チセ）の建築においては、ホタテやホッキの貝殻を利用して柱穴を掘ったといわれるが（萱野 1976）、柵列の柱穴もそれと同様に、予め掘り込んだ穴に柱を埋けるという方法がとられたものと考えられる。柵列がめぐる段丘東縁部の土層には大きな礫の点在が多く、柱穴の掘削に際して、礫を除去するため、必要以上に大きな穴を掘らなければならないケースが多かったらしい。加えて、柱が抜き去られたのち、さらに側壁が崩壊した例が少くないようだ。なお、柱穴 35 は、杭が斜めに打ち込まれた可能性のある、例外的な存在である。

柱穴や溝を埋めていた土層については、以下の 5 例について断面を観察し、実測図を作成した。

1. 柱穴 7 の北西の溝
2. 柱穴 25 およびその南北を走る溝
3. 柱穴 37 付近の溝
4. 柱穴 40, 41 およびその間の溝
5. 柱穴 53

柱穴 25, 40, 41, 53 の覆土については、全層名を実測図に付記した。その他の柱穴については、主要な土層について表 1 に記載した。柱穴内の覆土は、一般に、上層は軟らかな黒色土で、底近くでは砂っぽくサラサラした暗褐色土となっている。柱穴内には、獸骨や柵列の残片と思われる木片などが遺存しており、これらについては、エレベーションに投影して、出土レベルを示すよう努めた。溝には、通常、ごく軟らかな黒褐色がちの色調の暗茶褐色土が入り込んでおり、獸骨などの点在があった。

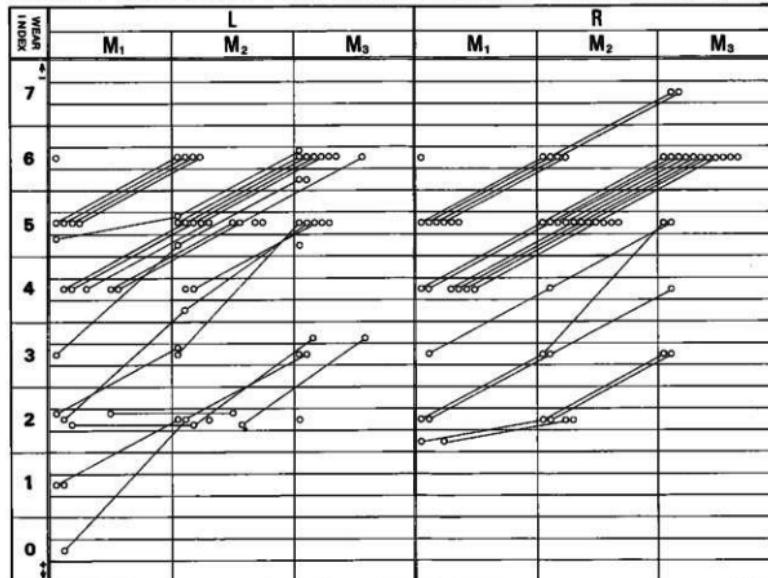


図23 ユオイチャシ柵列跡出土のシカ下顎後臼歯磨滅指數 (L: 左側, R: 右側, M<sub>1</sub>~M<sub>3</sub>: 第1~第3後臼歯)

（1） 第一任香港出土動物標本  
2007年1月1日

図2 ユオーデチャントリニウム土酸化物水合物一観察 (2)  
 (構成元素の組成分析、構造上、L: 水、R: 硫酸、C: クロム、P: フォスファト、M: 鉄鉱物、H: 水素、H<sub>2</sub>O: 水分子)

| 区 分 | 名 称 | 上 | | 中 | | 下 | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | | E | | F | | G | | H | | I | | J | | K | | L | | M | | N | | O | | P | | Q | | R | | S | | T | | U | | V | | W | | X | | Y | | Z | | A | | B | | C | | D | |
<th colspan
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |

柱穴や溝には、少量ながら、土器片や石片など、より古い時代の遺物の混入もみられた。

#### 櫛列跡出土の動物遺存体について

上述のように、櫛列跡の検出に先立って、歯骨の集中分布が注意された。歯骨は、第II層 Ta-b 火山灰を直接かぶった状態で、第III層真黒色土の上面に遺存、さらに、櫛列の溝や柱穴の中にも入り込んでおり、これらの遺構を精査する過程でも多数発見されている。歯骨の分布は明らかに櫛列跡に集中して重なっており、この一致は単なる偶然とは思われない。さらに、ここでは、特に歯骨の出土量が多く、また各部位の骨が豊富にみられるなど、他とはやや異なった特殊性が認められ、櫛列の存在と無縁には、説明することが困難と思われた。

動物遺存体の同定は、早稲田大学金子浩昌先生にお願いした。本書における記載は、同定の結果やその後の御指導に基づくものだが、時間的な制約などから、一覧表の作成や執筆を報告者に一任していただいた。従って、誤りがあれば、その責は報告者が負うべきものである。

動物遺存体の殆ど大部分は、エゾシカのものであった。シカ以外には、ヒグマの大腿骨、カジキ類の尾椎体がそれぞれ1個、種を判別できない貝の小片が少量得られただけである。ヒグマは若く、小さな個体のもの。カジキは、時代はやや降るが、沙流川の河口に近い門別町シノタイ I-A 遺跡において、その送り場が検出されている（原谷 1979、大塚 1981）。シカは、ほぼ全身の骨格が見出されているが、指趾など末端部以外の骨は、いずれも分割、破碎されており、完全なものは見当らない。

頭蓋骨では、左右の揃った角坐部の出土例が比較的多い。角坐から後頭にかけての数量に比して、切歯骨など吻端部分の検出は少ない。歯は数が多く、当初は、頸骨の揃った頭蓋が多かったようだ。上顎歯は、角坐骨などと同様に、L-6、7 区から M-7 区にかけての出土が多く、一方、M-10、11 区などでは下顎歯の検出が圧倒的に多い。何らかの人為的な配置を認めることが可能かも知れない。上顎では、頸骨部の遺存量が低く、歯のみの検出例が多い。下顎では、上顎よりも頸骨を伴う歯の遺存量が多かったが、その保存状態は必ずしも良好ではなかった。

ところで、下顎歯については、歯の磨滅における加齢変化に関する大泰司紀之氏の研究（大泰司 1981）に基づいて、可能な限り、それぞれの磨滅指数を調べた。その結果は、図 23 に示すとおりである。磨滅の程度が過渡的で、各指數に合致しない場合は、金子先生の御指導により、磨滅がより進行しているものには+、いま少し磨滅がその段階に到達していないものには-を付して区別した。結論的には、第1後臼歯 ( $M_1$ ) の磨滅指數が 6 という、ごく若い個体から、第3後臼歯 ( $M_3$ ) のそれが 2 に至る、推定 11 歳以上の老成したものまで、各年齢のシカの歯が確認されている。なかでも歯の比率が高く、第2後臼歯 ( $M_2$ ) の磨滅指數が 5 以上になる、推定年齢 3~4 歳くらいより以下のものの数が過半を占めるようだ。自然の年齢構成において、より個体数の多い若いシカが、より多く捕獲されているという、ごく無理のない照応関係が認められるといえようか。

椎骨や肋骨の出土量は少なく、獲物は、ある程度解体処理されたもの、搬入されたものと思われる。肩甲骨や上肢骨、寛骨や下肢骨も、他の地区の状況に比べれば、種類も數も豊富といえるが、歯などから知られる個体数に照らしてみると、その遺存量は決して多いものではない。上腕骨、橈骨、中手骨など上肢骨の検出は、どちらかといえば L-7 区までの南側の地区に多く、M-9~11 区など、遺存体が多量に得られた地区に、かえって少ないという現象がみられた。上述した、歯や角における分布の偏りなどと考え合わせると、やはり何らかの配慮があったように思われる。また、中手骨や中足骨は縦に半割された例が多く、とりわけ前面部の検出が多い。金子先生は、中柄などの材料として後面部がより多用され、残存率が減少することを説かれている。櫛列付近では、解体ばかりでなく、骨角器製作へ向けての第一次的な加工作業も、実施されたことが窺われる。

（高橋 和樹）

## 4 遺 物

ユオイチャシ跡から出土した遺物は、磁器片2点、鉄鍋片5点、太刀・刀子類10点、釣針1点、キセル1点、古鏡5枚、ガラス玉4点、漆器片1点の他、用途不明の鉄器14点が出土している。層位的には、チャシ跡の中央部の削平などによって、二次的に動かされたものも含まれている。

### i) 染付碗 (図24, 表3, 図版12)

同一個体である破片がE-6区・F-10区から、

それぞれ1点、出土している。これは、染付碗で中国明代後半の輸入磁器である。推定口径11.4cm、厚さ2.5~3mmである。胎土は白色、堅硬である。文様は山水とみられ、吳須の発色は暗青色から淡青色を呈する。口縁外面に2本、内面に1本の團線がそれぞれあり、見込みにも2本の團線がある。口唇は外側がやや角張り、口唇下の團線部分で釉が厚くなっている。

(田中 哲郎)

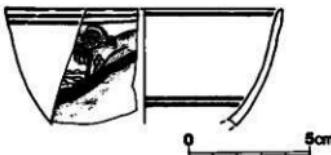


図24 染付碗

### ii) 漆器片 (表3)

H-5区、ユオイチャシ跡の南の先端部で出土したものである。椀とみられるもので、厚さ3mmほどの口縁部の木地の破片が残存している。口唇形態は丸い。外面が朱塗、内面が黒塗である。また、内面には朱塗で弧線が描かれており、家紋の外輪線とみられる。

(田中 哲郎)

### iii) 金属製品 (図25・26・72, 表3・38~40, 図版13~16)

出土状況は、単体、破片で縁辺部から出土するものが多く、外周櫛列跡に多量に出土する獸骨と同様に、送りのようなことを考えるべきかもしれない。6の毛抜形太刀は、58年度と60年度の調査範囲から単体で出土している(図版14-1・2)。完形品であり、刀装具も残っていることから、遺棄されたものとも思われず、その意味に興味がもたれる。縁辺部からやや中に入った地点では、F-5区のように小刀2本が並んで出土し、周辺に擦文土器片が散在している状況(図版13-1・2)がみられる。G-10区では、1の鉄鍋と12の刀子片が焼骨や炭化物と出土し、1.5mほどはなれて古鏡4枚(31~34)が、ガラス玉(30~39)とひとかたまりで検出されている。

以下、個々の遺物について若干の説明を加える。図25-1~5は鉄鍋片である。1は推定口径35.0cm、口縁部と胴部のなす角度から見て、吊耳鉄鍋の破片と思われる。2~3は口縁部片で、傾きから内耳鉄鍋の可能性がある。4は胴部片。2~4は縁辺部(櫛列)から出土している。5は、底部一文字湯口部分の破片。一文字湯口は、既知の例では内耳鉄鍋にしかない湯口形態である。内濠の中から出土している。6~9は刀である。6は、前述した出土状態を示す毛抜形太刀である。毛抜形太刀は現在まで北海道では、芦別市野花南木村遺跡・江別市後藤遺跡1号墳・豊富町豊里遺跡の3例しか報告されておらず、網走市モロ貝塚の毛抜形透しのある蒙手刀を加えても4例のみで、これで5例目の資料である。全長56.9cm、刃長39.0cm、元幅3.2cm、刃反り1.0cm、全反り4.8cmをはかる。茎部分の反り返りが目立つ。刃部は平刃平造りで、切先部分の刃先を一部欠く。茎には、地板に毛抜形の両端の退化した透しが入り、緒通し孔をもうけた後、柄頭部分まで地板が続く。この地板に、鍔から緒通し孔のある側辺まで鉄製の覆輪がかかり、その端に一部重なって鉄製の兜金がついている。また覆輪の内縁部に沿って、一部に鉄線が残っている。鍔部分は、銅等によりこわれた鉄製喰出鍔と、両側にある鉄製縁金からなる。この縁金は、刃側が鍔の役をなし、茎側は覆輪のおさえになっている。また鞘の金

具として、切先付近と元付近に、單脚单輪の足金物、その中間に資金具が残っている。いずれも鉄製である。7と8はF-5区で出しているもので、7は切先部が外反する幅広の小刀。平棟平造り、両区で、区の基側に、鉄製の金具がついている。茎は細長く、目釘孔はない。8は平棟平造りの小刀で両区だが、両方とも浅く緩かに茎に移行する。茎には目釘孔が1孔ある。9は、刀の切先から中央部にかけてのもので、刃部幅のわりに棟が厚い。平棟平造りである。折損部が直であり、そこからの棟側につぶれのあることから、折損後も、刀物として利用していたものと思われる。10~15は刀子である。いずれも刃部幅の狭いもので、10には使い減りがみられる。16は釣針で、円釘を加工して使ったよう見うけられる。そのためか鐵ではない。17は断面円形の釣金状の鉄製品。18は先端に鉤手がついているが、用途不明。19・20とも先端が尖っている。特に20は魚獲鉤の先端の可能性もある。22は環状部の一部である。29も環状鉄器で、これは鎌等の口金(タマクラ)である。23は刀子からの転用品のようで、棟側に半円形の抉りがある。用途はわからない。21・24は厚みのある板状の鉄片。

30は、銅製キャセル雁首である。火皿など全体的に大振りで、雁字の差し込まれる部分の外に織維質を巻いた痕跡がある。31~35は古銭で、31~34は、36~39のガラス玉と一括出土。首飾りであろう。32の角孔の一隅が加工されていることからも、それは窓である。32は皇宋通宝(北宋・初鑄年1039年)、34は洪武通宝(明・初鑄年1368年)、他は永樂通宝(明・初鑄年1408年)である。(三浦 正人)

#### iv) ガラス玉(図26、表3、図版16)

古銭のところで述べたごとく、4枚の孔開錢と一括出土した、4個のガラス玉がある。39を除き、風化して、変色、剝離しており、36は形状も不明である。色は39はコバルトブルー、他は淡褐色に見えるが、孔内の風化から守られている部分を見ると、やはりコバルトブルーである。37は5房、38・39は4房の蜜柑玉で、いずれも丸玉に筋入れをして加工したものである。39の片面の孔縁部は、製作時の面取りか、使用時のすれがみられる。東京国立文化財研究所江本義理氏による蛍光X線分析の結果、鉛が強いスペクトルを示し、鉛ガラスであることがわかった。詳細はVII章に記す。(三浦 正人)

表3 ユオイチャシ跡出土遺物一覧

番	No.	名 称	材 質	寸法 cm ( ) 内径外径	備 考
24	朱 付 鐵 箕	鉄	寸定(?) 直11.4	中腰部に透孔2ヶ	
25	1	劍	鉄	直定(?) 直25.9	口端部・刃耳附近?
2	鏡	鉄		口端部	
3	鏡	鉄		口端部	
4	鏡	鉄		柄端	
5	鏡	鉄		直定(?) 文字透口	
6	毛筆影太刀	鉄	直56.9・茎直18.8	足金物有り	
7	刀	鉄	直34.0・刃部幅2.7		
8	刀	鉄	直31.7・刃部幅2.4	押出	
9	刀	鉄	直(18.0)・刃部幅2.2	直手柄	
10	16 刀 子	鉄	直36.5・刃部幅1.5		
11	刀 子	鉄	直(7.8)・刃部幅1.3	切先部分	
12	刀 子	鉄	直(4.8)・刃部幅1.1	先端部分	
13	刀 子	鉄	直(3.8)・刃部幅1.4	刃部中央	
14	刀 子	鉄	直(5.2)・刃部幅1.1	刃部中央	
15	刀 子	鉄	直(5.4)・刃部幅1.5	刃部中央	
16	釣 鉤	鉄	直(7.8)	円錐の加工?	
17	針金状銀器	銀	直(25.5)	断面円	
18	鉤針状銀器	銀	直(6.0)		
19	棒状銀器	銀	直(4.0)	透穴有	
20	棒状銀器	銀	直(3.9)	断面円・ア先端?	

番	No.	名 称	材 質	寸法 cm ( ) 内径外径	備 考
21	不 明	銀	長(3.5)・幅1.3		
22	蜜状銀器	銀			断面円
23	不 明	銀	長(3.8)・幅1.1		断面半円缺あり
24	不 明	銀	短(10.1)・幅1.6		断面内
25	蜜状銀器	銀	幅2.5		断面内
26	蜜状銀器	銀	幅3.1		断面内
27	蜜状銀器	銀	幅(3.9)		断面内
28	不 明	銀	幅(3.5)・幅1.0		
29	蜜状銀器	銀	長(3.3)・幅2.9		タマクラ
30	* タマクラ	銀	長(7.3)・大口直1.6		銀管
31	古 銀	銀	直(2.3)		「永楽通宝」
32	古 銀	銀	直(2.35)		「永楽通宝」孔加工
33	古 銀	銀	直(2.3)		「永楽通宝」
34	古 銀	銀	直(2.2)		「洪武通宝」 と書
35	古 銀	銀	直(2.35)		「永楽通宝」
36	ガラス玉	ガラス	直(1.0)		風化
37	ガラス玉	ガラス	直(1.4)		5 寸直径玉
38	ガラス玉	ガラス	直(1.6)		4 寸直径玉
39	ガラス玉	ガラス	直(1.2)		4 寸直径玉・縫
-	蜜 棒	木	内径外径?		内径に角の様あり。口端部木の接着(厚3mm)

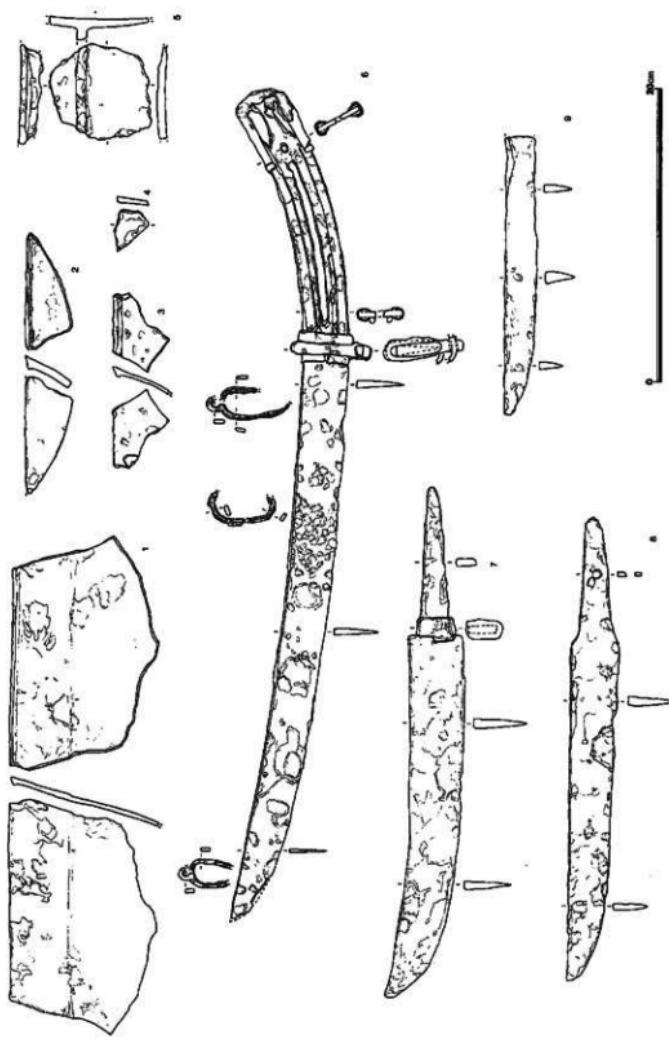
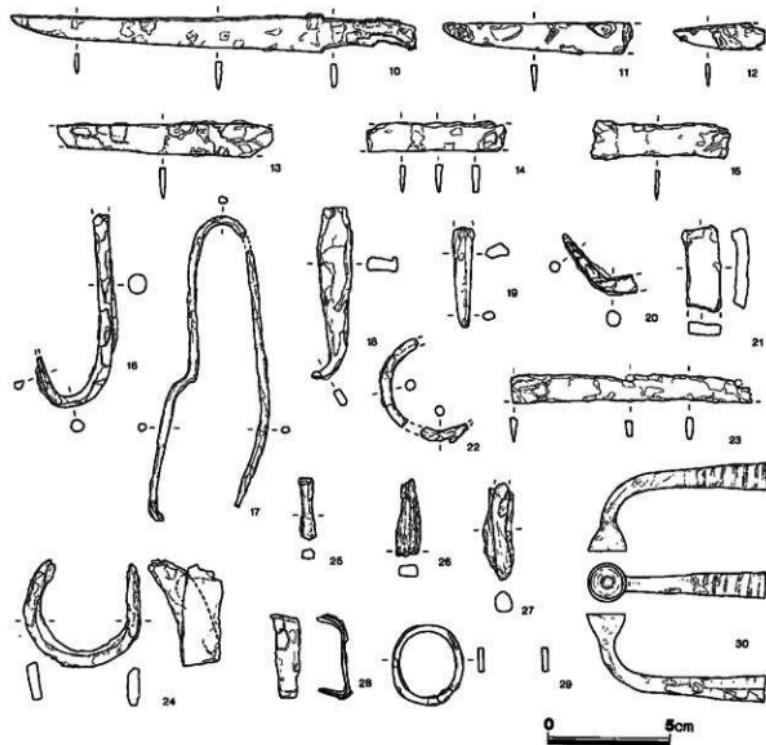
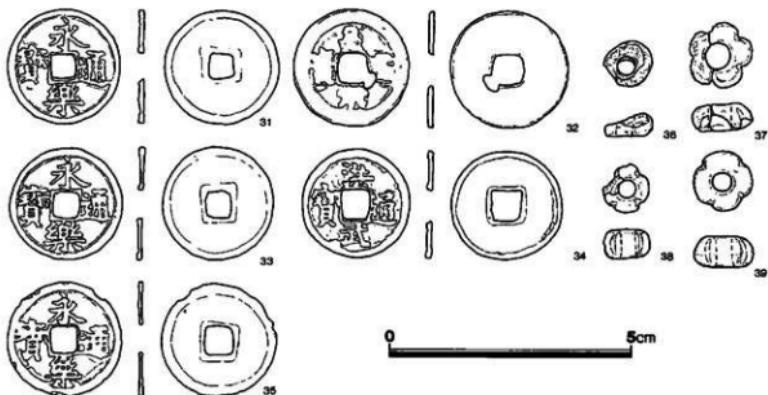


図25 金属製品(1)



0 5cm



0 5cm

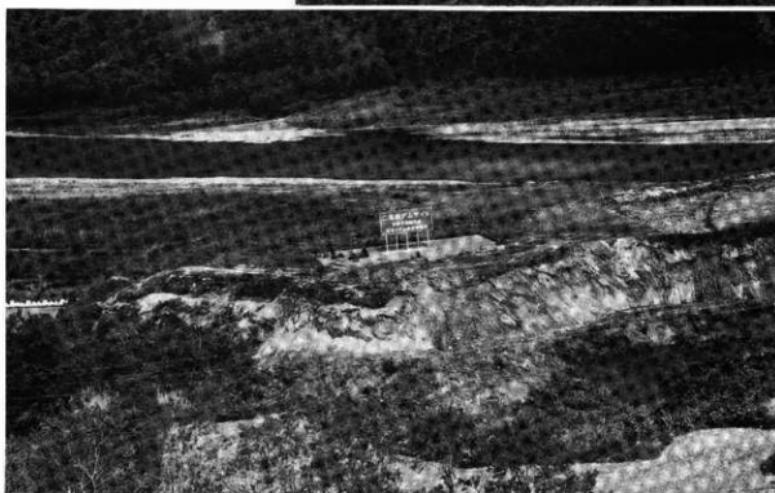
図26 金属製品(2)・ガラス玉



1 ユオイチャシ跡全景  
(沙流川堤防より)



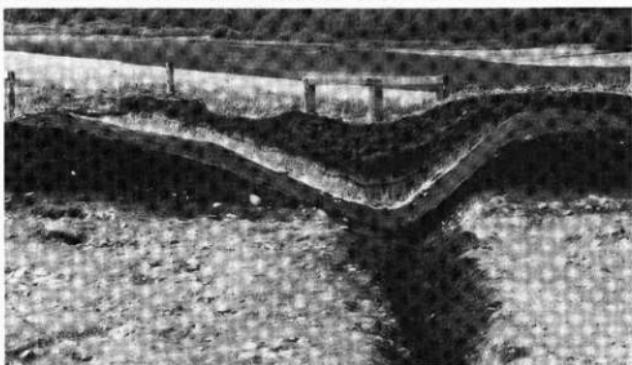
2 ユオイチャシ跡調査前風景



3 ユオイチャシ跡全景（南東山上より）



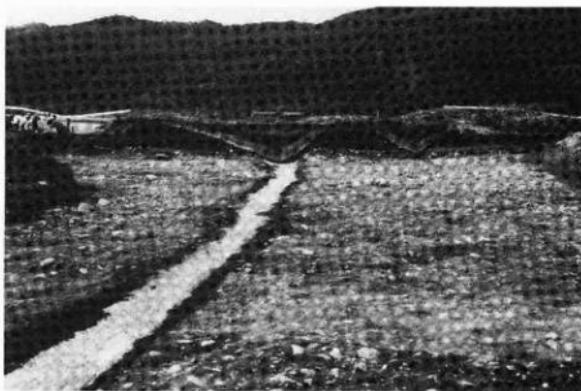
1 調査風景  
手前が堤  
(58年度)



2 内堤断面



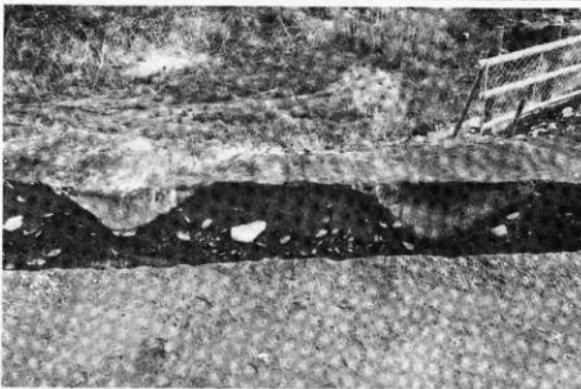
3 外堤断面



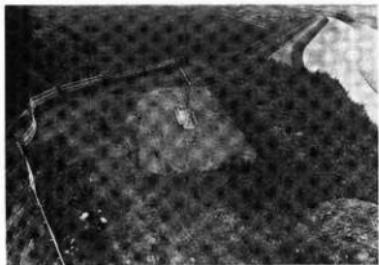
1 塙断面（左：内塙）  
底残存状況



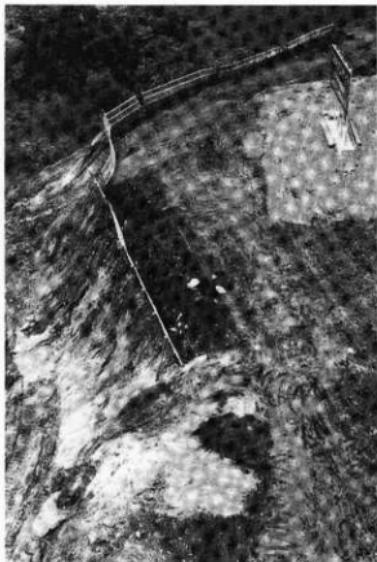
2 塙埋土除去後状況



3 塙断面  
(右：内塙、60年度)



1 棚列跡検出状況（60年度）



2 棚列跡状況（東）



3 棚列跡確認状況（南）（W→E）



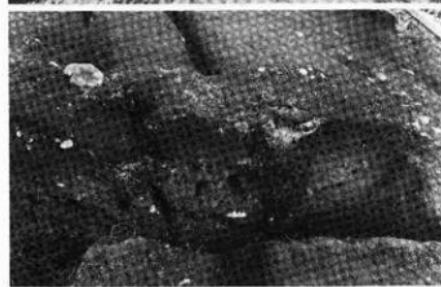
4 棚列跡検出状況（南）



1 構列跡（南）  
確認状況  
(NW→SE)



2 構列跡（南）  
検出状況



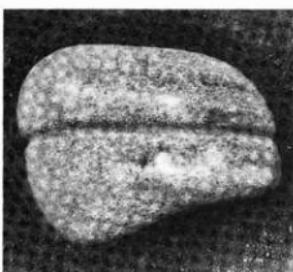
3 構列断面（W→E）



1 檻列柱穴No.39（上、シカ後頭骨出土）とNo.38（下）



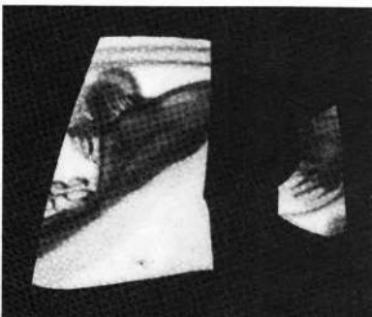
2 檻列付近シカ下顎骨出土状況



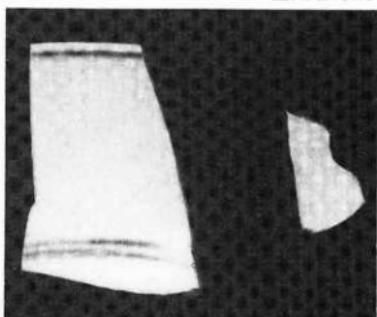
3 有溝砾出土状況



4 錘石出土状況



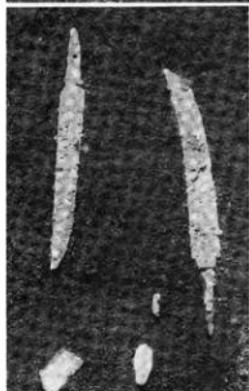
5 染付碗破片（表）



6 染付碗破片（裏）



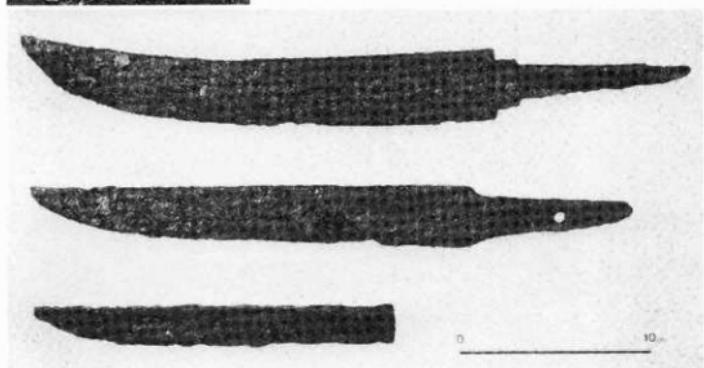
1 刀等遺物出土状況



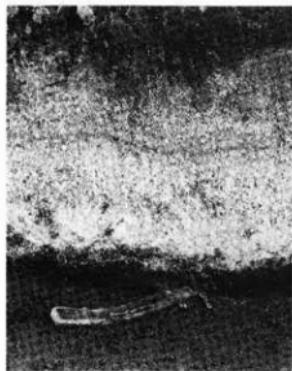
2 刀出土状況（1の拡大）



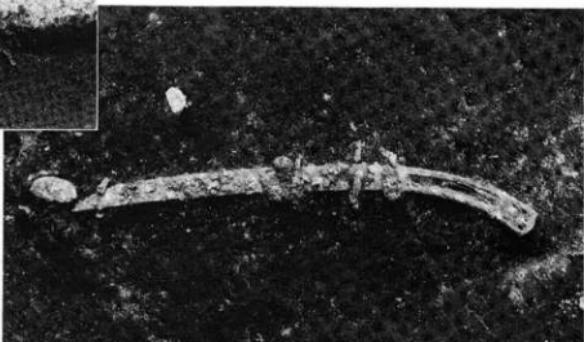
3 刀 区部分 X線写真



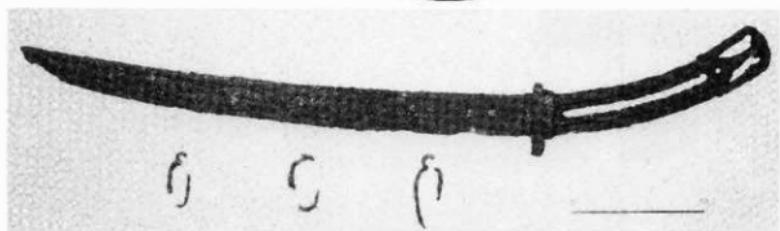
4 刀（上がX線のもの）



1 毛拔形太刀出土層位



2 毛拔形太刀出土狀況



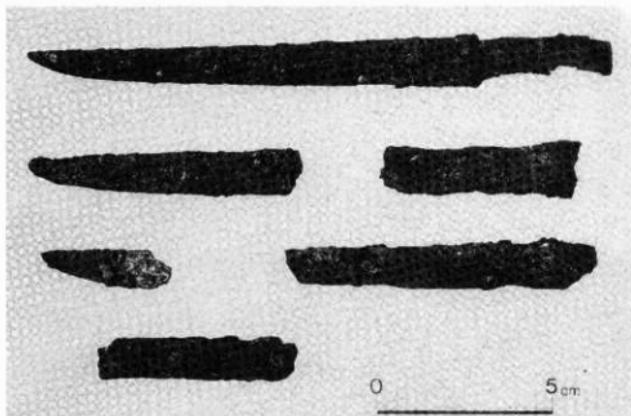
3 毛拔形太刀X線寫真

4 毛拔形太刀と足金物

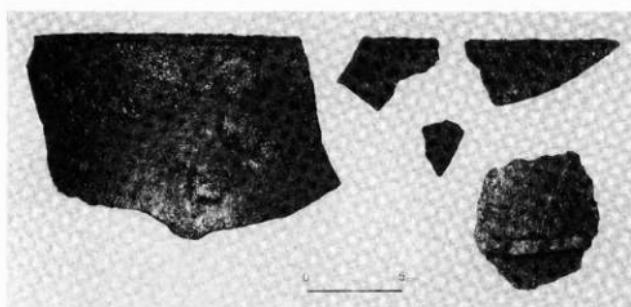
5 毛拔形太刀茎部

(約1/2)

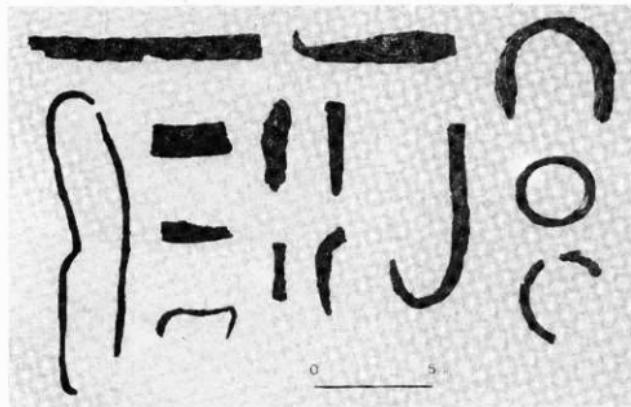




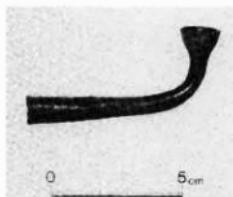
1 刀子



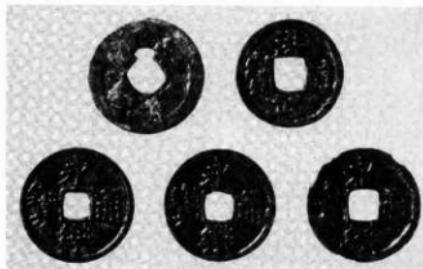
2 鐵鍋 (右下：  
一文字湯口)



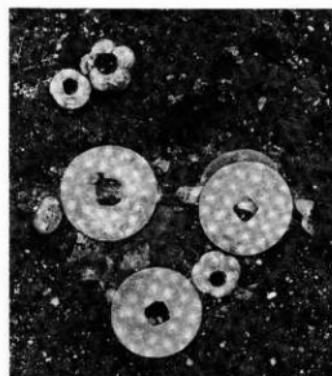
3 鐵器  
(中央右：釣針)



1 銅製キセル



3 古銭 (X 1)



2 古銭・ガラス玉出土状況



4 ガラス玉 (X 1)



①



③

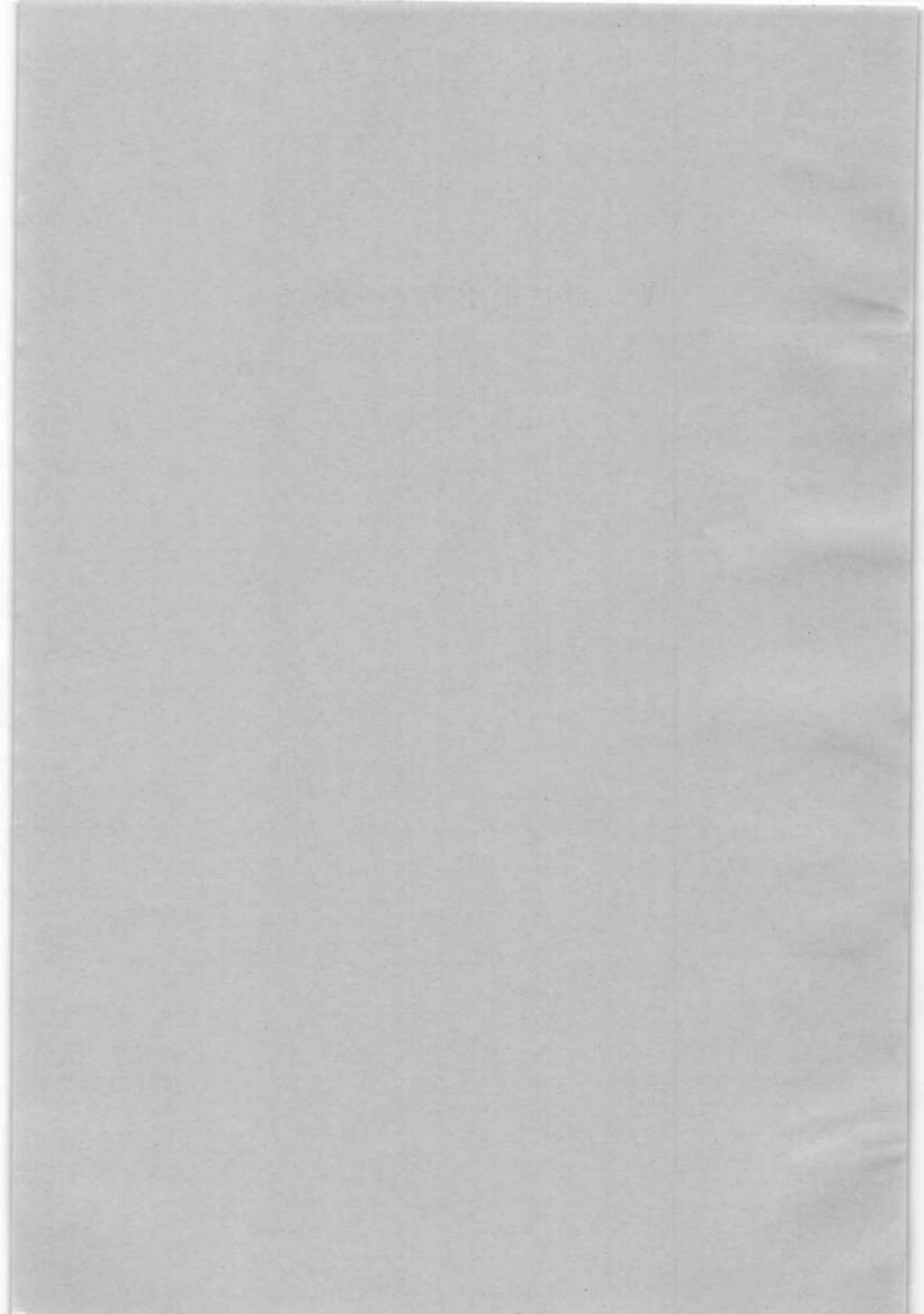


②

5 壁断面の剥ぎ取り

- ① 土壁断面の硬化
- ② 布貼り後の剥ぎ取り
- ③ 剥ぎ取り乾燥された断面

V ポロモイチャシ跡



# V ポロモイチャシ跡

## 1 概 要

ポロモイチャシ跡は、沙流川の河口より約20km遡った左岸の河岸段丘上に位置する。標高は47.5mほどで、河川面との比高は15mほどである。ポロモイとは、第II章にも触れたように、アイヌ語で“大きい・淵”を意味する。モイとは、川の蛇行により流路が湾曲して深い淵が形成されている状態を示す地名で、そこには、淵上するサケが休息のため集まるといわれる。沙流川流域ではモイ地形に隣接した段丘の縁辺部にチャシが立地する例が多い。

このチャシ跡は、地表からの観察で、三角状に張り出した段丘突出部の基部に、1条の弧状壕をめぐらせた比較的単純なチャシ跡として捉えられていたものである(道教委1983)。Ta-b層除去過程で、既知の壕の中間部から北東方向に伸びる弧状壕が、新たに確認された。そこで、既知の壕をA壕、それに区画された部分をA郭とし、新たに確認された壕をB壕、それに区画される部分をB郭と呼ぶことにしたい。A壕とB壕との間には、1.6mほどの橋状に残る部分があり、その土壠断面の観察から、A壕の掘削がB壕のそれより若干先行することが判明した。また、A壕の内側には土塁がめぐらされ、土塁上には柵列とみられる15個の柱穴が確認されている。

A郭・B郭には、それぞれ建物跡が確認されている。A郭の建物跡は、コの字形に盛土がめぐる7.8m×5.6mの主要部に、3.6×2.2mの張り出し部をもつものである。主要部の中央には炉跡があり、南西側を入口部分としている。また、建物跡主要部をめぐる焼土の広がり、壁材の一部とみられる炭化材の出土状況からみて、この建物跡は焼け落ちたものと推定される。これに対しB郭の建物跡は、A郭の盛土に相当する積み重ねられた礫がコの字形にめぐらされている。規模は、6.2m×5.9mで、ほぼ正方形に近い建物跡である。南西側に入口をもつものの、A郭・B郭の性格・機能がそれぞれ分れていたのであろうか。また、B郭では、建物跡の北東側に隣接して、足高倉跡とみられる4個の柱穴を検出している。出土遺物は、壕内も含めて、刀子類・内耳鉄鍋・鎌・鉈などの鉄製品の他、A壕内からは絵唐津大皿やA郭建物跡の炉跡からは鹿角製船先が出土している。量的にはA郭内からの出土が多く、B郭内の出土量を圧倒している。

このチャシ跡は、Ta-b層火山灰に被覆されており、その降灰年代1667(寛文7)年(石川俊夫他1972)をさほど離らないとみられる。またA郭内には、チャシに先行する建物跡(IIIH-13)が想定されており、この段丘端部が早くから居住空間として利用されていたことがわかる。(田中 哲郎)

## 2 壕(図29)

A壕・B壕について、ここで一括して説明する。

A壕の規模は、全長30.7m・上幅2.5~3m・下底部幅0.8~1m・深さ1.4~1.6mをはかる。その断面形態は、上部が幅広くなるU字形を呈する。これに対し、B壕の規模は、全長26.5m・上幅2.5~2.8m・下底部幅0.8~1.3m・深さ1.2mほどをはかり、断面形態はA壕のそれと同様であるが、下底部の平坦面をA壕のものより、明瞭につくり出している。壕の揚げ土は、両側に置かれているが、チャシ側に多く盛られ土塁を形造っている。A郭内の土塁上には、1.5~2mの間隔で、径約20cm・深さ40~50cmの柱穴が15個検出されており、柵列のあったことが考えられる。また、A壕外側にも2個の柱穴が確認され、柵などの構築物が予想される。B郭内の土塁上での、柱穴の検出はない。

覆土の堆積状況は、A 築・B 築とも同じで、覆土の内容は、以下の 6 つに分類できる。表土 (I・I')、Ta-b 火山灰 (IIa~IIc)、Us-b 降下軽石 (IId、1663 年降下)、築揚げ土の崩落土 (3 A・3 A'・3 B・3 B')、築揚げ土崩落以前のもの (4~7) と以後のもの (1・2) に分けられる。IIc・IId 層間には、線としてしか表わせない黒色の腐植土がみられ、また、IId 層は A 築では確認できなかった部分がある。

土層観察から以下のことが考えられる。(1) A-A' 間では、A 築の揚げ土の上に B 築のそれが堆積する状況が把えられ、A 築の掘削が若干 B 築の掘削より先行することが判明した。また、褐色土とした層は、3 B 層との間に線としてしか表わせない黒色土があり、A 築の揚げ土が流れ込んだものとみられる。(2) 築揚げ土の崩落以前のものは、築揚げ土あまり時間をかけないで起った築壁の崩落によるものとみられ、B 築の方に顕著に認められる。築揚げ土時の形状をとどめているのは、A 築では B-B' 間、B 築では G-G' 間とみられる。(3) チャシの裏の機能が失われたのは、Ta-b 火山灰の降灰、堆積によるものである。この点から、Ta-b 火山灰の降下年代 (1667 年) を、チャシ廃絶年代の下限と考えたい。

最後に、築揚げ土下の所々に、苦小牧火山灰とみられる灰白色火山灰があること、また基本層序で IVa 層としたものの中で、Ta-c 火山灰起源とみられる黄灰褐色土の層 (IVa-2) が認められたことから、IVa 層を IVa-1.2 に分層したことを付記しておく。

(田中 哲郎・寺崎 康史)

### 3 A郭

#### i) 建物跡 (図 31、図版 20・21)

Ta-b 火山灰除去後、A 郭内には、盛土部分の黄褐色土の高まりと、北西側の赤味の強い茶褐色土の高まりとがみとめられた。この高まりに囲まれた内部の黒色土を薄く剥いだ時点で、建物跡が確認された。

この建物跡は、長軸 7.8 m・短軸 5.6 m で、面積が 43.7 m<sup>2</sup> の主要部と、その西側の長軸 3.6 m・短軸 2.2 m・面積 7.9 m<sup>2</sup> の張り出し部から成る。

建物跡では、柱穴が合計 49 個検出されている。これらのうち、チャシの建物跡に伴う柱穴は、図 31 で赤色で示したものと考えている。長軸には、基本的に 4 個の柱穴 P-1・4・6・10、P-36・17・18・19 が、2~2.5 m ほどの間隔で並び、それぞれ対応する位置関係にある。また、長軸中央には、P-5、P-35 があり、対応している。短軸には、P-1・7・11・36、P-10・43・14・19 が並ぶ。この計 14 個の柱穴で主要部を構成している。また、P-7・11 横の P-37・25 では、柱材の一部である円柱状の炭化物 (C-21・22) が検出されている。この 2 個の柱穴は、内側に若干傾くもので、P-7・11 と組合わさって使われたものと考えられる。張り出し部を構成する柱穴は、P-19・18 から 2.1 m 離れて置かれた P-20・21 である。また、P-22・26・27 で入口部分を構成している。これらの柱穴は、59 年度調査時に地表面の窪みなどによって、早期に発見されたものであり、覆土上部の黒色土のたまりも少なく、しまりのないものである。配列等も考慮し、この建築物に伴うものと判断した。深さは、40~50 cm のものが多い。これらの他には、III H-13 としたチャシ以前の建物跡を構成する柱穴などがあり (スクリーントーンで表示)、さらに、時代や性格が全く不明な柱穴もみられた。

建物跡をコの字形にめぐる盛土は、壁の基部をなすものである。この盛土は、下層の茶褐色土と上層の黄褐色土からなり、土壘の 3 A'・3 A 層にそれぞれ相当するもので、築の掘削と建物建築が同時に行われたと考えられる。この盛土上面には、土止めのために多くの礎が置かれている。この中のコーナー部から土壘方向に延びる礎群は、土壘下にも礎の広がりをもつもので、これも築と建物が一連の作業の中で造られた証拠となろう。礎の総数は 2,399 個で、その石質・重量については、図 30 に示し



図27 ポロモイチャシ跡地形図

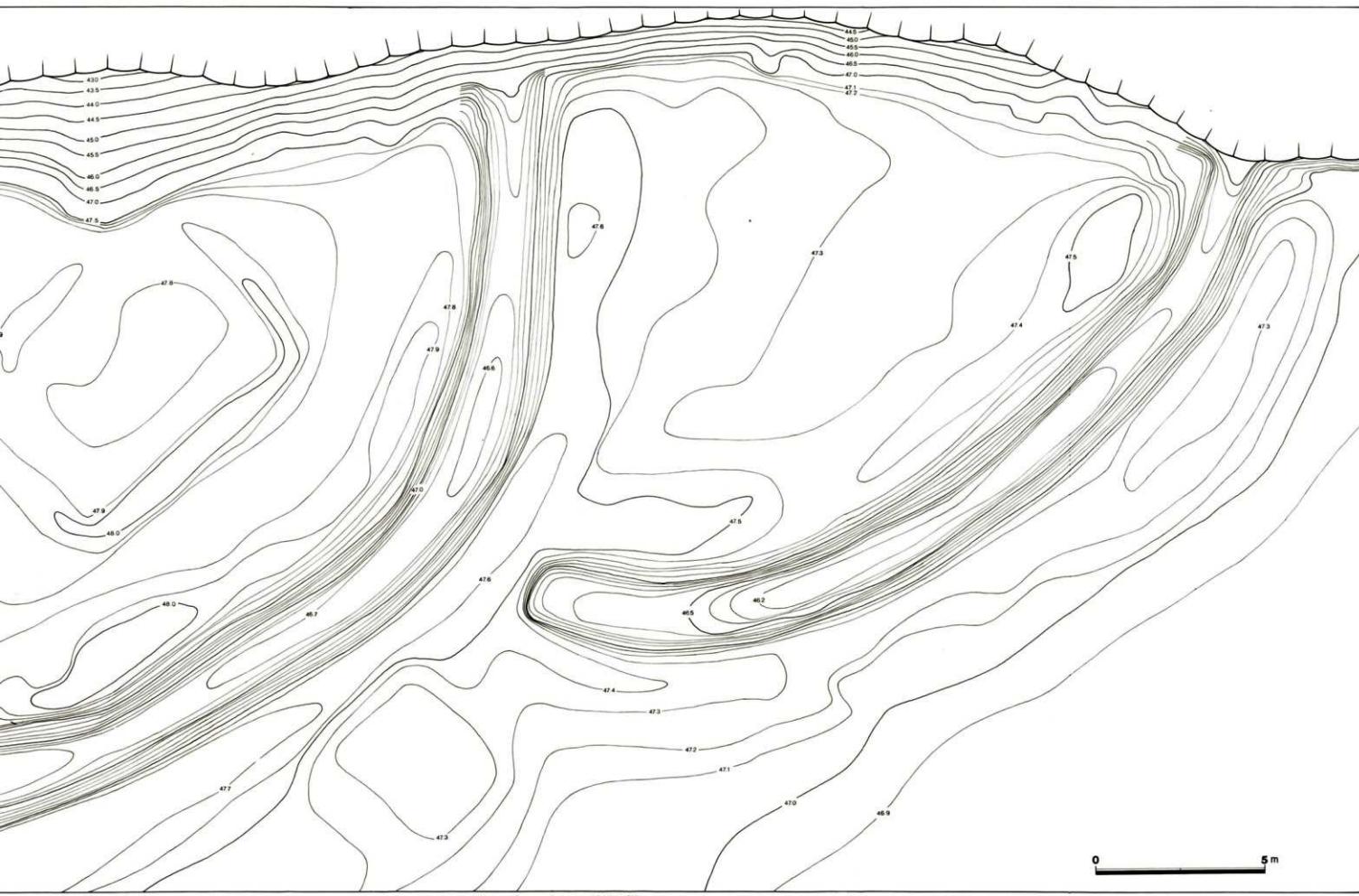
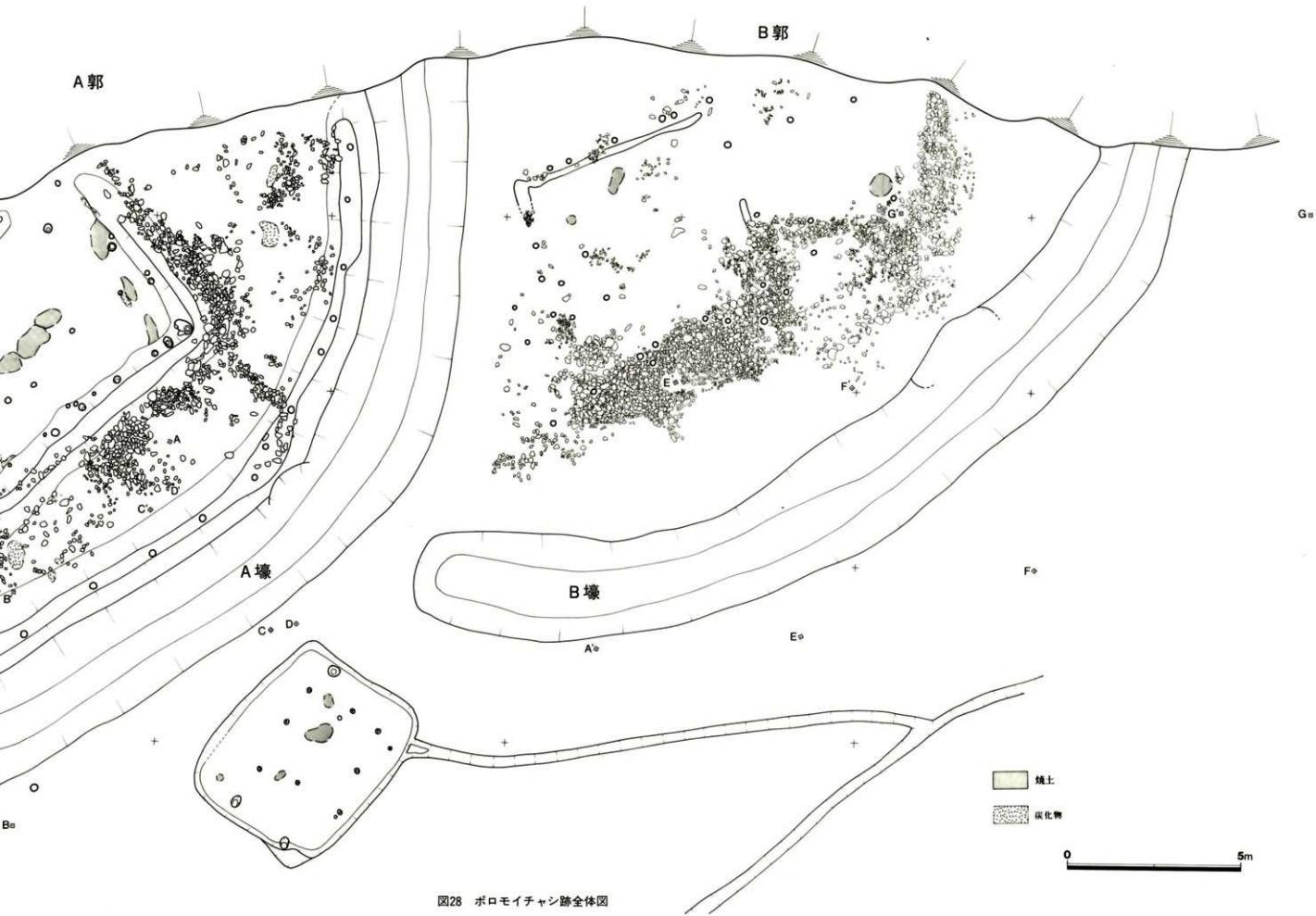


図27 ポロモイチャシ跡地形図



図28 ポロモイチャシ跡全体図



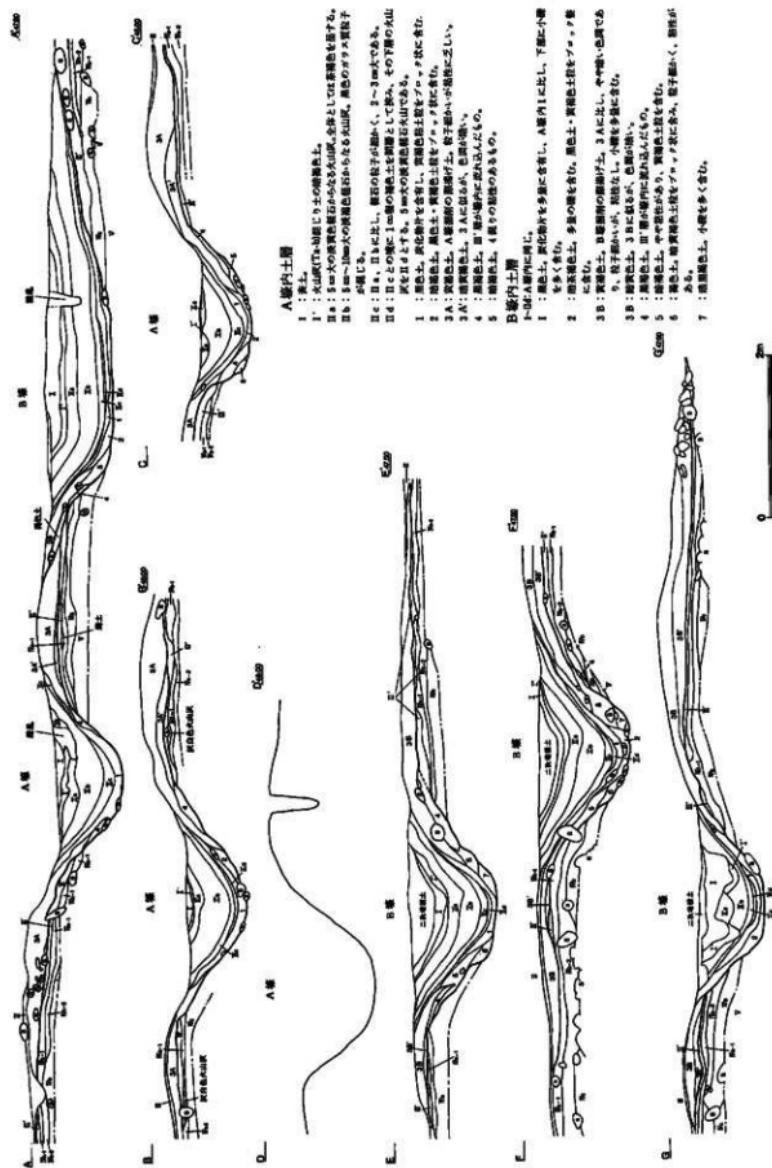


图28 带口舌的毛茛科植物

ている。重量構成をみると、2 kg 以上のものが 23% を占め、B 郡の 7% に対し、その比率が高い。

建物跡の内側に流れ込んだ盛土下には、焼土が連続して広がっている。この焼土は、建物跡の主要部をちょうどめぐっており、建物が焼失したことが推定される。また、盛土と焼土の間に、建物の内側に傾く炭化材が検出された(図 32)。この炭化材は、盛土と共に壁の基部をなすものである。炭化材の寸法は、土壌より剥れ落ちるものが多く、その全体像を知ることはできないが、幅が c-15 で 19 cm をはかり、厚さは 1.5~2.0 cm の間のものが多い。これらは、すべて板目割による板材で、材の下端を斜めに面取りし尖らせている。炭化材の樹種は、ヤチダモ・ヤチハンノキなどで、特に前者が多い。

盛土の下には、建物跡をめぐる深さ 10~40 cm ほどの溝が検出された。図 31 に示すとおり、4 本の溝からなる。この溝は、繩張りの性格を有するものと考えられる。4 本のうち、溝 1・3 をそれぞれ延長すれば、一辺 7.8 m ほどの正方形でつくられることになる。これが途中で終結するのは、地形に制限された結果と考えられ、チャシ構築時と現在とでは、大きな地形の変化はないものと思われる。また、溝 3 は、主要部から張り出し部へ連続するものであり、張り出し部が当初から意識されつくられていたことが窺える。

建物跡は、主要部のほぼ中央に炉をもつ。当初、約 0.6×1 m の範囲に灰層の広がりがみられたが、灰層・焼土の堆積状況からみて、F-1・2 と分けたものがそれである。共に掘り込みをもつものである。灰層・焼土の堆積状況は、上部に白色から淡い黄褐色の灰がたまり、下部に紅色の焼土があるという、チャシ跡以外にみられる炉と同様である。F-1・2 からは、表 5 にみられるとおり、サケ科・キュウリウオ科の魚骨と、シカの焼骨片が多く検出されている。また、F-1 からは、鹿角製鉢先などの遺物も出土している。この他にも獸骨片が検出された焼土 F-3 があるが、これは、チャシに先行する III H-13 に伴うものと考えたい。

建物跡内の遺物出土状況を述べるにあたって、便宜的に炉跡を通る短軸との平行線で主要部を分割し、北東側を a 区、南西側を b 区とし、張り出し部を c 区として説明する(図 33)。a 区では、北隅に鎌(11)と刀(6)が出土している。鎌は、P-16 の真上に位置していた。南隅の壁際からは、ノミ(13)がタマカラ(14)を茎につけて出土している。また、流れ込んだ盛土下から、苧引金(16)も出土している。b 区では、a 区にみられなかった鎌石が 6 カ所のブロックとして出土している。刀・刀子が 3 点出土しており、その中の刀子(9)が、流れ込んだ盛土下より出土している。また、鎌の鍔金具とみられる銅製品(25)は、盛土上からの出土である。漆器片も b 区からの出土である。c 区からは、

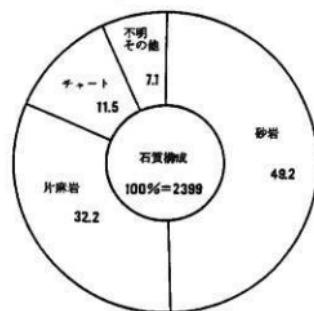


図30 ポロモイチャシ跡 A 郡内壁の石質構成グラフ・重量表

重量 (kg)	個数
~ 0.5	960
0.6 ~ 1.0	575
1.1 ~ 1.5	310
1.6 ~ 2.0	241
2.1 ~ 3.0	133
3.1 ~ 4.0	71
4.1 ~ 5.0	43
5.1 ~ 6.0	20
6.1 ~ 7.0	11
7.1 ~ 8.0	10
8.1 ~ 9.0	4
9.1 ~ 10.0	3
10.1 ~	18

( 計数 2,399)

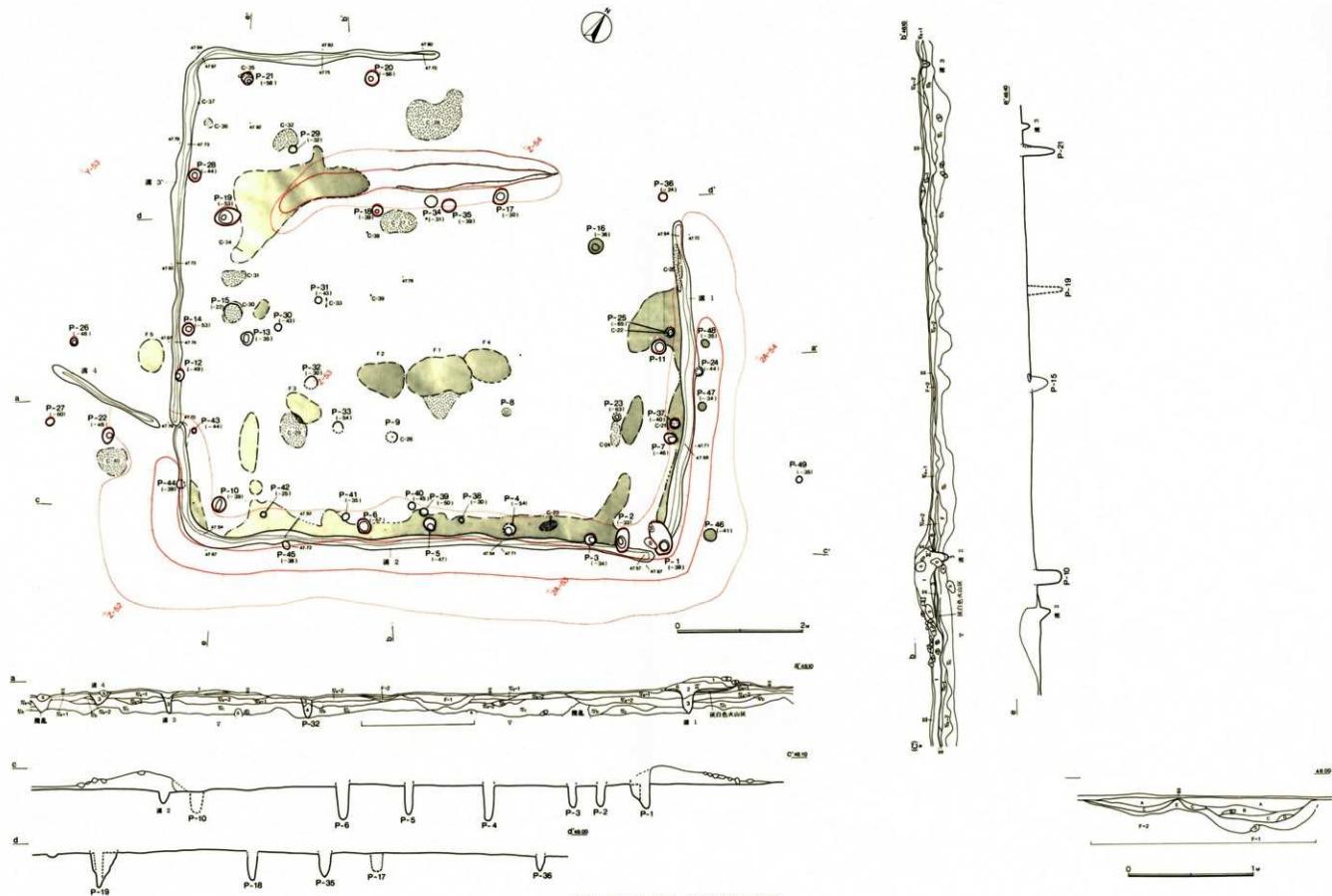


図31 ボロモイチャシ跡A郭全体図

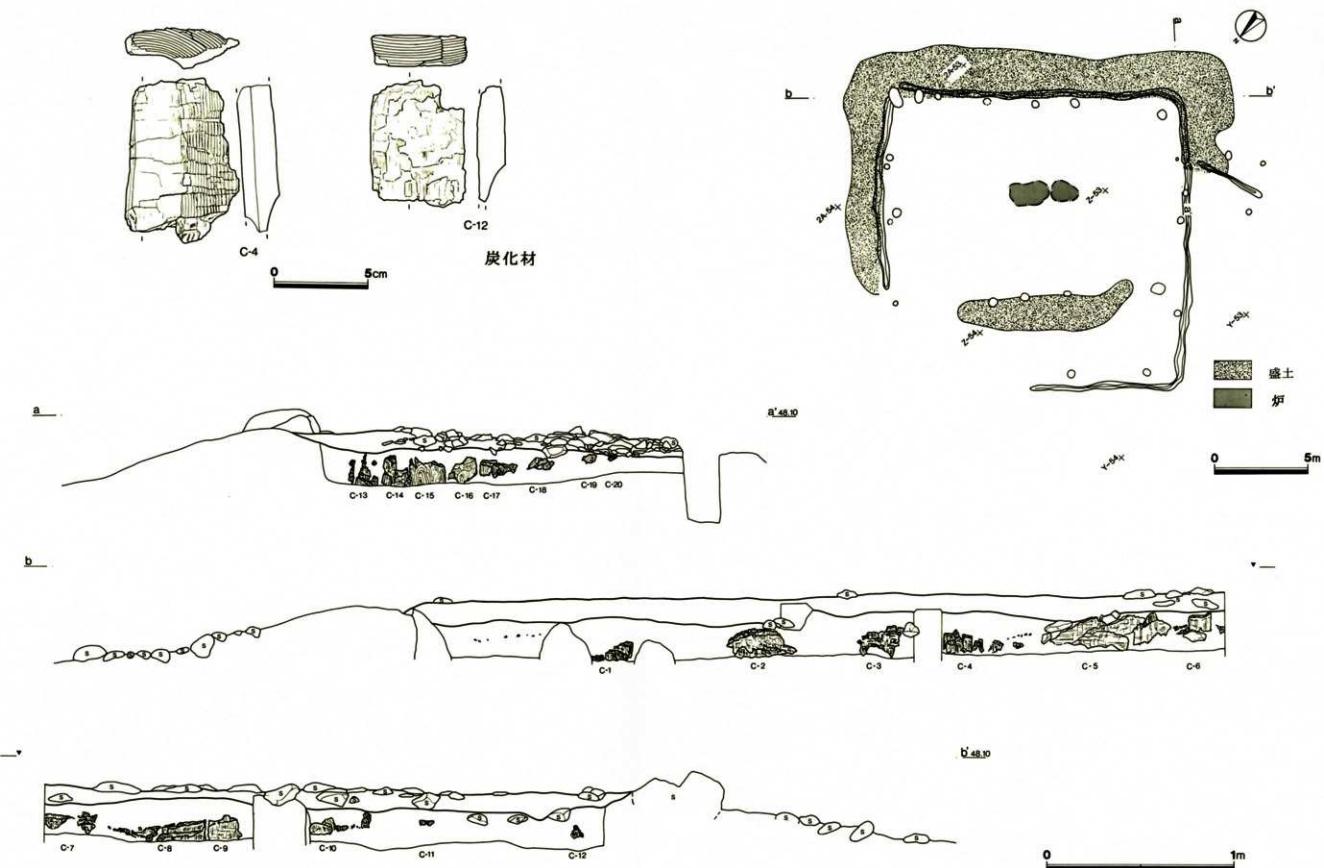
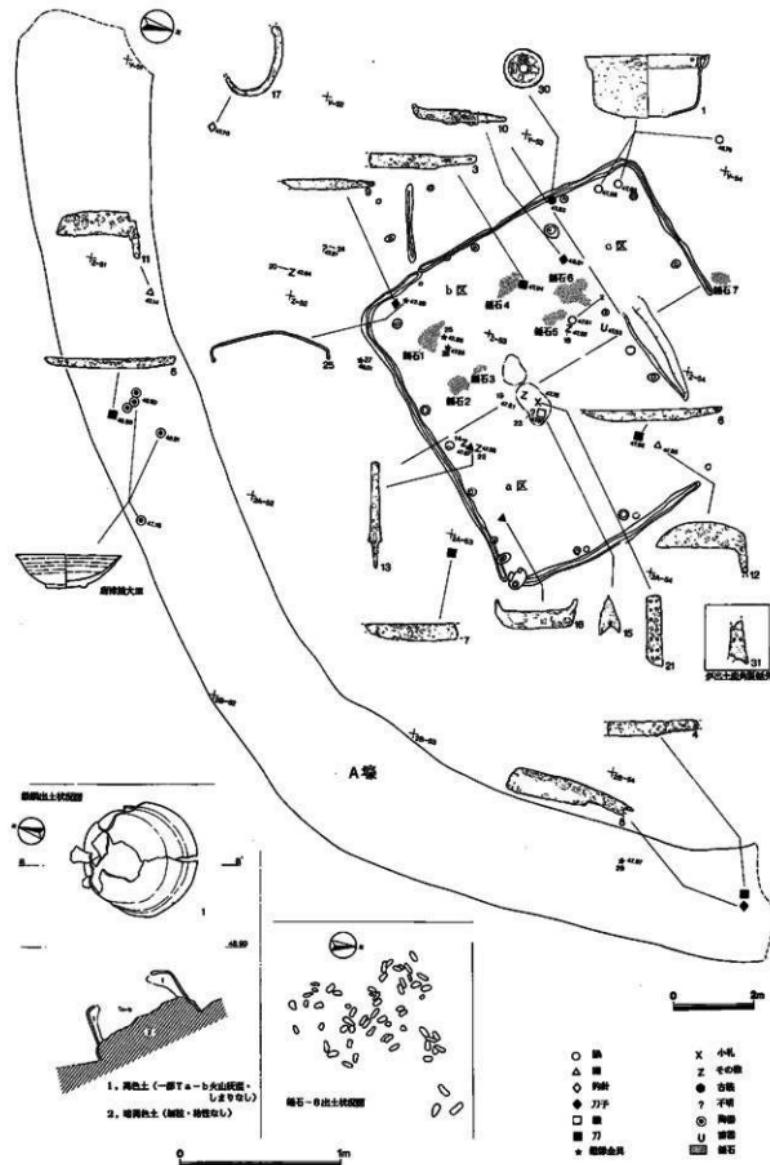


図32 ポロモイチャシ跡A 郷炭化材出土状況図



チャシ跡突端部で出土している鉄鍋（1）の破片（底部・内耳の付く口縁部）が出土している。また、元祐通宝（13）1枚がある。これらの多くは、黒色土上面および多少黒色土にもぐり込むかたちで出土している。炉跡内からは、鐵鎌（15）や小札（21）などが出土している。鹿角製鉈先（31）は、灰中の獸骨片選別中の検出である。建物跡内では、b区に遺物の集中がみられ、特に鍾石が集中している。

建物跡周辺では、c区の溝脇から鍾石ブロックが出土し、A郭南端から釣針（17）が出土している。壕内では、切先を上に向かって刀（5）や、鉈（8）、鎌（11）といった道具類と共に、絵唐津が出土している。これらは、すべて火山灰下のものである。

（田中 哲郎）

## ii) 遺物 (図34~37、表4~5、図版25~27)

絵唐津大皿(図34)：ボロモイチャシ跡から出土した陶器は、B郭を含めて、絵唐津大皿の1点のみである。寸法は、口径10.6cm・高さ9.0cmである。胎土は、淡い橙色を呈する。釉は、器内全面および器外の中程まで施されているが、一部は高台付近までかかっている。器内には、笹の葉のような文様が、3カ所鉄釉で描かれている。釉の発色は、赤褐色から灰色となっている。器種は大皿で、口唇形が丸く、口縁がゆるやかに外反している。なお、口縁の一部にゆがみがみられる。高台は、削りによるもので、高台内は浅い。

疊付の幅は、1~1.4cmである。また、見込みに胎土目跡が3個所残っている。16世紀末から17世紀初頭とみられるものである。

（田中 哲郎）

漆器片：漆器も1点のみの出土である。出土した漆器片は、2.5cm×2.5cmほどの朱漆の膜片である。裏面には、木地の痕跡が認められる。これには、直徑3mmの孔2個と直徑2mmの孔1個があいている。器形その他は不明である。

（田中 哲郎）

金属製品：数・器種とも豊富である。1は、口径35.2cmの内耳鉄鍋である。チャシ突端部から、底を抜き伏せられた状態で出土している。片耳のついた口縁部と底部は、建物内のチャシ突端側壁際からの出土である。完形に復元できるが、鉄等の変化のため、底部はゆがんでおり、接合はあえてしなかった。口縁部が大きく外に張り出し、内耳は対象位置に2耳縫につく。耳は断面円形で、肩に張りをもっており、口唇と口縁一胴部の移行点にわたって位置する。底部中央が、ほぼ円形に抜かれた形になっており、その中心には一字湯口がみられる。計算上の容量は4升焚きである。形状の類似や、容量の比較から、壕外にあった

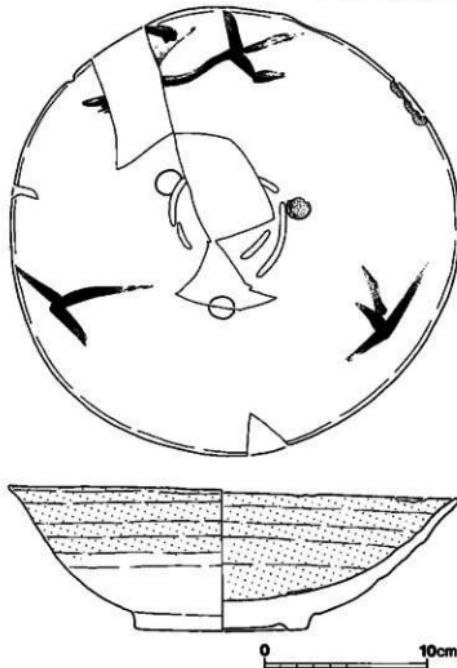


図34 絵唐津大皿

浅皿状堅穴のIII H-12 から出土した内耳鉄鍋（容量 2 升焚き）とセットで、この地域に入ってきたものと考えている。一文字湯口内耳鉄鍋は、15~17 世紀前半という時期が与えられる。伝世することを考慮すれば、1667 年降下の Ta-b 火山灰がかかるチャシとその建物跡で、この鉄鍋が使用されていたと考えることは、問題のないところである。2 は別個体の鉄鍋の破片である。3~7 は刀で、3, 4 はともに刃部中央から先を失ったもので、その後も生活利器（例えばマキリやナタ）として利用されていたものであろう。3 は建物跡内、4 はナタとともに壘底から出土している。3 は平棟平造りで、ゆるい両区をもち、茎には 2 つの目釘孔がある。4 も平棟平造りで、ゆるい刃区をもち、茎には目釘孔が 2 孔（1 孔半欠）ある。5 は、壘壁に縦に落ち込んだ状態で出土した小刀。切先端は丸まっているが、いわゆる鉢両刃造りで、刀身中央部の棟の形成されるあたりから、両刃の鑄に連続するように両面に幅広（7 mm）の穂が通っている。区は浅いが両区で、茎には目釘孔が 1 孔あいている。6 は、丸棟？ 平造りの小刀で、刀身中央より前半に、浅く細い穂がみられる。浅くゆるい両区をもち、茎には 2 孔の目釘孔を有する。5, 6 とも反りはほとんどない。7 は、刀の切先部分の破片で、丸棟？ 平造り、折損後も使用していたものであろう。8 は、4 と伴出したナタである。いわゆる「腰鉈」と称されるもので、棟には敵いて使用したらしくいつぶれが見られる。茎尻は破損しているが、そこに 1 孔の目釘孔がある。9 は、かます切先をもつ刀子で、浅い両区をもつ。茎には柄の木質が残存する。10 も刀子であるが、刀身中央から大きく曲げられており、木器の内側を丸く削るために、レウケマキリと呼ばれるものであろう。11~12 は鎌で、11 は鎌からの出土品である。ともに直刃の身の薄い鎌で、地金と刃金の区別がない。刃と柄は約 100° の角度をなし、柄への移行部の外刃は、11 が段をもっており、12 はやや肩を張る形状を呈す。12 の柄尻破損部には半欠の目釘孔がみられる。近世には、この形の鎌が出現するようで、二風谷遺跡でも III H-1 や 2 E-50 区から出土しており、千歳市末広遺跡の墓の副葬品や、瀬棚町瀬田内チャシ跡、斜里町オソネベツ西岸台地遺跡物送り場、浦幌町十勝太若月遺跡等でも検出されている。13 は、ノミである。身幅・厚ともほぼ一定だが、裾に広がりをもち、刃は両面から厚みを減じて両刃を形成する。幅 1.8 cm の刃は、ほぼ直線状を呈す。形態から、ほぞ穴をあけるものではなく木材を割る道具としての機能を有すと思われる。柄には木質が残存するが、この柄木をおさえる口金（タマクラ）が 14 である。ノミは瀬田内チャシからも 3 点出土しているが、すべて平ノミで、両刃をもつものは、本道では初見である。15 は炉から出土した。無茎の狭鋸腹抜長三角形式の鉄鎌である。腹抜

表 4 ポロモイチャシ跡 A 部出土遺物一覧

No.	名 称	材 質	寸法 cm ( ) 内深井測	備 考	No.	名 称	材 質	寸法 cm ( ) 内深井測	備 考
34	堅盤帶大瓦	陶	高 27.5 幅 9.8	舷石 B	36	1 小 手 球	陶	高 5.0 径 3.0	伊出土
35	1 鋸	鐵	高 31.2 口徑 35.2	内耳一文字湯口	22 四枚鉄錠	鐵	高 2.8		タマクラ
2 鋸	鐵			23 不 刃 鋸	鐵	高(2.4)		伊出土	
3 刀	鐵	長(24.6)幅 3.4	背半欠	24 不 刃 鋸	鐵	高(1.3)			
4 刀	鐵	長(18.2)幅 3.6	背半欠・茎尻欠・側出土	25 備 金 鋸	鐵	高 28.0			
5 刀	鐵	長 37.7 幅 3.0	茎有子・頭出土	26 備 金 鋸・金 鋸	鐵	高 7.3	先?		
6 刀	鐵	長 40.9 幅 3.0	先刃欠	27 金 鋸	鐵	高(6.5)	先?		
7 刀	鐵	長(33.1)幅 2.5	先刃欠	28 金 鋸	鐵	高(5.5)	先?		
8 ナ タ	鐵	長 25.2 刃幅 3.0	茎有子・茎尻欠・側出土	29 金 鋸	鐵	高(8.1)	先?	伊出土	
36 9 刀 子	鐵	長 19.0 幅 2.1		30 古 鋸	鐵	高 2.4	[文豪鑑定]		
10 刀 子	鐵	長 15.7 幅 2.6	先曲・レウケマキリ?	31 鋸 先 角	鐵	高(2.2)	伊出土		
11 鎌	鐵	刃幅 34.9 高 9.8	直刃・頭出土	- ダラス刀片				上島井番出土	
12 鎌	鐵	刃幅 38.4 高 11.8	直刃	- 鎌 刃	鐵	画面に炭化木塊の痕跡あり、φ30mm の穴? φ20mm の穴?			
13 / 4	鉗	長 24.1 幅 1.6		No.	名 称	種 数	平均 長 cm	平均 厚 cm	平均 重 g
14 タマクラ	鐵	径 2.7	13 に付属	33 1 鋸 石	26	7.5	4.0	2.2	96.0
15 鎌	鐵	高 2.6 幅 1.5	無茎 鉄 B	2 鋸 石	23	5.3	2.7	1.6	35.1
16 矛引金	鐵	高 8.3 幅 1.7	打加工?	3 鋸 石	9	7.2	3.5	2.1	76.1
17 劍 鋒	鐵	高 5.4	打加工?	4 鋸 石	11	5.7	2.7	1.5	35.3
18 鋒	鐵	刃(2.0)	頭有子・先端欠	5 鋸 石	28	5.9	2.8	1.6	61.8
19 鋒	鐵	高(1.8)	頭有子・先端欠	6 鋸 石	45	6.3	2.9	1.7	69.0
20 槌状錠	鐵	高(6.5)	先鋒?	7 鋸 石	15	6.6	2.6	1.8	45.8

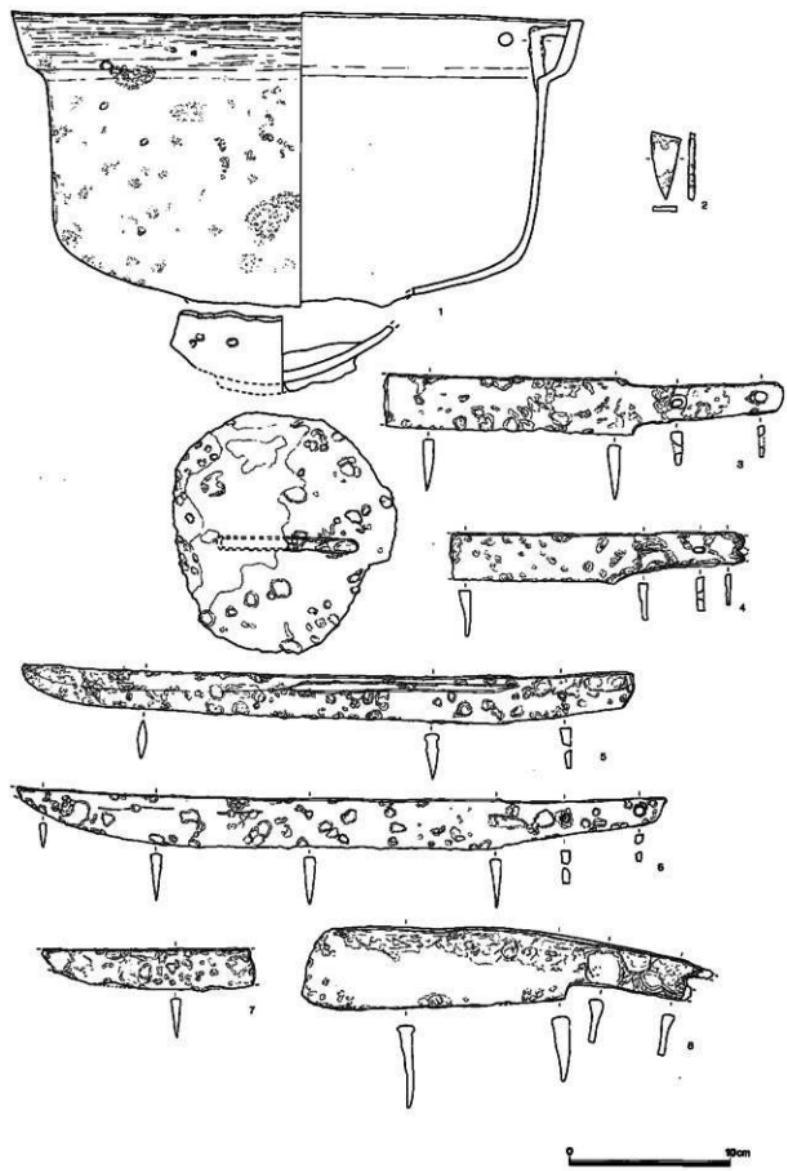


図35 A郭出土金属製品(1)

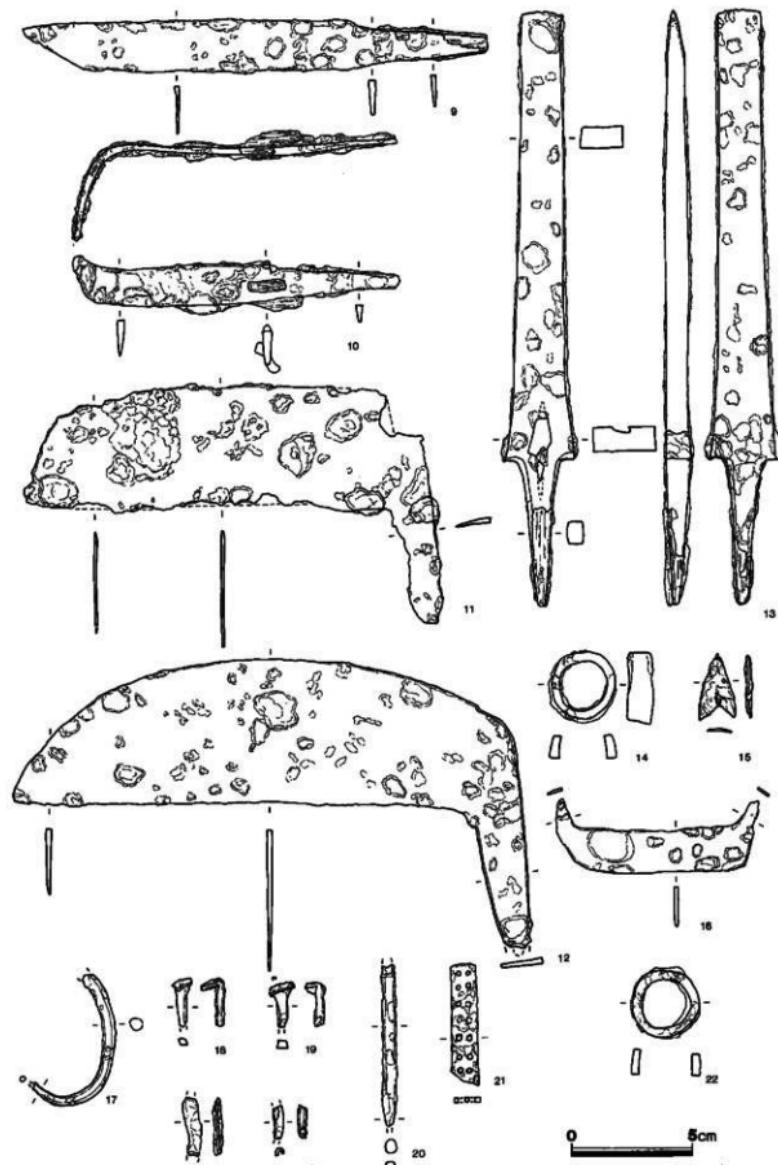


图36 A 郭出土金属製品(2)

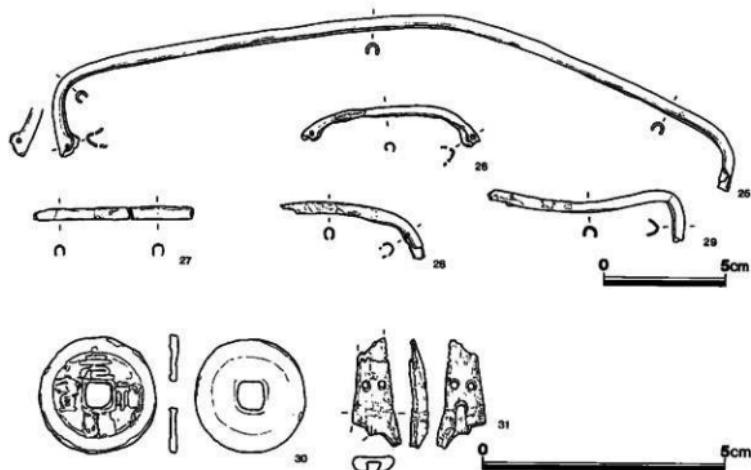


図37 A郭出土金属製品(3)・骨角器

は浅く、その交点上方に小孔があり、骨片が付着している。おそらく二風谷遺跡1号墓の鉄鎌(図48-15)のごとく、骨製の中柄に装着されたものであろう。また片側縁にも小孔がある。二風谷遺跡E-251区からも同形のものが出土している。16は、苧引金・苧引錠と呼ばれるもので、両端の角部を木柄に固定し、麻等の繊維をとるための道具である。本道での出土例を未だ知らないが、青森県八戸市根城跡や浪岡町浪岡城跡から多数出土している。現在でも使用している所もあるらしい。17は丸釘を利用したと思われる釣針で、鎌はない。18・19は頭巻き釘の頭部。20は丸釘と思われる棒状鉄器。21は炉から出土した、2列14孔の狭長な小札。片端が斜辺となるこの形のものは、二風谷遺跡IIIH-4や、W-43区から出土している。小札としての意味はもたず、孔のある鉄片として何らかの利用法があるのだろう。22は14と同様、ノミや鎌等の口金であろう。23・24は不明鉄器。炉から出土した23と同形のものが、二風谷遺跡IIIH-3の炉からも出土していることは興味深い。25~29は銅製(26に鍍金あり)の鎧・兜の縁金である。断面はU字形で25・26・28には固定のための小孔が端部にある。本来は、肩庇・冠板・鳩尾板等の縁金だが、他のものの装飾物となっていた可能性が高い。30は銅鏡で、小篆体で元祐通宝と鋤出されている。元祐通宝は北宋哲宗の1093年初鋤の銅鏡である。金属製品についてはVII章で詳しく触れた。

(三浦 正人)

骨角器：31は鹿角製の開嵩式鉗先で、建物跡の炉灰層から出土している。二風谷遺跡III F-6からも鹿角製開嵩式鉗先が出土しており、この二者についてはVII章で詳しく述べる。

ガラス玉：盛土の南東外縁からガラス製のビーズ玉片が出土している。孔は確認できない。黄色がかかった透明のもの8片他、鮮やかな群青色のものが1片ある。VII章参照。

(三浦 正人)

鍾石：鍾石は、7つの集中箇所(ブロック)が検出され、そのうち6つのブロックが建物跡内南西部に分布し、1つは建物跡外の壁際より検出された。ブロック6・7はほぼ直線上に並ぶように出土し、ブロック2・7は40×40cmの範囲内に積み重なるような状態で出土した。

各ブロックを構成する礫は、いずれも最大長4~9cm、最大幅2~5cmの範囲内にあり、重量は20~80gのものが多い。形は長楕円形を呈し、断面隅丸長方形もしくは卵形である。剝離痕・敲打痕など人為的加工をもつものはない。石質は、砂岩、泥岩、片麻岩で過半を占める。その形態、出土状況からして、編み物用の鍾石と考えられる。

(寺崎 康史)

表5 A郭出土動物遺存体一覧

遺物名	部位	魚類								哺乳類		備考	
		サケ・マス類		イトウ		キュウリウオ		シシャモ		コイ科 ウダイ			
		部位など	重さ	部位など	重さ	部位など	重さ	部位など	重さ	部位など	重さ		
④ F-1 A 頭	A 頭	サケ・マス類 + 鰓骨	0.16	イトウ + 鰓骨	0.1	キュウリウオ + 鰓骨	6	シシャモ + 鰓骨	8	コイ科 + 鰓骨	0.16	1.2g シカ?	
④ (直角) A 頭	A 頭		+									シカ?	
④ (直角) A 頭	A 頭	サケ・マス類 + 鰓骨	0.1									シカ?	
④ F-1 A 頭	A 頭	サケ・マス類 + 鰓骨	0.2									シカ?	
④ F-1 B 頭	B 頭	サケ・マス類 + 鰓骨	0.1									シカ?	
④ F-1 C 頭	C 頭	サケ・マス類 + 鰓骨	0.4									シカ?	
④ (直角) C 頭	C 頭												
④ (直角) C 頭	C 頭	サケ・マス類 + 鰓骨	2	+								ft.	
④ (直角) C 頭	C 頭	サケ・マス類 + 鰓骨	1	+								ft.	
④ F-1 C 頭	C 頭	サケ・マス類 + 鰓骨	0.1									ft.	
④ F-1 D 頭	D 頭												
④ F-2 A 頭	A 頭	サケ・マス類 + 鰓骨	0.1	+								ft.	
④ F-2 C 頭	C 頭	サケ・マス類 + 鰓骨	0.2	+								ft.	
F-3 文 署	文 署												
	箇中下												

動物遺存体：ボロモイチャシ跡A郭・B郭の内側にそれぞれ見出された建物の炉跡をはじめ、二風谷遺跡の各所に存在していた掘立柱建物跡の炉、戸外の炉跡や焼土の中からも、箇分けなどを経て、焼けた魚骨や歯骨片が検出されている。箇は最小0.3 mmメッシュのものまで段階的に利用し、灰や焼土を箇分けした。普通には、0.8 mmメッシュの箇により、多くの遺存体の採取が可能であった。

検出された遺存体は、大半が魚骨およびシカと思われる歯骨で、いずれも焼けており、小さく碎けたものが多い。見出された魚種には、サケ・マス類、イトウ、キュウリウオ、シシャモ、ウダイがある。これらの魚種は殆どが椎体によって同定されたもので、サケ・マス類の椎体は壊れて完全なものが殆どなく、一方、ウダイ以下、キュウリ、シシャモなどサイズの小さな椎体では、原形の保たれた例が多かった。

キュウリウオ、シシャモについては、報告者が、現生標本と遺存体を実体顕微鏡下で見比べ、それぞれの種を決定した。シシャモの椎体は、キュウリよりひとまわり小さいが、形態的には相互によく似ており、特に尾椎に近づくにつれ判別しにくくなるようだ。サケでは、上顎骨、前上顎骨の破片や歯なども確認されている。歯には、より小さなものがあり、一覽表では、その他の項目に含めたが、キュウリの歯とみなして大過ないものが多いと思われた。これらを除いた魚骨は、殆どが種や部位を判別できない、微細な破片である。これらは、破片(ft.)として括り、合計の重量を表記した。重さが0.05 gに満たない場合は、+を付して示したが、これは歯骨の記載についても同じである。

歯骨片は、その大部分が、シカのものと推定された。足根骨、歯の破片には、それと分かれる形を留めたものが僅かに見受けられたが、それらは例外的な存在であり、通常は、第III層黒色土の上面に分布していた焼骨片にくらべても、さらに小さく、殆ど部位の判定が困難な破片であった。

ボロモイチャシ跡A郭建物跡の炉からは、動物遺存体が豊富に見出され、B郭からも、サケ、キュウリ、ウダイなどが発見されている。チャシ外の建物跡からも、魚骨や歯骨が検出されており、特に、IIIH-3の炉は内容豊かで、とりわけキュウリやシシャモの量の多さが注目された。(高橋 和樹)

## 4 B郭

### i) 建物跡（図38、図版23）

前述のように、59年度調査当初においては、B郭及びB濠の存在は未知のものであった。火山灰を除去した時点で、濠及び長さ約13m、幅約2mにわたる礫列を確認し、郭内に何らかの造構の存在が予想された。59・60年度の調査により、郭内には、ほぼ正方形の建物跡があり、その東方にも四本柱の建物跡のあることが確認された。

前者の建物跡では、P-21・27・18とした、南・東・北の角柱が検出され、西の柱の存在は確認できなかった。P-18とP-8を結んだ延長線と、P-21とP-20を結んだ延長線との交点を西の角柱と推定すると、東隅で95°、北隅で88°、南隅で85°、西隅で92°となり、長軸6.20m、短軸5.90mのやや東西に長いが、ほぼ正方形に近い構造であり、面積は36.5m<sup>2</sup>である。長軸方向は磁北に対してN-65°-Eである。

またP-1・2・3によって入口部が構成されると思われる。

柱穴は、確認面での径が14~16cm、深さ40~50cm前後のものと、径が20~22cm、深さ40~46cmのものとの二があり、前者が26本中21本を占め、後者は5本と少ない。後者の中にはP-28・29と中間に段をもち、底部に向ってすばまるものがある。これは掘り方と思われる。

柱穴底面は先細りの丸い形態であり、底面が礫に当っているものも数例みられた（P-23・30）。

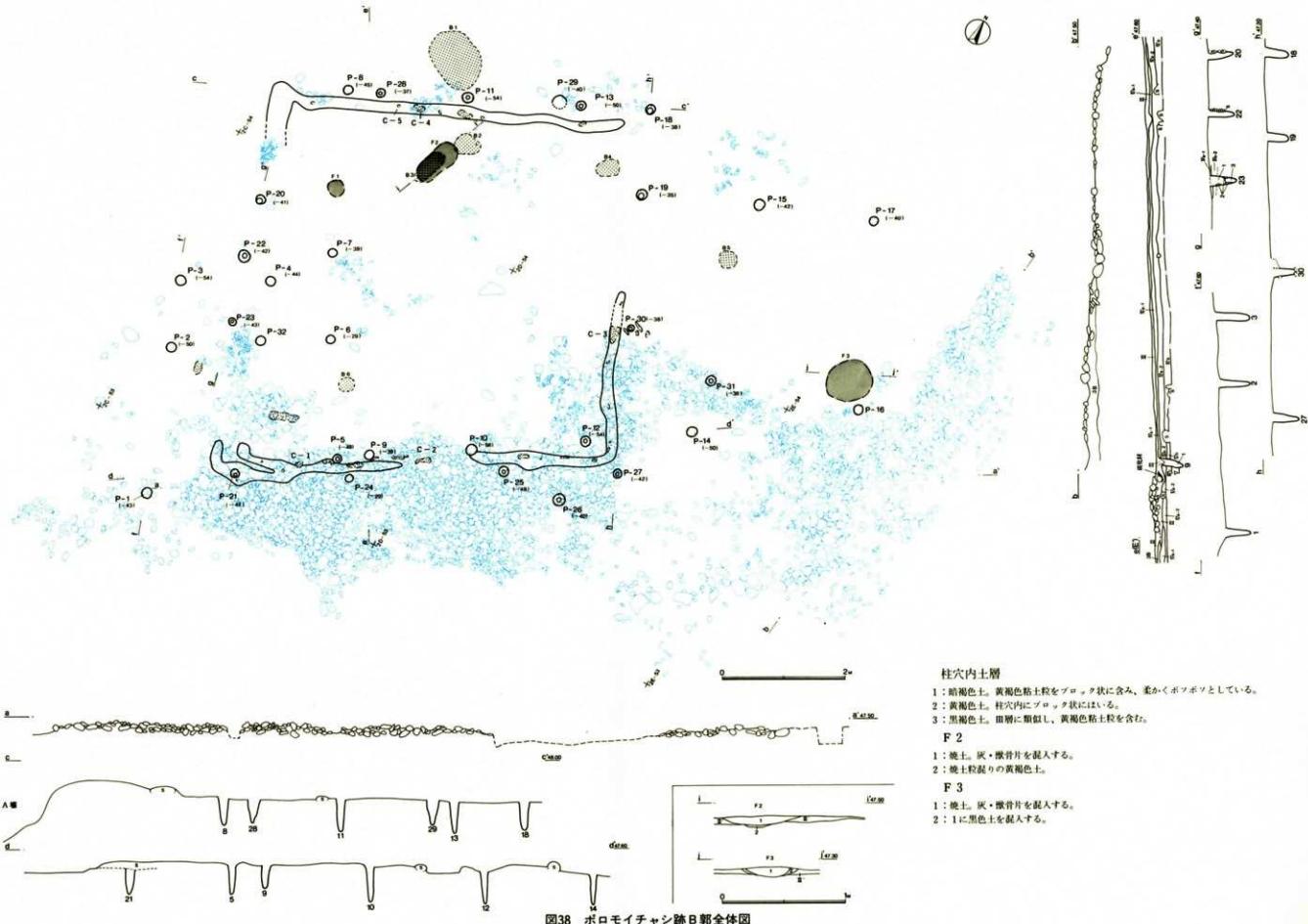
柱穴の覆土は、いずれも柔らかい暗褐色土が充填しており、柱根は確認されていない。また火山灰が覆土に含まれる例はなかった。柱穴はIVa-1層上面で確認されたものが多いが、黒色土であるIII層を削っている段階で検出された例もあり、III層の中部に掘り込み面が求められよう。P-21・24・25・27の南側の柱穴列は、礫列を除去した段階で確認されたものである。

柱穴の間隔は、0.45~0.5m、0.95~1.15m、1.4~1.7m、1.85~1.95m、2.4~2.5mがあり、0.45~0.5mを単位とすれば、いずれもその倍数であることから、50cm前後を尺度として用いたとも考えられる。

59年度の調査において、北側柱穴列に沿って炭化材が検出された。60年度調査では、炭化材を除いた後も、炭化物を含む黒褐色腐植土（III層に類似）が約20cmの幅で、P-18付近から柱穴列内側に沿って5.80m西へ延びているのが観察された。この黒褐色土は建物跡西隅を直角に曲がり、南へ続いているものと予想されるが、すでにIVa-2層まで掘り下げており確認はできなかった。黒褐色土を断面で観察すると深さ6cm程度であり、緩やかなU字状を呈す。A郭で検出されたような明確な掘り込みによる溝ではなく、浅い窪みといえるものである。南側・東側柱穴列内側においても、礫列の礫を除去した後、炭化材、黒褐色土の溝状の窪みが検出された。溝状の窪みは、南側柱穴列中央部で途切れたり、一方はP-10から東の角柱（P-27）を直角に曲がり、北へ2.80m延びて途切れている。もう一方は南の角柱（P-21）付近で二股に分かれて屈曲してこちらも途切れている。

図39の土層断面図にみられるように、溝状の窪みは深さ12cmを計り、板状の炭化材が礫に押し潰された状態で検出されている部分もある。南側の溝状の窪みには、何か所か、このような状態で炭化材が出土しており、これらの炭化材は、壁材として用いられていた可能性が強く、溝状の窪みは壁材をはめこむ際にできたものであると考えられる。南側の溝状の窪みのさらに内側にあるP-5・9・10・12の柱穴列も壁材の補強と考えられる。

上記の建物跡の北東部に四本柱の建物跡がある。P-15・17・16・31を柱穴とする長軸3m、短軸2.1mの台形を呈し、面積は6.5m<sup>2</sup>である。長軸方向は磁北に対してN-17°-Wである。柱穴は、径



14~19 cm、深さ 40~50 cm である。この建物跡は、西方の建物跡と棟続きのものとも考えられるが、炭化材・溝状の窪みがみられない点から別棟の付属施設としたい。西方の建物跡は、入口に前室をもつ点等、アイヌの家屋であるチセ(chise)に類似する。その付属施設として足高倉(ブ<sup>pu</sup>)があり、それらは四本柱であることから、この建物跡もブと考えることもできようか。

二軒の建物跡南側には、これらを取り囲むように礫列が巡っている。B郭内部及びB壕内には、火山灰を除去した段階で多数の礫が露出していたが、この礫列は明らかに人為的に積み上げたものであることが理解された。礫列を構成している礫总数は、4,261 個であり、石質構成及び重量構成を図38に示した。A郭内の盛土とともに置かれた礫と比べると、石質構成はほぼ同じであるが、重量構成において、500 g 以内のものがA郭においては40%、B郭では60%を占めており、B郭の方が全体として小さめである。調査時点では、礫は2段から3段に積み上げられていることを観察できたが、建物跡南側の柱穴列・炭化材・溝状の窪みを礫が覆っていた箇所があり、若干は崩れているものと思われる。

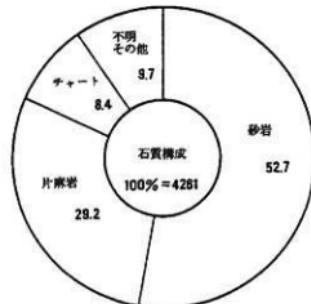
これらの礫は川原から郭内へ搬入されたとするよりは、豪掘削の際に段丘礫層から持ち運んだものと考えた方が妥当であろう。礫の中には、赤化・煤の付着が観察されたものもあるが、全体の割合からすると非常に少ない。

B郭内においては、III層上面で3か所の焼土(F 1~3)と6か所の骨片集中箇所(B 1~6)を検出した。これらと建物跡との関連を示す証左は得られていない。3か所の焼土のうち、F 2・3は厚さ8 cmで、焼土に灰・焼骨片が混入していた。B郭内西側の建物跡においては、A郭内建物跡のような建物中央部の炉は確認されなかった。

B 1~6 動物遺存体については、表7に示した。

B郭内の遺物は、その多くを火山灰直下の黒色土(III層)上面で確認した。その分布状況をみると、西方の建物跡中央部からは針金状鉄器、鍾石のブロック2が出土しているのみで、建物跡側壁の付近で比較的多くの遺物が出土している。

B壕内からは、2点の鉄製品が出土しており、いずれも火山灰直下の壕内1層(III層)に對比される  
(寺崎 康史)  
出土のものである。



重量 (kg)	個数
～ 0.5	2,572
0.6 ～ 1.0	780
1.1 ～ 1.5	334
1.6 ～ 2.0	310
2.1 ～ 3.0	146
3.1 ～ 4.0	56
4.1 ～ 5.0	26
5.1 ～ 6.0	6
6.1 ～ 7.0	10
7.1 ～ 8.0	9
8.1 ～ 9.0	3
9.1 ～ 10.0	3
10.1 ～	6
( 累計 ) 4,261	

図39 ポロモイチャシ跡 B郭内礫の石質構成グラフ・重量表

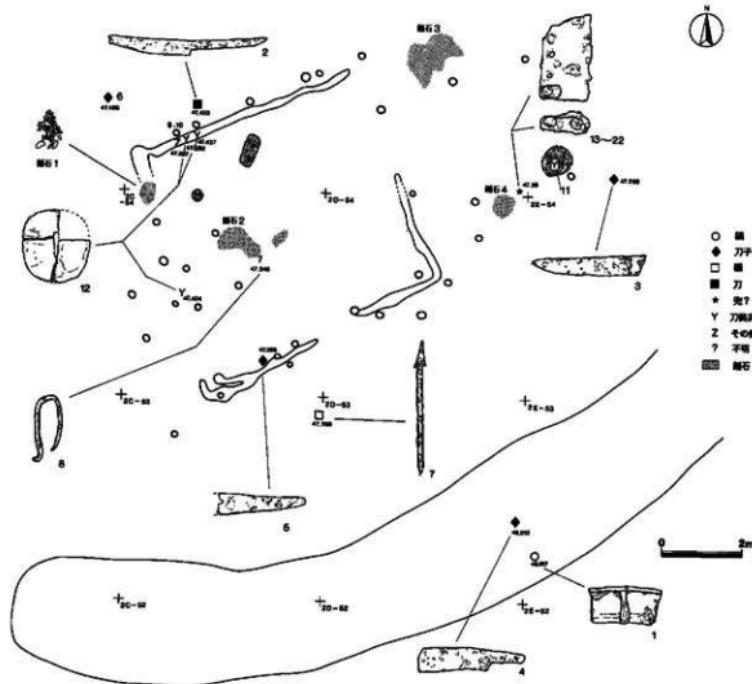


図40 ポロモイチャシ跡B郭遺物位置図

## ii) 遺物 (図40・41、表6、図版27・28)

B郭建物跡の内外や砾列中、壕内から、鉄製品9個体、銅製品2個体、鉛の小塊4片が出土している。また建物のある面からは、錘石が4群検出されている。

金属製品：1は壕から出土した、小型の内耳鉄鍋の、耳のついた口縁部片である。耳は肩の張らない丸味のあるもの。平面が長方形で、耳が中央に位置する破片であることから、鍋の破損後、この部分を利用するため、手を加えたことも考えられる。2は、再利用刀である。元来は平棟平造りの、刃区のある太刀であったろう。それが刃部中央から折損したため、茎尻を尖がらせて刃部をつくり出し、付近の棟側に片刃をつけた。さらに区付近を加工（鍔等の刀装具をはずすため？この作業が最初か？）し、刃部であった折損部の刃・棟を、片面に折り返すようにつぶして、茎を作出している。この端部には半欠の目釘孔状のものがある。加工時点での破損であろうか。鉄製品の破損後、それを再利用するのは、鉄を大事にしていた証しであり、よく見されることであるが、武器としての刀を、生活用利器に転化させた点など、再利用の好例といえるだろう。3は刀の切先部分の破片で、生活利器に再利用されたものであろう。4は、壕底から出土したナタ。いわゆる「腹鉈」と呼ばれる形態である。刃部には使い減りがみられ、棟には蔽いて使用した時のつぶれが見られる。茎には目釘1孔がある。木材の

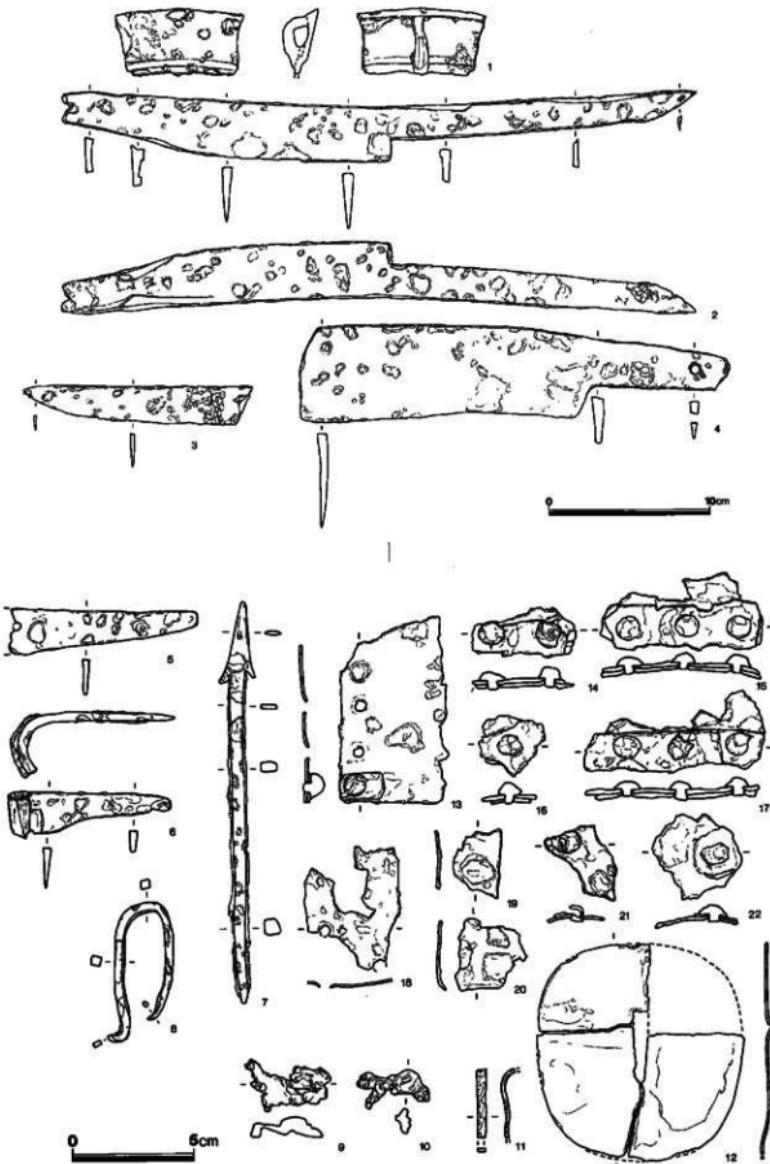


图41 B郭出土金属制品

伐り出しや加工に、用いられたものである。5・6は刀子片である。5は基部片で目釘孔1孔が半欠で残っている。6はゆるい刃区をもち、そのあたりから急にU字形に曲がる刃部をもつ。銹・土塗の変化ではなく、人為的に曲げられたものであろう。これも再利用品の可能性がある。7は穢列中から出土した、有茎の狭鋒両丸造腹抉三角形式の鉄鎌である。基部は長く、端に向かうに従って厚みを増し、端付近で断面が正方形に近くなる。最厚部から下を茎、鋒からここまでを籠被ぎとしてもよいかもしれない。鋒部は枯れた三角形で、やや段違いになる腹抉は、外反気味である。8は断面正方形の針金状鉄器。13~22は、図示した以外にも多数の小片がある。兜か鎧の残欠であろう。13~18~20はその小札で、13は片側縁に、18は両側縁に小孔をもつ。13下端や14~17では、帯板が円頭鉢で小札に留められている。21~22も小札に紙が打たれているが、座金に銅が使われているものである。鉛塊は、図示した9・10の他に2個の小塊がある。いずれも熱で溶けて固まった状態である。鉛環等の装飾品の材料か、逆に製品を溶かして他の品物をつくる段階のものであろう。材質は東京国立文化財研究所 江本義理氏による蛍光X線分析では、鉛が強いスペクトルを示したが、他に銅が弱、錫が微のスペクトル強度を示し、鉛があるのは鑄錫の可能性もある。11はF3の灰層から検出された銅製の刀装具片で、銀金物か精金具であろう。12の銅製の粗製の鋒は、4片に意識的に折り割られている。そのうち3片が見つかっている。装飾品として使用していたものと思われ、それを9・10の鉛塊のように、つくりかえるために溶かす前段階として割ったものであろう。

(三浦 正人)

鍾石：B郭には鍾石の集中箇所が4か所検出された。ブロック1は、35個が50×30cmにまとまって、建物跡側壁から検出され、他のブロックに比し、小さめの鍾石で構成される。ブロック2は、建物跡中央部から検出されている。ブロック3は散漫な分布を示し、個々の鍾石は大きめのものである。ブロック4は、穢列内から検出されている。

動物遺存体については、A郭の当該部分を参照。

(寺崎 康史)

表6 B郭出土遺物一覧

No.	名 称	材 質	寸法 cm ( ) 内現存部	備 考	No.	名 称	材 質	寸法 cm ( ) 内現存部	備 考
41 1	鍾 石	鉄	内厚2.1	内厚・口縁破片・裏出土	41 11	刀 鋸 具	銅・金	長2.5	略缺 ?, F-3半
2 刀	鍾 石	鉄	長3.1・最大幅3.4	刃厚削	12	鍾 石	銅	長19.5・幅8.4	1/4枚
3 刀	鍾 石	鉄	長(14)	刃先部分	13~	?	鉄・銅	13で幅4.3・底部分厚0.9	鉛の部分か?
4 ナ タ	鍾 石	鉄	長27.8・刃厚5.9	裏出土	14	?	?	21, 22で鉛環が剖離	
5 刀 子	鍾 石	鉄	長(7.7)	刃厚久・茎鍔分	No. 名 称 鋼 石	平均長 cm	平均幅 cm	平均重 g	
6 刀 子	鍾 石	鉄	長(7.8)	刃厚久・刃厚曲	40 第1 鍾 石	35	5.6	2.6	1.7
7 鋒	鍾 石	鉄	長15.3	直長い・奥鋒腹抉三角形	第2 鍾 石	43	7.6	3.6	2.3
8 針金状鉄器	鍾 石	銅	長27.8・刃厚5.8	刃厚角	第3 鍾 石	38	8.0	4.3	2.6
9~10 鉛 塊	鉛 塊	鉛	9~8.8g・10~8.8g	個々に2片あり、計24.0g	第4 鍾 石	33	6.6	3.0	1.9

表7 B郭出土動物遺存体一覧

遺物名 遺物番号	層位	魚						鳥			哺乳類			備 考	
		ナ テ キ サケ・マス類			キ ュ ウ テ キ イ ト ウ サケ・マス類			コ イ ウ タ イ サケ・マス類			その 他 鰐、鰐など				
		部位など	重さ	部位など	部位など	重さ	部位など	部位など	重さ	部位など	重さ	部位など	重さ		
B-①	III	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	シカ?	220.3g	手手または 手足骨片	
B-②	+	サケ類体	約 7.05	サケ類体	+	サケ類体	0.1	鶴	1.1	+	3.5				
B-③	+							鶴	0.1	+	4.9				
B-④	+											4.0			
B-⑤	+							鶴体 I	0.3	+	0.2				
B-⑥	III							鶴体 I	+	+	5.2				
B-⑦	+											シカ?	1.9		
F-3		サケ類体	約 14.0.1	サケ類体	+	サケ類体		鶴	2.6						
F-2	3 階							鶴	0.2						
E-E ラバント シキ内		サケ類体	約 30.0.1					鶴	0.2	シカ?	5.3				



1 ポロモイチャシ跡全景  
(沙流川対岸より)



2 河原から見た  
ポロモイチャシ跡  
(A郭)



3 ポロモイチャシ跡  
調査前 (壕はA塙)



1 ポロモイチャシ跡  
調査進行状況  
(火山灰除去後 B郭確認)



2 調査進行状況  
(左：A郭・右：B郭)



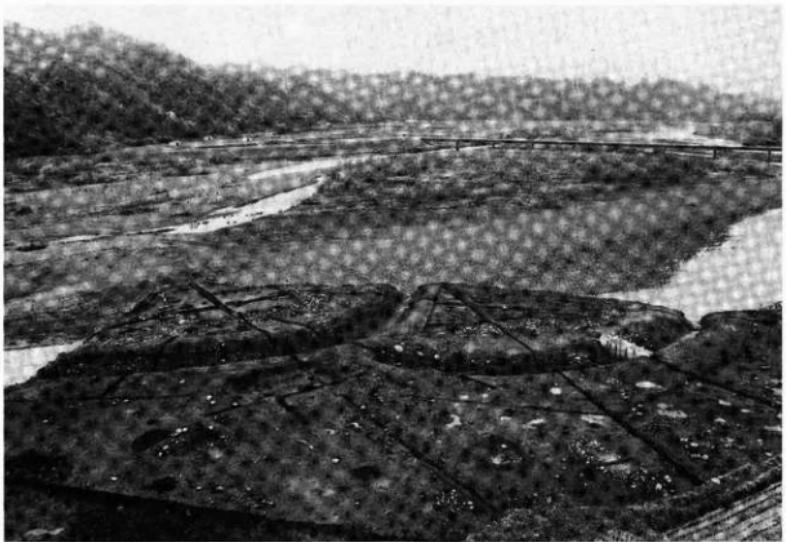
3 東側から見たチャシ跡 (手前：B郭)



4 チャシ跡の写真撮影



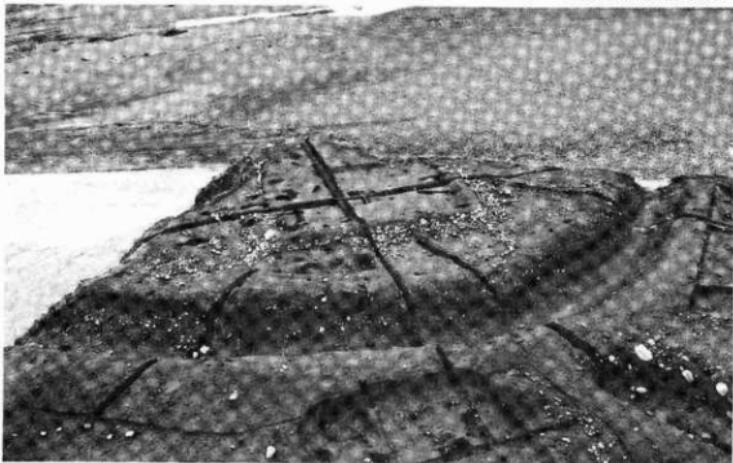
1 調査進行狀況



2 調査進行狀況（59年度終了時）



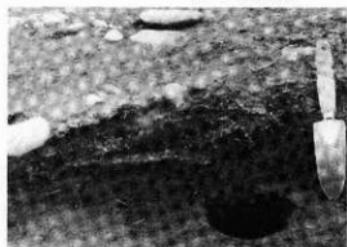
1 A郭火山灰除去後状況



2 A郭全景



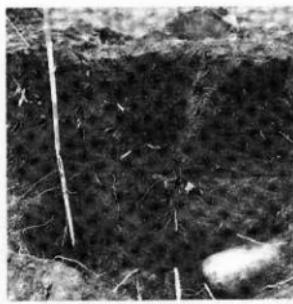
3 A郭の壕断面



4 A郭建物跡 炭化材・柱穴検出状況



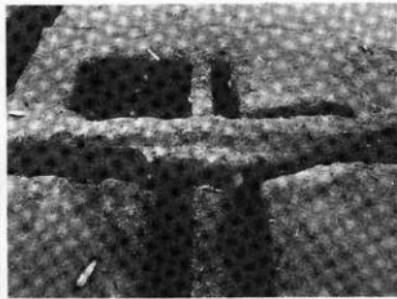
1 A 郭建物跡 盛土内側の状況



3 建物跡 柱穴断面 (P-36)



2 盛土内側 建物跡炭化材検出状況



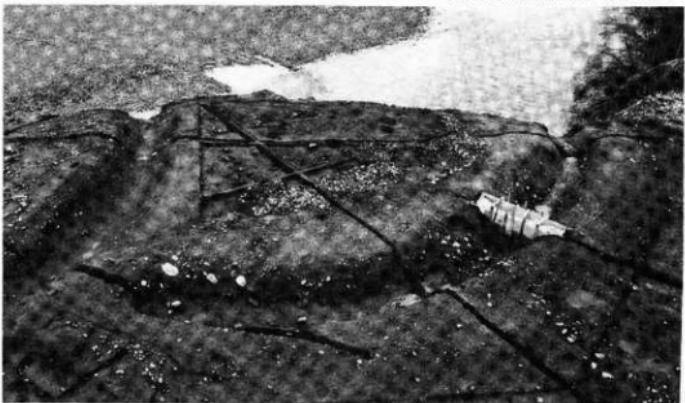
4 建物跡 炉断面



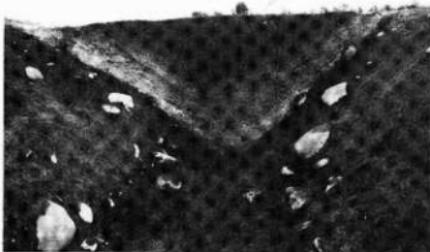
5 A 郭建物跡 溝・柱穴検出状況



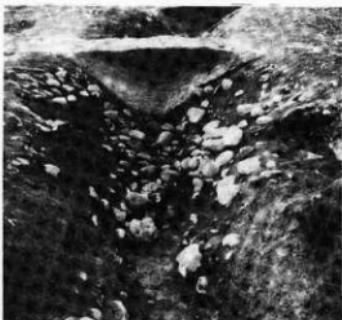
1 B郭火山灰除去後状況（壕確認）



2 B郭全景



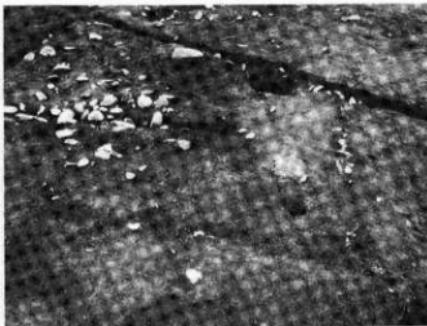
3 B郭の壕断面



4 B郭の壕内状況

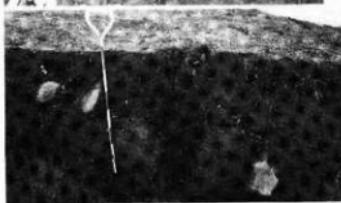


1 B 郭建物跡 溝・柱穴確認状況

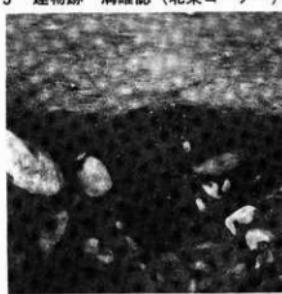


3 建物跡 溝確認（北東コーナー）

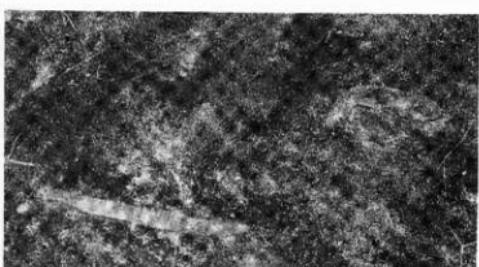
2 建物跡  
溝確認  
(南東コーナー)



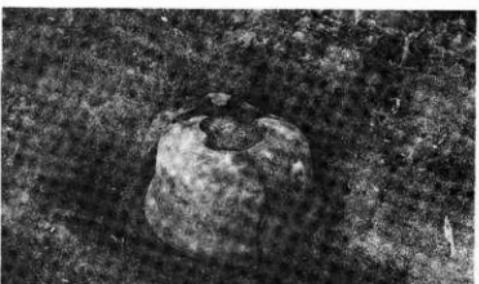
4 建物跡 柱穴断面 (P-21)



5 建物跡 柱穴断面 (P-23)



2 A郭 刀・鎌出土状況  
1 A郭の塙 絵唐津大皿出土状況

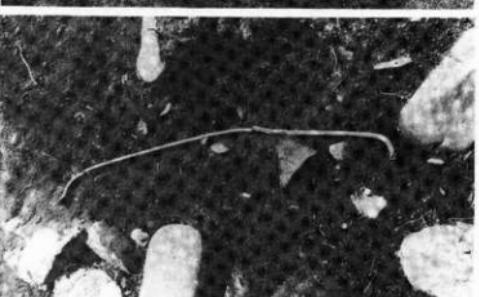


3 A郭 内耳鉄鍋出土状況

4 A郭突端 内耳鉄鍋出土状況



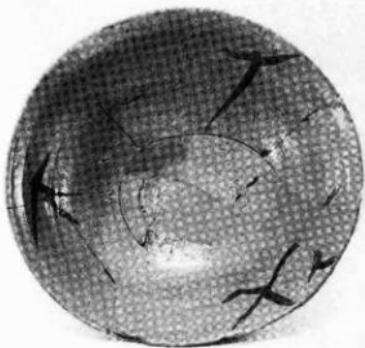
5 A郭 古銭出土状況



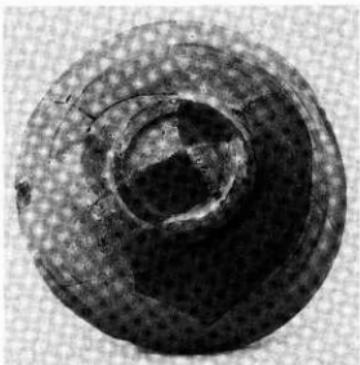
6 A郭 鎏金出土状況



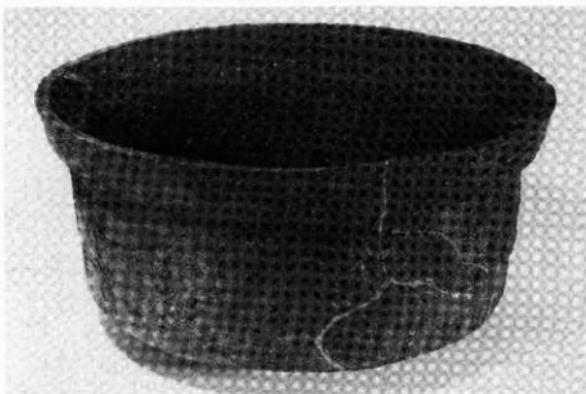
7 B郭 再利用刀出土状況



1 A 郭塙 絵唐津大皿（内面）

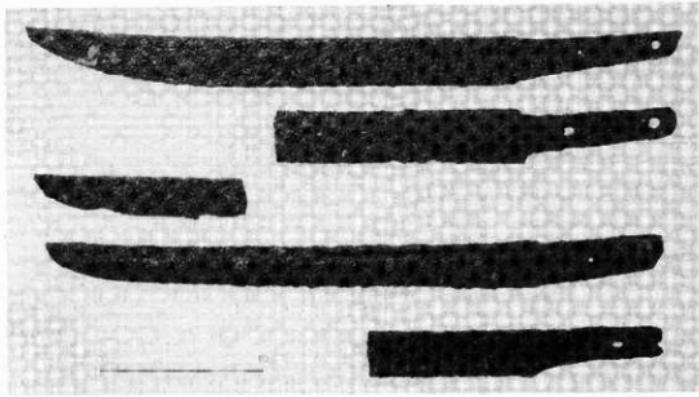


2 絵唐津大皿（底部）

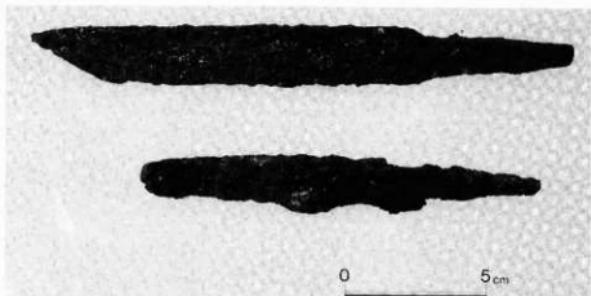


3 A 郭 内耳鉄鍋

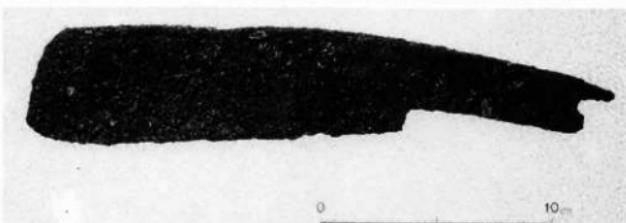
4 鍋底部一文字湯口



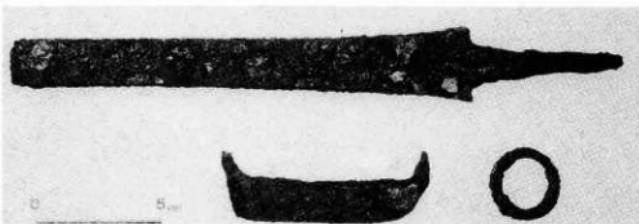
5 A 郭 刀



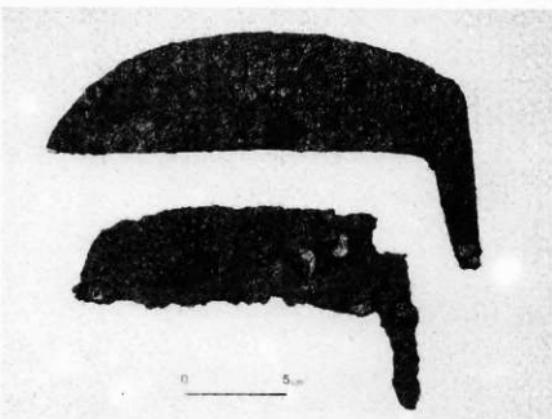
1 A郭 刀子



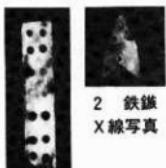
2 A郭 ナタ



3 A郭 ノミ・  
苧引金



4 A郭 錄



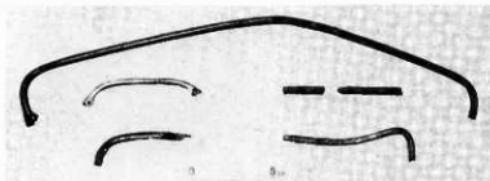
1 小札 X線写真



4 A郭 古銭  
(元祐通宝、X 1)

0  
5 cm

3 A郭 鉄製品



5 A郭 鎚等縁金

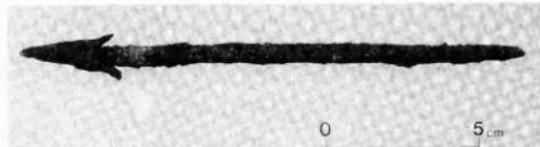


6 A郭炉 鹿角製鉢先



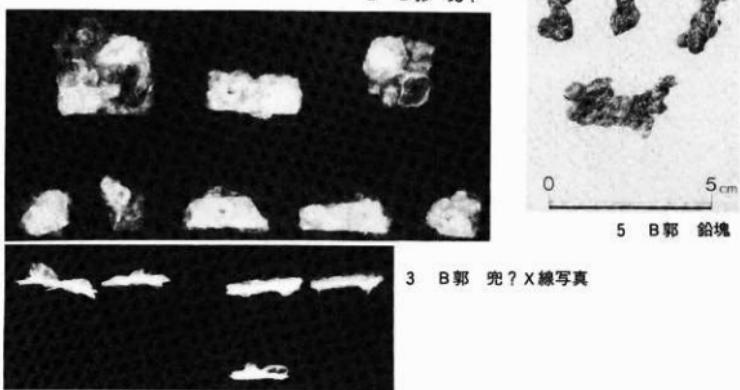
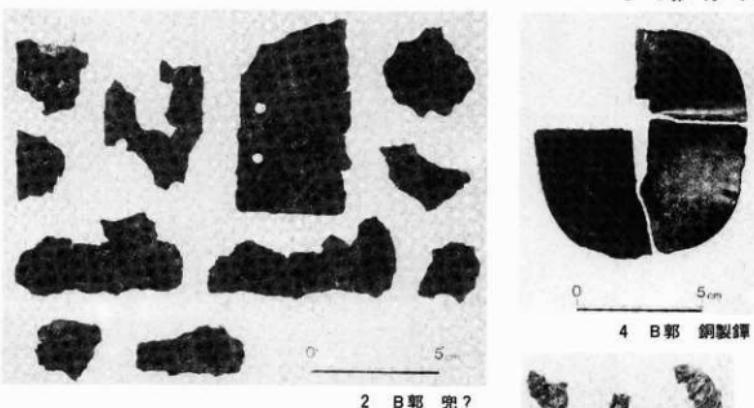
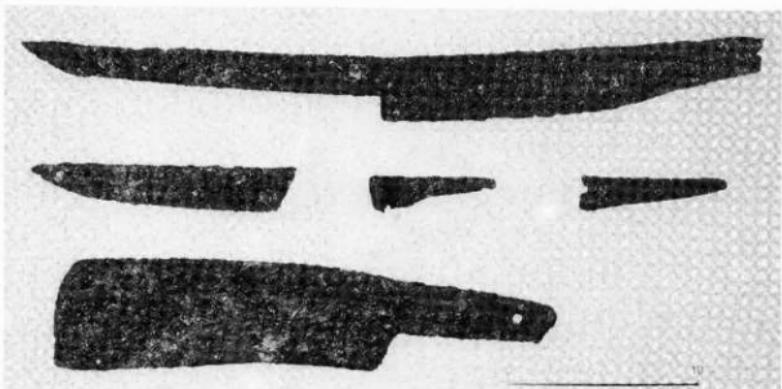
8 B郭 金属製品

(右上: 鋼製刀具  
(下: 内耳鉄綱))



0 5 cm

9 B郭 鉄鎌



---

北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第26集

**ユオイチャシ跡・ポロモイチャシ跡・二風谷遺跡**

—沙流川総合開発事業（二風谷ダム建設用地内）

埋蔵文化財発掘調査報告書—

昭和61年3月26日発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒064 札幌市中央区南26条西11丁目

☎011(561)3131

印 刷 国際印刷株式会社

〒063 札幌市西区手稲東3南1丁目

☎011(661)2221

---

